

囲碁の「酷」と人智の「魔」 —— 究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I 4強の特質・行方 (2)

夏 剛 ・ 夏 冰

棋士・芸道の純真な天性を為す童心・向上心・敵愾^{てきがいしん}心

前出の本因坊戦を巡る折衝^{せつしょう}で関西棋院の譲歩に由って対局は日本棋院で行う事と為り、橋本宇太郎九段は予選や総当り戦^{りーぐ}に臨む際、「明日は東京へ五段の先生に教わりに参ります」と皮肉を可く言った。「当時の予選参加者は五段以上であるが、橋本先生にとっては横綱が幕下に教わりに向くとでも言った心境だったのだろう。関西棋院としては、所属の高段棋士を参加させることに成功した以上、細かいことには目をつぶったのである」という解説に続いて、中山典之は現在の完全平等を紹介し両院の交流の少なさを惜しんでいる。「その昔、佐藤昌晴三段（現九段）は新聞碁の低段予選を勝ち抜き、二次予選の抽選で当時全盛の高川秀格本因坊を引き当てた。私などなら“こりゃ駄目だ”と思うかも知れぬが、将来のある棋士は違う。その瞬間、佐藤少年は青ざめたが、やがて顔面紅潮、/“うれしい。万歳！”/と叫んで立ち上がると、猛烈に部屋の中をグルグルと走り出した。嬉しさのあまり、座にいたたまれなかったのである。/棋士の喜びは、何と申してもタイトル戦のような檜舞台に登場することである。それが叶わぬ者は、せめて一流棋士に一度でも顔が合う所まで勝ち進むことだろう。/これは棋士一個人の問題ではなく、囲碁界全体の進歩に関する問題とも思うのだが、泉下の橋本宇太郎先生の思いは、いかがなものだろうか。」⁸⁹⁾中山の「東西両棋院は大合同すべし」の主張⁹⁰⁾の現実性はともかく棋士の向上心は万国共通で、李^イ彥^{セドゥル}が対AlphaGo戦を快諾したのも歴史的な舞台で腕を試したい動機^{ため}に由る事であろう。彼は先方の趣旨^{せんぼう}・対局条件の概要説明を受けて報酬の提示が出ない内に数分で即決^{そっけつ}した⁹¹⁾が、職業^{プロ}棋士乃至人類の尊厳を守る敵愾^{てきがいしん}心・責任感^{まきはる}は囲碁の芸道の純粹さを端的に体現している。

1947年1月16日生れの佐藤昌晴^{まさはる}は67年に三段、翌年に四段に昇進したので、三段時代の「～少年」は『少年法』（48年制定）の満20歳以下や『児童福祉法』（同47）の満18歳以下に抵

触するが、「～青年」ならぬ此の呼称は当時の彼や昨今の李世石等の棋士の初心な一面に似合う。其の頃の^そ高川格（厳密に言えば名誉本因坊）は本因坊9連覇の最盛期を過ぎたものの、自ら唱えた^ま棋士50歳（本人は65年9月21日で成る）^{りんかいほう}限界説⁹²）を否定するかの様に、67年には第11期（最終回）囲碁選手権戦の決勝で林海峰名人（九段、25）を2-0で破り、翌年には林から65年に当時史上最年少で獲った名人位を4-1で奪取し「不死身」と呼ばれた。粘り強い棋風で「二枚腰」の異名が付く林に勝ったから呉清源から「三枚腰」と言われた⁹³）が、**壮年再盛期**の彼との対局に抽選時から**爆発的な感激**を抱いた若手の気持は理解に^{かた}くなくない。一方、^{あこが}憧れの^ま的と為る^{むらかみあきら}当人は共著（村上明執筆）『現代囲碁大系』第18・19巻『高川格（上・下）』（講談社、81・83）の自選53局（25～69）の中で、唯一「さすがに、忘れることのできない一局」の特筆で**強い思い入れ**を記したのが、第7期本因坊戦挑戦者決定総当り戦同率決定戦（対坂田栄男、52.4.23～24）である⁹⁴。「千載一遇のチャンス、この碁はどうしても勝ちたかった」と言う^{おお}大一番を制した^{ひとしお}喜びも一人であったが、**高段棋士と高度人工^{A I}智能の対決は千載一遇**を超えて^{せんざいいちくう}囲碁史上初なので^{チャンピオン}桁違いの魅力を持つ。**AlphaGo 対欧州王者戦の結果発表は勝利宣言よりも**^{セッ}囲碁先進国の強豪群への**挑戦状**と見做せ、先方が設置した**一世一代の晴れ舞台**に**勇躍**に乗り出す事は掲載誌の英文名に因んで言えば、一流の囲碁棋士の天性（nature）に合う自然な（natural）成り行きなのかも知れない。

藤沢秀行は自ら監修した『聶衛平 私の囲碁の道』（^{たばたみつな}田畑光永訳、岩波書店、1988）の序文の中で、「中国碁界の今日を予想し、蒙古の大草原で中国軍団と秀行軍団が相見え、私と聶さんによる大将同士の一騎討ちで雌雄を決めるとというのが以前からの夢だった。この夢はいまも持ち続けている。私が元気にさえなれば…」と書いた⁹⁵。「中国の碁、聶さんの碁」という題の長文の脱稿時（同年6月）に63歳だった彼は、84年に棋聖位を趙治勲から取られた直後に胃癌が発見され切除手術を受け、^そ其の後も悪性^{リンパ腫}リンパ腫の放射線治療、前立腺癌の投薬治療で3回も闘病の末に癌を克服した。89年の応昌期杯3位（林海峰と並ぶ）と名人・本因坊両^{リーグ}総当り戦入りに続いて、91年に3-1で羽根泰正（47）から王座位を獲り、翌年に3-2で小林光一を下し主要棋戦防衛の最年長記録を更新した。健康上・経済面の事情で両軍団決戦が実現しない^そ盡98年10月13日に老齢に由り引退したが、^そ其の**熱氣溢れた夢**を読み返すと**身体**の**老化**より「**心**態」（**精神状態**）の**老化**が**恐い**事を改めて感じる。藤沢は一線を去る際に^{しゅうさい}秀哉本因坊名人の引退碁（対木谷實、38.6.26～12.4）以来の引退3番碁（99.4.16・30、5.14）を打ったが、^{チョフンヒョン}曹薰鉉九段（46）と^{まな}愛弟子^{たかおしんじ}高尾紳路七段（22）に先立って1局目の相手を務めた常昊八段（22、7月に九段昇進）も含めて、彼の死後も頭が上がらない**程畏敬**と**劣等感**を抱き続ける中国の棋士は少なくない。逝去（2009.5.8）の23日後に刊行・発売された『囲碁天地』第11期では追悼特集を組み、通常^{カラー}多色写真と複数の特集の題で飾る表紙には黒地に遺影と「天下秀行」の字だけが出ている。広告の9頁を除く全113頁の内50頁を使った「誌上告別式」（造

語)の中に、棋士・「棋友」(囲碁愛好者)の詩文から成る「記念・秀行永在(永遠在れ)」の欄が有る。聶衛平の「永遠の老師」(永遠の師)に次ぐ馬曉春の「先生,对不起」(先生,済みません)は、故人の期待通りの成果が出せなかった不甲斐無さに強い自責・悔恨を吐露したものである⁹⁶⁾。聶衛平は30年後の回顧の中で第1回中日囲碁擂台賽の主将決戦対局中の酸素吸入に就いて、2時過ぎの1回目の後に30歳弱(実際は27歳)も年上の相手から気を遣われた事に慚愧を禁じ得ないと告白した⁹⁷⁾。藤沢の老後の活躍や呉清源の最晩年の若々しい発想は中国棋士の目標と為っているが、蒙古の大草原より遥かに広い地球規模の「プラットフォーム」での李対AlphaGo戦に血が騒ぐ棋士の中で、上記序文脱稿時の藤沢と同じ63歳の聶は初心に帰る様に神話の持主の矜持を殴り捨てて、第2局の電腦網上(「小米視頻」[映像]「A P P」)中継の解説で「太震驚了!太震驚了!太震驚了!」(衝擊的過ぎる!衝擊的過ぎる!衝擊的過ぎる!)と感嘆を連発し、「由於自己對電腦知識完全的不懂,應該說得向電腦致歉」(自分は電腦に関しては完全に無知なので、電腦にお詫びを入れるべきだと言わざるを得ません)と神妙に謝った。彼は開戦の2日前に機械は人類に勝てないと公言し⁹⁸⁾終戦後も対抗心を捨て切れていないが、4月9日に中央電視台の「開講啦」(著名人が若者に成功体験・人生観を伝授する番組)で、「講義/講演を始めよう」という意の講座名が示す様な後進の師と為る立場に在りながら、入門者が良師に出会った様な興奮で「阿(爾法)老師」(アルファ先生)の敬称を使った⁹⁸⁾。

件の主将決戦の結果を立会人(中国語=「裁判[長]」)陳祖徳が感動に震えながら、「黒勝1又4分之3子」(黒3目半勝ち)と宣言すると、終局の瞬間に対局場の扉の外から傾れ込んで来た仲間や記者等が歓喜の沸騰に浸ったが、聶衛平は中国囲碁の発展に心を砕いてくれている先達に礼を失しないよう只見詰めていた⁹⁹⁾。日本囲碁の「礼に始まり礼に終る」美風と通じて中国の棋士も勝者が敗者への配慮を心得、講評や回顧談で結果に関らず相手を讃え自分を遜る等の儒教的な流儀に大抵従っている。直情径行・豪快飄逸の藤沢秀行は両国共通の儒教的な礼法感覚に囚われない時も偶に有り、例えば初の棋聖防衛戦の第7局(1978.3.22~23)で加藤正夫本因坊に半目勝ちした直後、感想が終り碁石を片付けた時に相手の手を握り、「加藤ちゃん、どうも有難う」と満面の笑顔で言った。あんな嬉しそうな顔の秀行は見た事が無いと記録係を務めた中山典之は書いている¹⁰⁰⁾が、平素の酒乱癖に引っ掛けて言うなら勝利の美酒に酔った無邪気な振る舞いとして見られる。加藤は前年「先生、(棋聖奪取)おめでとうございます。でも先生より僕の方が強いでしょう」と言い、藤沢は「分った。其なら第2期に(挑戦者として)出て来い」と応酬した経緯¹⁰¹⁾からしても、凡人の常識では想像し得ない2人の超一流棋士の純真な闘志と親密な関係が窺われる。加藤は3勝1敗後3連勝されながらも最終局は稍優勢ながら最小差の逆転負けを喫し、御負けに第5局で大石を短手数(131手)で見事に殺され「殺し屋」のお株を奪われたので、22歳年上(52)の先輩に撃退された事は恐

らく断腸の思いであり痛恨の極みであろう。中国では類似の場面で面と向って勝者が敗者に感謝の言葉を発する例は聞いた事が無く、何故なら相手の傷口に塩を撒く追い討ちか意地悪な戯弄と取られかねないからである。現に、夢百合杯決勝第5局（2016.1.5）の終り頃に柯潔は神が来ても2目半負けに成ると思ひ込み、李世石の無意味で損な白274(図1参照)を優勢下の「搞自己的心情」(自分の気持を弄ぶ)為かと疑った¹⁰²⁾。

図1 第2回夢百合杯決勝5番碁第5局, 柯潔(黒, 7目半)vs. 李世石, 最終譜(274~281), 黒半目勝ち

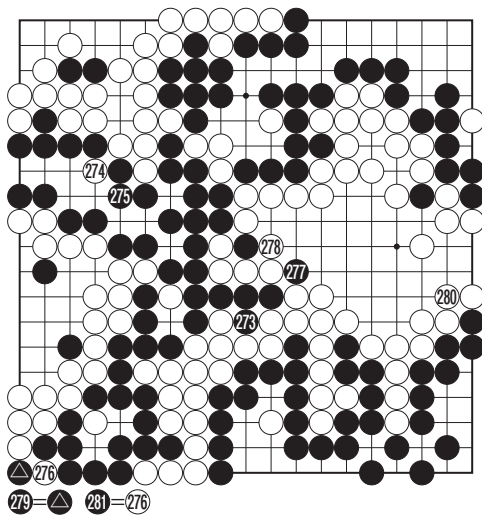


図2 図1に対して白を半目勝ちに導く手順(Xの辺りには左下の劫争いに有利な白の劫材が7回分有る)

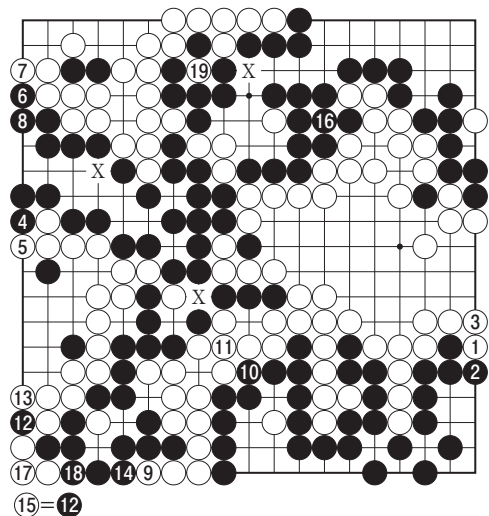


図1・2及び説明の典拠=観戦記「安復当年狂笑」(張大勇)の「実戦図四」と局後検討に由る「図五」(白の最善の収束)及び解説(『囲碁天地』2016年第2期, 35頁)。図2の半目勝ち文中での言及が無く、本稿筆者が中国規則に基づいて計算した結果である。

其の局は「誤謬の合成」の碁の典型の様に交互に過ち最後に間違った方の負けと成ったが、終盤時の軽率な着手で半目負けした李は柯が記者会見に行った後1人で対局室に残り、両手で頭を抱えながら碁盤を凝視し順当な手(図2参照)を見付けなかった迂闊さを5分間悔み続けた。実際に半目の優位しか無いものの終点の寸前まで来たので通常なら勝てるはずであるが、韓国(日本と同じ)の規則と異なる中国規則の特殊性に気付くのが遅かった故逆転を許した。十数年に亘って中国の甲級聯賽に出場し中国棋士との対局を無数にして来ただけに、尚此の場合の戦術に精通し切れていない自分に立腹した¹⁰³⁾のは激情家の彼らしいが、選りに選って初体験が15回目の世界戦王冠獲得に後1歩の処だから運命の悪戯を感じる。第1回夢百合杯決勝の第4局(2013.12.6, 如皋)でも古力の不用意な1手で大石が頓死し、1-3の敗北で世界戦優勝8回の中国最多記録を塗り替える事が出来ず終いであった。栄冠を掴んだ半昱廷は世界

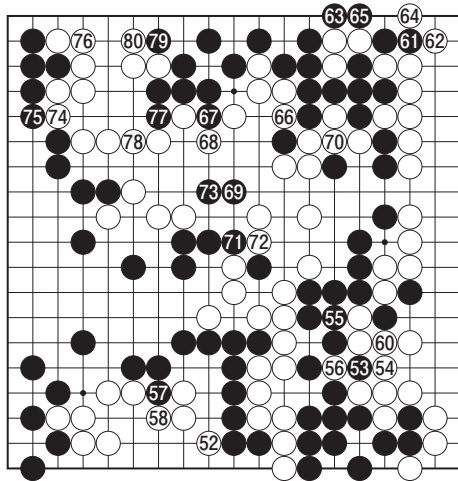
囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

戦優勝に対する論功行賞で同年四段から九段に昇進したが、同年齢の古・李(1983.2.3/3.2生れ)の残念は同棋戦の「古株転落」の「魔呪」^{ジンクス}を超えて、五輪^{サッカー・ワールド・カップ}と同様の魔物が棲む様な囲碁の「一寸先は闇」の不確かさを改めて示した。旧名人戦(読売新聞社主催)第1期の総^リ当^ーり戦最終局(62.8.5~6)に於いても、藤沢秀行八段は橋本昌^{はしもとしやうじ}二九段に屈して9勝3敗と為り、8勝3敗同士の呉清源一坂田栄男戦は持碁^{じこ}で規定通り白番(呉)の勝ちとされたが、持碁勝ち^{じこ}は正規の勝ちより下位とする決りで名人は同率決勝を覚悟した藤沢に転がった(持碁とは「持^じとなった碁。双方の地^ぢが同じで引分けの碁」[『広辞苑』【持碁・市】の語釈])。第15期(朝日新聞社主催の新名人戦第1期)まで続いた其の価値順位の物差しに由って、当初名人に推戴すべしとの声が高かった呉は総^リ当^ーり戦の78局中の唯一の持碁^{じこ}¹⁰⁴⁾で成れなかった。

『現代囲碁大系』第27巻『藤沢秀行 下』(本人解説、^{きやうのひでお}京野秀夫執筆, 1983)には、第1期棋聖戦最高棋士トーナメント準決勝(76.11.11)の対武宮正樹本因坊(八段)戦が有る。もう1つの山で橋本昌二^{あしばや}が足早に逃げ切って大竹英雄を退け7番勝負への進出を決めた後、棋界最高の地位・栄誉を懸けた決勝の出場権を争う此^こ方^ちの闘いは深夜0時過ぎまで続いた。「終局時の両者は真っ青。かねて闊達な武宮も顔がこわばり、藤沢の顔はピクピクいれんしていた。/勝負の難解さ激しさとともに、この一番に賭けた両者の気合い、気力が燃焼して果てたのだろう。/プロの試合、お金が高いと内容も濃くなるし、思わざるドラマも呼ぶ。」¹⁰⁵⁾賞金は棋士の実力や囲碁の意義に対する主催者乃至社会の価値判断を表す物とも言えるが、題の「千金の半目差」が示す藤沢の辛勝から日本囲碁の黄金期の終盤の逆転劇を想起する。「囲碁界七不思議」の1つとして山城宏^{やましひろし}(58~, 85年九段)の無冠が挙げられており¹⁰⁶⁾, 80年代に片岡聡^{かたおか}・王立誠^{さとし}(同年齢)・小林覚^{りっせい}(1歳年下)と共^{さとる}に「若手四天王^{してんのう}」と呼ばれた彼は、7大棋戦に通算6回(84・86・87・92[2棋戦]・93)挑戦しながら獲得に至らなかった。92年に小林光一棋聖に挑む7番勝負では初戦から2連勝し5局目^{おうて}で王手を掛け、第7局(3.18~19)の終盤時も「浸透流」の追い込み^{けいま}に由って必勝の態勢を作り上げたが、黒169の桂馬で敵陣を破った後に最善の着点の1路横に打つ失着(177)で半目負けした(図3・4参照)。15年前の棋聖戦と同様の結末で巻き返した保持者^{ホルダー}の掌中に巨額の賞金が収まったが、2010年から4500万円に増額した日本最高の棋戦優勝賞金の最新の最高水準と照らしても、加藤正夫・山城宏が悔み切れなかった所謂^{いわゆる}「1億円の半目」¹⁰⁷⁾の俗説の根拠に疑問を覚える。

聶衛平は上記訳書の原著『我的囲碁之路』(薛至誠整理[構成], [成都]蜀蓉棋芸出版社, 1987)の中で、棋聖戦優勝賞金の2300万円と名人戦・本因坊戦の同1千万円台を「驚く程高い」とし、心を驚かし魂を揺さぶる決戦で半目負けが2千万円の喪失を意味する恐怖の光景も出たりすると書いた。¹⁰⁸⁾読売新聞社は棋聖戦発足時に選手権料を同社主催の旧名人戦の270万円を1700万円に上げ、朝日新聞社も新名人戦の同1200万円と設定し碁界の活性化を促す相場上昇に寄与したが、今でも1棋戦に於ける1棋士の優勝賞金及び勝負と無関係の対局料は9桁

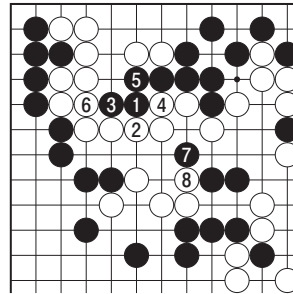
図3 第16期棋聖戦挑戦手合7番勝負第7局, 小林光一 vs. 山城宏(黒, 込5目半), 問題の実戦譜(152~180 [図中下2桁で表示]), 244手完, 白半目勝ち



59=53

図3・4 出典 = 『読売新聞』1992年4月8日「棋聖決定七番勝負 第十六期 第7局」(観戦記 = 福屋和憲) 第7譜・翌日の同第8譜 (1~244完) の参考図及び解説。

図4 羽根泰正が示した図3の黒77(実戦の177)の最善手と変化図(黒半目勝ちか1目半勝ちの見込み)



には届くまい。初期は準優勝賞金の300万円を合せて双方の得失の合計は1億円の1/5に過ぎないので、「千金」の単位の10万倍に当る億は全賞金・経費の概数という牽強附会の解釈も思い付く。「億」は「巨万と有る」の様な誇張表現か〇千〇百万と言うのを億劫がる言葉の綾であろうが、半(目)対(1)億の落差は煽情的でもなく棋戦の魅力と笹棒の利益を棒に振る悲劇を能く表している。藤沢秀行の6連覇に由る獲得賞金総額は税引き前基準で1億円を僅かながら上回ったので、初防衛の結末は連覇の可能性を織り込む意味の「1億円の半目」の合理性に思い至らせる。小林棋聖は山城を阻んだ翌年に加藤正夫を撃退し前人未到の同棋戦8連覇を達成したが、黒169の好手を見て負けを覚悟した¹⁰⁹⁾ 彼が到頭「2億円の半目」とも言える勝ちを掴んだのは、羽根泰正が指摘した同じ中部最強級の弟弟子の「勝ったという思いからの油断」¹¹⁰⁾ と共に、防衛者が次期の大逆転(2敗→1勝→1敗→3勝)でも演じた命懸けの死守の賜物でもある。其の「頑張りズム」と「踏ん張りズム・粘りズム」(造語)は正に昭和の碁の底力と思われ、平成の碁の低迷気味とは逆の中・韓の躍進も同じ「強靱」の最大化に秘密の一端が有ろう。

Google DeepMind 社が李世乭対AlphaGoの5番対局に懸けた100万ドルの優勝賞金こそ、囲碁史上初の1億円台(終局日の相場では約1億1300万円)に達した超巨額であるが、最終局に纏れ込んで半目差で決着する展開に成らなかったものの歴史的な勝負と成った。以前の記録

は第1回応昌期杯の40万ドル(最終日の1989年9月5日=約5800万円)で、独自の規則を作った大会で使わせた台湾の実業家応昌期の熱意と援助は世界最強級と言える。夢百合杯の優勝賞180万元は第1・2期の最終日の相場^{レート}で約3100万円・3300万円相当で、勝者の1局平均の獲得金額は4局を制した昨今の棋聖と略同じ数値に為っている。購買力^P平価^P等を加味すれば中国の棋士にとって180万元の価値は優に日本での1億円を超すが、囲碁の発展の為に創設された同棋戦は大学時代に碁を学んだ**実業家の非凡な情熱**の伝説を作った。倪張根は2012年の三星火災杯決勝3番勝負(古力対李世^イ石^セドル)第2局を観る為に上海に行き、自分の非職業3段(中国では6段が最高。猶、中国の非職業の段位は職業と峻別する様に算用数字を用いる)の棋力と**職業棋士との差を確めようという長年の念願**に駆られて、前夜の宴席で初対面の曹大元九段(50)・陳盈初段(女性, 29)に懇願し深夜まで指導碁を受けた。其^{そこ}処で数人の企業家が華学明の弟子に成っていると聞いて即座に電子郵便物で申し込み、華から此等の弟子が了解すれば最後の弟子にしても可^よかろうという色の良い返事を貰^{もら}った。翌日に引き続き曹・陳及び華の指導碁を受け、昼食で国家^{ナショナル・チーム}隊^{かんたく}総教練^{ゆひん}の俞斌九段(45)・中国棋院囲碁部部長の王誼五段(52)と同席したが、中国主催の国際戦がまだ少なく海外の世界戦に出る棋士の重圧が凄いという俞の話に刺激され、更に対局者・観戦棋士の忘我の境地や大勢の取材陣の質問攻めの熱気に震撼させられて、自分の協賛に由って此の様な世界戦を創設しようと決意を固めて其の日に申し入れた。翌月に華の誘いで第1回百靈愛透杯世界^い囲碁^ゴ公開賽^{オープンセン}5番決勝第3局(19日)を観戦する際、中国棋院の劉思明院長(国家体育总局棋牌[囲碁・中国象棋・西洋骨牌等の室内頭脳競技]運動管理^{センター}中心主任, 58, 非職業5段)等と細部の協議を済ませた。合意書の調印もしない内に発表を急ぐ彼に棋院側は変更^{リスク}の危険性を思料して待ったを掛け、華は後に熟語の「童言無忌」(童^{こども}の言^{ことば}に忌^{タブ}無し)を以て其の彼の天真爛漫^そを揶揄^{からか}った¹¹¹)が、「憧憬」の「憧」の「立心+童」の字形に符合する童心が無ければ此の棋戦の誕生も無い。

『フジサンケイビジネスアイ』紙2016年4月25日の記事「バフェットの御用達の威光/中国紳士服メーカー 北米事業拡大」(Kyle Stock)に拠ると、バフェットは自分が着ている背広は全て中国で仕立てて貰^{もら}っていると自慢している。其の縫製を手掛けて大連大楊創世(従業員約5千人)の創業30周年(09)の際に、儉約家で知られる彼は記念録画で同社の熱烈的な愛好者だと公言し他の背広は捨てたとも話した。価値^{バリュー}投資(割安株への投資)に精通している事は背広購入にも通じており、其の影響で彼が率いるパークシャー社に投資している4人も大楊創世の背広を着始め、中には米マイクロソフトの共同創業者で世界1の富豪ビル・ゲイツも居る。大楊創世は此の程注文製造紳士服の新興企業インドチーノの株式3千万ドル(約33.2億円)分を取得し、**電腦網販売が主と為る同社(本社=加奈陀・バンクーバー)**を通して北米での存在感を更に高めようとした。「投資の神様」の最^{ひいき}頂でも分る**中国製品の世界的な「爆流」**(爆発的な大量流通を表す造語)の1例が、03年に創業した恒康家居科技の「夢百合」

ベッド・マットの米国市場での8%の占有率である。囲碁発展途上地域の欧米を主戦場とする同社の囲碁世界戦への協賛は愉快な話であるが、年商10億元しか無い会社に相応の資金力が有るのかという愛好者の疑問に倪は不快を覚え、12年の純利益1.4億元から700万円を出すのは許容範囲内で地方政府も支持していると答えた。¹¹²⁾ 本社を故郷の如皋に置く独裁経営者だから大金を注ぎ込む決断が出来たのかも知れないが、独りで裁定する必要性から我意を買かねば成らぬ囲碁の有り形との共通も認められよう。「簡単至真、人生如棋」(単純は真の至り、人生は棋の如し)という彼発案の大会標語¹¹³⁾は、純真な気持や単純な手法程実行に移し易く成功の確率が高いという逆説の提示にも為る。

背広姿で出場した夢百合杯決勝初戦(2013.11.30)を落した聶昱廷は翌々の第2局から、棋戦の名称・標語が印字され碁盤の絵も入った大会特製のポロ襯衫を着る格好に為り、賞杯を厳粛な表情で挙げる写真の説明では此の「幸運服」(開運服)の着用が強調された。¹¹⁴⁾ 中国囲碁協会が定めた「中国囲碁競賽(囲碁競技)規則」(02年版)第15条第6項では、「保持衣着整潔」(服装はきちんとしていて清潔である様に)を求める反面「正装着用」の類の文言は無い。共産党治下の中国では1980年代中期まで孫文が考案した「中山装」(人民服)が正装で、外交官でさえ着なかった背広は改革・開放後徐々に現れ良い恰好と認められるに至った。当時の棋士は公式戦で背広の様な正装を着る必要が有るかと言顔で訊く者も居たので、背広の市民権獲得どころか正装が望ましいという国際的な儀礼も定着に程遠い時が長かった。第2回中日圍棋擂台賽主将決戦の前に聶衛平に届いた大量の愛好者の手紙には、対戦相手の大竹英雄の贈り物である背広を今回は着ないよという御節介な注意が有った。上等な背広は高価で厚意の徴と為り前の対局でも此の「得勝服」(勝負服)を着たのである¹¹⁵⁾が、贈り手の「魔法」を疑う失敬や背広に対する不慣れと共に勝負への神経質な拘りが印象的である。聶は前回の対小林光一戦で背広着用の相手に対して「中国」の2字が有る赤い半袖の運動襯衣を着、世界最強の卓球国家隊の女性選手から借りた此の服の体育競技用の性質と鮮烈な色彩で闘志を燃やした¹¹⁶⁾が、国を背負う熱闘の戦場(8月27日の熱海)の暑さを凌ぐ利便性も作戦の計算に入れられた事か。同音・同声調(fú)の「服・福」の相関を信じ勝ちで又繁文縟礼に縛られない二面性は、各自お気に入りの襯衫等で内外の公式戦に登場する多くの中国棋士の姿に見て取れる。

『現代囲碁大系』第38巻『石田芳夫 下』(本人解説、山本有光執筆、1983)の巻頭に、「初防衛の最終局」と題する第27期本因坊戦挑戦手合第7局(72.7.6~7.7)が出ている。「泣いても笑っても、これが最後の大一番」で「最大最強の難敵」林海峰九段に2目半勝ちし、23歳の本因坊秀芳(書家佐々木泰南[加藤正夫の義父]の命名¹¹⁷⁾)は再び栄光を浴びた。¹¹⁸⁾ 続く八段昇進後の次期同棋戦決勝7番碁第1局(73.5.8~9)は「三期連続の対決」と題し、此の1局で流れが片寄り思っても見なかった4連勝で結着が就いたと締め括っている。¹¹⁹⁾ 先番

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

の林は前局の負けに関らず32手までそっくりの大雪崩^{おおなだれしょうせき}定石を用い(図5参照)自信を示した¹²⁰⁾が、同年の第12期旧名人戦挑戦手合7番勝負(8.28~10.20)でも防衛者の石田に3連敗を喫した。3篇目と為る第3局(9.13~14)は2目勝ちなのに解説の題は「三連勝四連敗」であり、^{これ}此に拠ると第1局は序盤有利、途中で緩んで持碁の辛勝、第2局は立ち上がり失着、中盤相手の疑問手で逆転5目勝ち、本局は相手の見落しに由る7目損の持ち込みが勝因だと言う¹²¹⁾。前年の本因坊戦以降(対石田)9連敗中の「哀兵」林は第4局(同月25~26)で背水の陣に臨んだが、「この日の林九段は服装から違っていた。タイトル戦には常に背広にネクタイの同氏が、珍しくスポーツシャツというラフな出立ちであった。」¹²²⁾林は伝説的な「奇跡の大逆転」に就いて3連敗の時疾うに勝負を諦めていたと語った¹²³⁾が、第4・第6局の白番林の持碁勝ちを含めて3局も持碁と成った大接戦の末に挑戦者が投了し、^{くぶくりん}九分九厘掌中^ににしていた名人位が遙かに遠ざかった彼は林の闘志は敵ながら立派だと称えた¹²⁴⁾。第4局の林の珍しい白4目外し(図6参照)は9連敗後の軽い気分転換で深意は無いと彼は思った¹²⁵⁾が、起死回生を図る第4局で着替えた^{スポーツ・シャツ}運動襯衣と通じて尋常ならぬ気合の発露と見做せよう。

図5 第28期本因坊戦挑戦手合7番勝負第1局、林海峰(黒、^{コミ}込4目半)vs. 本因坊秀芳, 第1譜(1~45), 226手完, 白中押し勝ち

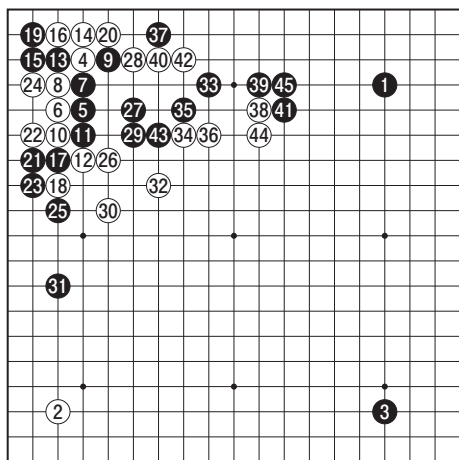


図6 第12期旧名人戦挑戦手合7番勝負第4局、林海峰 vs. 石田芳夫(黒、^{コミ}込5目), 第1譜(1~37), 262手完, 白持碁勝ち

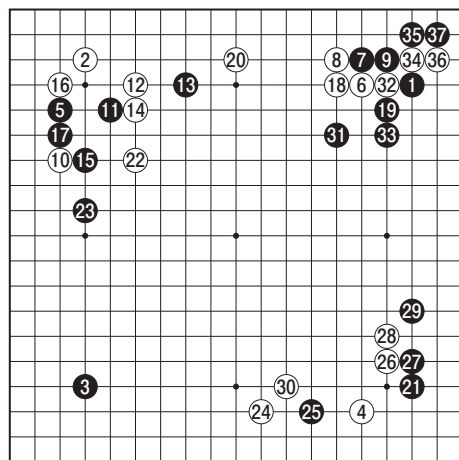


図5・6 出典 = 『現代囲碁大系』第38巻『石田芳夫 下』, 25・45頁。

「当時の主催紙であった読売新聞の山田覆面子さんが第二局後の帰京の機中で、“一体、林さんはどうしたのでしょうか”と心配されて、/“勝負ですから、この後私が四連敗するかもしれないよ”と私が返事したことを思い出した。/自らの運命を予言した如く、本局を^{じこ}持碁負けして、四連敗の泥沼にはまりこんだのである。げに、口は禍のもとというべきか。」¹²⁶⁾石田芳

夫の第4局の解説「四連敗の幕開き」の冒頭の林名人の衣替えに続く此の逸話は、日本古来の言霊（言葉に宿っている不思議な霊威。予言等の靈驗力）信仰を連想させる。言霊の力の働きで言説通りの事象が齎されるといふ認識は現代人には迷信と見られるが、好い結果を祈る自己暗示や悪い事態を嫌う忌諱の深層には然様の思いが見え隠れたりする。1965年の第2期プロ十傑戦の前夜祭で初代優勝者と愛好者投票1位の坂田栄男が挨拶し、「皆さんの御蔭で1位に選ばれました。今年も1位を目指して頑張りたい」と述べた。前回準優勝で人気投票が初回と同じく坂田に次ぐ2位だった高川格が続いて壇上に呼ばれ、「皆さんの御蔭で2位に選ばれました。今年も2位を目指して頑張りたい」と言って会場を沸かせた。優勝を目指して頑張りたいと言いたかったのは山々だけれど、先を越されたので已む無くこんな挨拶したのだ、と釈明する高川は2人とも「抱負(?)どおりとなった」結果を自嘲した¹²⁷⁾が、第2~4期の決勝3番碁で藤沢秀行/林海峰/坂田に負けたので素直な表現とも思われる。73年の名人位防衛戦で口走った不吉な結末を迎えた石田芳夫は79年の第3期棋聖戦決勝に際して、「秀行先生と番碁を打つのは初めて。建前としてはいい機会だから一所懸命勉強させていただきます、ということでしょうが、本音の方は四分六分とはいかないまでも四・五対五・五で棋聖は私のものでしょう」という挑戦の弁を發した¹²⁸⁾（「番碁」は同じく『日本国語大辞典』にも無い「番勝負」[主として囲碁・将棋の個人戦で、同じ対局者同士が複数回闘い勝数の多少で優劣を決める仕組み]を表す囲碁用語）。初代棋聖獲得を決めた対橋本宇太郎戦第5局の終了後に解説者の加藤正夫は祝意を表すと共に、「しかし、私と先生がいま戦えば六分四分で私の勝ちでしょう」と挑発的な本音をぶつけた¹²⁹⁾。石田は一応儀礼的な謙遜を前面に出し異名「コンピュータ電脳」らしい小数点付きの勝算を示したが、言葉・心理の上で節目と為る3連覇を目指す秀行は流石に坂田と同じ大正生れの勝負師で、「石田君の碁を並べてみると、その強さをひしひし感じていやになったよ。計算は明るいし、手も見える。確かに寄せもうまい」と認めた上で、「しかし負けるつもりは毛頭ない」¹³⁰⁾という自信満々の豪語で寸分も譲らぬ闘魂を顕にした。

AlphaGo が活用した中国流布石の変遷に表れる棋道のイノベーション創 新

同じ大正生れの高川格は晩年に「野性的な直感力が乏しい」点を自分の碁の弱点に挙げた¹³¹⁾が、中山典之が「常識人」「紳士」と評した¹³²⁾彼は棋風・人柄とも藤沢・坂田の「ワイルド狂野」に縁遠い。彼は53歳で名人と成った時報道人に対して、「この年になって二期も三期も名人位を続けようなどと、大それたことは考えない。この一年間、床の間を背にして打たせてもらえるだけでもしあわせです」と語った¹³³⁾。回顧談に拠れば翌1969年の防衛戦（対挑戦者の林海峰前名人）でも其の心境であったが、2-4で一矢を報いられて「公約通り(?)、一年で名人位を明け渡すことになった」結末は、強気に徹する秀行が4-1で石田芳夫を撃退し

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

た有言実行とは表裏一体に言霊を感じさせる。石田は78年暮れに2-1で工藤紀夫九段(38)から王座位を奪って2年振りに無冠から脱し、棋聖戦挑戦者決定3番勝負で優勢の坂田に2-1で逆転勝ちし好調の再来を見せただけに、其の圧勝で「全棋界が脱帽、目を剥いた感があった。石田はどうしても自分の調子がかたず、“藤沢棋聖は対局相手に放射能をふりかける”の言も出たほど。棋聖の勝負に対する緊張、高ぶりと、着手の冷静さが巧みにマッチしたシリーズであった。」¹³⁴⁾此の解説中の藤沢をAlphaGoに置き換えれば対李世^{イセドル}5番碁の情景・反響と一部重なり、全棋界が目を開く中で聶衛平が其の第2局の好手に捧げた礼賛は正に「脱帽致敬(敬礼)」である。「^{コンピュータ}電脳」石田並みの正確無比な計算力で名高い李世^{イセドル}は持前の覇気で早々に全勝を宣言し、開幕式では勝負師の嗅覚で失敗の恐れを直感したのか1局落すかも知れないと言い直した。野性的な直感力と対極的な洗練された洞察力を発揮したAlphaGoは緊張・高揚どころか、勝負に賭ける執念も意思表示も無い儘^{コンピュータ}電脳らしく機械的に淡々と肅々と進めたのみである。此の人工^A智能^Iの傑物は人間と違って直立歩行する事も手を使って道具を作る事も出来ず、学習・記憶・判断・創造に於いて脳力が異様に発達しているのに言語表現力を有しないが、其故に仏典『維摩経』が言う「黙如雷(黙は雷の如し)の様な無言の迫力を秘めている。

ケーブルTV囲碁・将棋チャンネルで2016年7月28日に「Google DeepMind チャレンジマッチ」第3局が放送され、解説者の王銘琬九段は白番のAlphaGoの右辺に布いた8の掛りと10の大桂馬^{おおけいま}縮り(図7参照)に就いて、相手が此の2子の間に入ったら有利に戦おうという頑張った手として評価し、実際に打つ棋士は居ないが自分はこんな型^{パターン}が好きで打ちたくなるから嬉しかったと語る。台湾生れの彼は何れも外国出身者同士の決勝を制して主要棋戦の選手権を3期保持し(00年に趙善津^{チョウソンジン}[29]から4-2で本因坊位を奪取し、翌年同棋戦で4-3で張栩[31]の挑戦を退け、02年に趙治勲[45]を3-2で王座位から下ろした)、日本の碁界に能く見られる「30代後半の黄金期」には此等の輝くばかりの実績の他に、満37歳(1998.11.22)の直前に日本棋院機関誌『棋道』7~12月号に「新 おすすめ正統思考法」を連載し、厚味重視の棋風に基づく「ゾーンプレス」戦法を打ち出して序盤・中盤理論に新風を齎した。広い処から打つとする布石の常識を踏まえて蹴球のゾーンプレス(自陣内に空間を多く生み出す積極的な守備)戦術を取り入れて、模様^{ゾーン}の幅と相手への圧力の有機的な結合に由って全ての石の効力発揮を目指す発想である。模様^{ゾーン}の幅や中央を重視する価値判断と独特の配置感覚から実験的な着手も開発された(図8参照)が、清新な「銘琬^{ワールド}世界」よりも思い切った此の布陣は「AlphaGo^{ワイルド}野性」の新感覚と言えよう。当然ながら棋士も囲碁愛好者も幾らAlphaGoが好みに合っても勝って欲しい気持が無く、88年に世界初の女性九段と成り翌年中国隊^{チーム}を離れ後に韓国棋院に移籍した芮乃偉(52)も、俱に北京で百霊杯予選に参戦中の藤沢里菜三段(17、藤沢秀行の孫)と観戦の形勢判断を語り合う際に主語は全て使わず、どの国の棋士も一致して李世^{イセドル}を応援し「良い」も「悪い」も彼の方を指すのだと書いた¹³⁵⁾。世界の棋士・愛好者と多くの一般人が心

図7 ^{イセドル}李世石(黒, ^{コミ}込7目半)vs. *AlphaGo* 第3局, 第1譜(1~14), 176手完, 白中押し勝ち

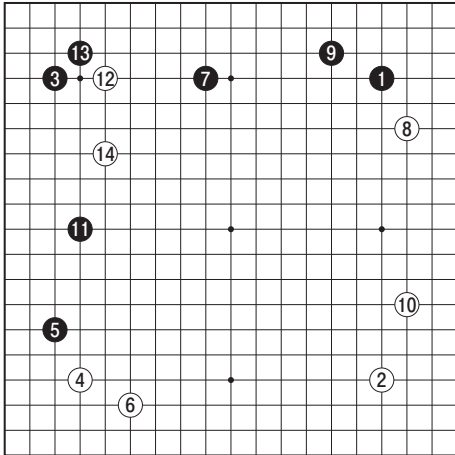


図8 第31期棋聖戦最終予選1回戦(2006.2.2), 王銘琬(黒, ^{コミ}込6目半)vs. 趙治勲, 第1譜(1~15), 188手完, 白中押し勝ち

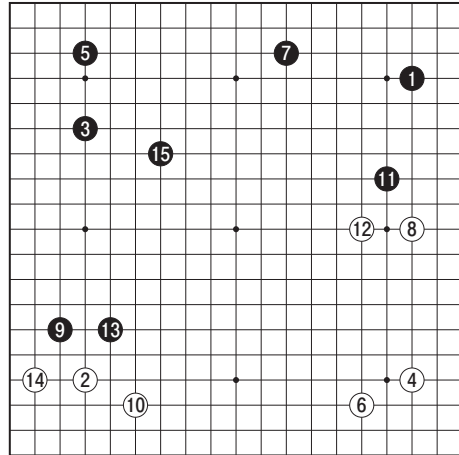


図7 出典 = 洪敏杓・金振鎬著, 洪敏和訳『人工知能は碁盤の夢を見るか? アルファ碁 VS ^{イセドル}李世石』, 108頁。
 図8 出典 = 「碁譜う」(www.kihuu.net, たけのご囲碁協会主催の^{ネット}電腦網上日本最大の囲碁碁譜・碁碁情報基地)。

を1つにした点でも今回の対戦は画期的であるが、王は本局総評の締め括りで訊き手の囲碁ライター^{さのまこと}佐野真の「アルファ碁強し」の賛嘆に同調し、爽やかな笑みを湛えながら聶衛平の激賞と同じ「脱帽です」と素直に新強豪を褒め讃えた。

棋士・台湾男性らしい優しさで有名な王銘琬は「趣味は女房孝行」と公言した愛妻家である(夫人劉^{れいじ}黎兒は台湾『中国時報』紙東京特派員を経て作家^{デビュー}出世を果し, 2005年[49]台湾で初の小説『棋神物語』[来日後棋士に成る台湾少年の奮闘記]を商周出版より刊行した)¹³⁶⁾が、^{イセドル}李世石も06年の結婚・長女出産後に内外碁戦の成績が飛躍的に良くなった¹³⁷⁾事も有って、同じ歳の夫人^{キムヒョンジン}金賢珍(元教師)と娘^{イヘリン}李慧琳への愛情が深く良き夫・良き父親として知られ、娘の留学に同伴する夫人の^{カナダ}加奈陀滞在を了解し2年も独り暮らしに甘んじた事は美談と為る¹³⁸⁾。披露宴の前日と翌日(3.11・13)^{ソウル}と北京の間を往復し春蘭杯1回戦・2回戦に出場し、日本のカタリン五段(^{ルーマニア}羅馬尼亞出身, 32)と中国の羅洗河九段(28)に連勝した壮挙¹³⁹⁾は、同年1月の三星火災杯で中国棋士として初めて番碁で^{イチャンホ}李昌鎔を破った羅に仇を討った上で、前年の春蘭杯以降世界戦で優勝できなくなった^{イチャンホ}李昌鎔に取って代る^{あだ}新覇者の威風を示した。04~09/13~15年に主将格として参加した中国囲碁甲級聯賽では06年から当年契約の際、1局勝てば1.1万^{ドル} (06年末=約130万円) ^{もら}貰い敗局は報酬不要という勇ましい条件を出し、結果的に主将として07~09年の19連勝(08年は8戦全勝)を遂げて内外を驚かせた。¹⁴⁰⁾強烈な

闘争心を持つ自信家の「行動の狂人」振りには盤上の大胆不敵な打ち回しと符合するが、AlphaGoの挑戦に受けて立つ時の彼も恐らく全勝又は勝ち越しの確信しか念頭に無かった。錫婚式(結婚10周年記念日)に勝負が付く可能性の高い第3局を行う日程に同意した事は、応援に来る夫人・娘への贈り物を兼ねて良い思い出を作りたい気持も有ったかも知れない。1局目の相手を侮る様な黒7(後掲)等の着手に現れた甘さが対戦の前から生じていたとすれば、解放軍の金門強攻の「輕敵情緒」に由る「驕兵必敗」の様な結末も理に合った帰着と言える。中国語で「驕」と同音・同声調(jiāo)の字を使う「焦兵必敗」という造語を思い付くが、選りに選って此の日も苦戦を強いられた李は焦りからか序盤早々に黒15の敗着を打った。

黒1・3・7の「高中国流」と5の掛り・9の締り・11の開きで築こうとした勢力圏に、AlphaGoの白12は上辺と左辺の交差点に在る左上隅の1子への1間高掛りで割り込んだ。黒13の尖は隅の地を確保する堅実な手で敵の根拠を奪って攻める狙いも秘めているが、白14の2間飛びは不即不離の輕快な運びで好みの中央を目指しつつ黒模様を消して行く。王銘琬は解説で上辺~左辺の配置は能く有る布石で14も「古来からよくある」と言ったが、直ぐ笑いながら「古来って言うと、中国流あるところから結構この恰好は……」と補足した。「中国流」とは隅の締りよりも辺へ展開する速度と隅一辺一隅の連携を重んじる布石法で、江戸初期の4世本因坊道策の小目から締りを省いて辺の星脇へ開く手法が原形と言われ、本格的に開発したアマチュア棋士・囲碁評論家・著述家安永一^{やすながはじめ}の首唱及び伝授に由って1960年代前半に広がり、間も無く中国で王者陳祖徳の研鑽・実践と好勝率の成果に由って体系化・普及に至った¹⁴¹⁾が、66年に訪中した島村俊宏(当時の名前)九段は此を逆輸入し日本での流行の端緒を作った¹⁴²⁾。『現代囲碁大系』第14巻『島村俊廣』(本人解説、本田順英執筆、81)の「略年譜」に、66年の特記事項として「訪中使節団団長として中国を訪れ、中国流布石を日本に紹介する」と有る¹⁴³⁾。自選30局中の第21局(第16期日本棋院選手権戦3回戦、対林海峰九段、68.10.31)は、第1譜解説の題「元祖中国流」の様に中国で流行した趣向を率先して使う試み(図9参照)が見所である。安永一は『中国の碁』(時事通信社、77)第IV章「日中交流」の「中国流、“崩れ三連星”の出現」の節で、東京アマチュア研究会で自ら提唱し此の布石を来日の中国選手に対する講義で紹介した処、翌年の公式戦の第1回戦で黒番の中国選手が全員此の構え(「低中国流」)を取る様に成り、数年後の訪中で此の新手法に悩まされた島村俊宏が帰国後各種の棋戦で使い始めた結果、此の新法が「島村流」或いは「中国流」と新聞対局等で囃された、と源頭・名称の由来を語っている。¹⁴⁴⁾「いささか本家名乗りみたいでいい気持ちがない」としながら、中国で受け継がれ日本側が創作した「中国流」の命名は当を得ていると容認の意も示された。¹⁴⁵⁾

「すべてをいい加減にせず、トコトンまで自分で検討する中国は、碁でも前年、筆者が提唱したこの“超新布石”の構想を、帰国してから一年、選手たちの間で集団検討を加え、そこに

図9 第16期日本棋院選手権戦3回戦, 島村俊宏 (黒, 込4目半) vs. 林海峰, 第1譜(1~23), 280手完, 黒半目勝ち

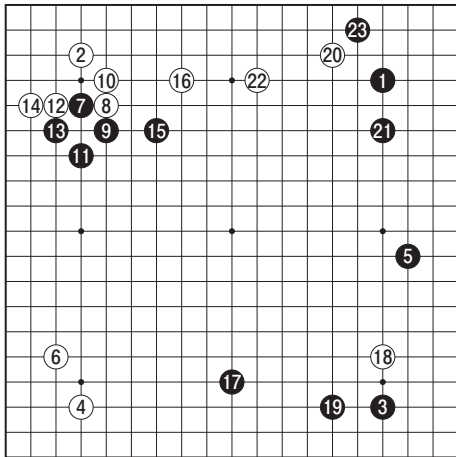


図10 李世乭 vs. AlphaGo (黒, 込7目半) 第2局, 第1譜(1~29), 211手完, 黒中押し勝ち

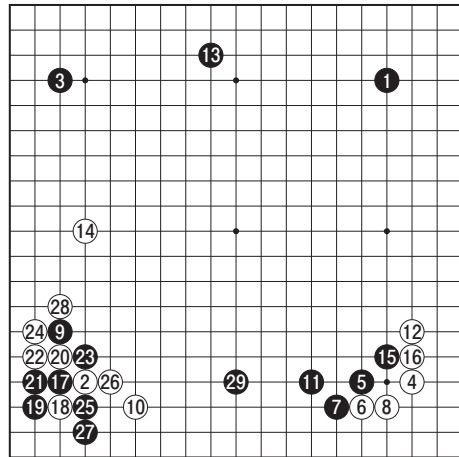


図9 出典 = 『現代囲碁大系』第14巻『島村俊廣』, 193頁。図10 出典 = 『人工知能は碁盤の夢を見るか? アルファ碁 VS 李世乭』, 76頁。

理のあることを発見した」と言う推論¹⁴⁶⁾の他, 「現在盤上に置かれている黒白の石が互いに関連し合い, 一方の長所が他方の短所を互いに補い合って一局の碁を形成するという社会主義国家的な構想こそ, 碁の真理にほかならない」とする断言¹⁴⁷⁾も理由に為った。高中国流も自分が首唱者だとした主張に従えば中国流を「安永流」と呼ぶのも実情に合うが, 日本^アの非職業強豪小集団研究の成果が競技拳国体制下の中国棋士群に由って改造されたし, 安永一は「稀有の中国通」(同書巻頭の囲碁アマ名人^{きくち やすろう}菊池康郎「安永先生と中国の碁」の言¹⁴⁸⁾)で, 木谷實・呉清源と共著の『圍棋革命新布石法』(平凡社, 34)でも陰陽哲学を活かしたので, 中国流の発想は安永流だという菊池の力説¹⁴⁹⁾が一定の共鳴を得たのに当人が意を介さないのは, 中国囲碁史研究者らしい文化的な親近感や共同創造・運用に由る技法進歩への情熱と共に, 中国棋士の旺盛な意欲・俊敏な実践や先達の術を以て先達を制す後進への敬意も有ろう。木谷・呉両五段は上記著書の序で共著者の日本棋院編^{しゅう}輯長安永四段に就いて賛辞を惜まず, 「氏の棋力は素人棋界の随一であり, 時には私達専門家をさへ後に瞠若たらしめる(中略)。圍棋の理論的分野に於いては他の追随を許さないもを持つてゐます」¹⁵⁰⁾等と書いた。勢力や中央への発展性を重視する三連星の新法に対して中国流は第1.5次布石革命と言えるが, 今回も推進者・伝道師を為した安永が専門家を瞠若たらしむ「素人」である事は興味深い。例の聴講の頃「まず“日本に学ぶ”という建前を堅持していた」¹⁵¹⁾当時の中国の一流棋士の實力は, 初期の交流戦の成績が示す様に日本の非職業強豪と職業低段者の間に跨る感が有った。日本から得た示

唆を基に「超“新布石”」強化版を打ち出し島村俊宏を手古摺らせた結果は、学習対象とも為る非職業強豪の域から職業高段者並みに昇ったAlphaGoの躍進を連想させる。中国で生れ日本で栄えた囲碁の此の布石は日本で祖形が現れ中国で大成したのであるが、時の囲碁王国の本格派の代表が54歳の訪中で吸収し自ら応用した積極性は称賛に値する。AlphaGoの自己学習に対して国家間や棋士間の相互学習も囲碁創新の有効な手段と為るが、日本所産・中国育成の此の流儀は韓国でも広く使われAlphaGoまでが対李世石戦で採った。人工^A智能^Iの異彩が殊に眩しい第2局で黒11の掛け粘^{つぎ}の次の手抜き(図10参照)が専門家を驚かせたが、下辺の開き(左寄りの星脇への3間・低位が90年代韓国の主流)より上辺の星脇を選んだのは、李の第3局の高中国流と好一対を為す低中国流だけに此の型^{パターン}の生命力を思わせる。

『現代囲碁大系』第23巻『坂田栄男 下』(本人解説、諸井憲二執筆、1982)の25局中の第20局(第17期十段戦第3次予選、78.4.20)で、同年日本棋院理事長に就任した当人は低中国流で白番(2・4は星・三々)の島村俊廣のお株を奪っている。第1譜解説「島村流」が言うには、此の黒1・3・5は島村九段の愛用に由って「島村流」と呼ばれた事も有り、星脇の石を1路高く打つのは後に生れたもので低いのが中国流の原流であるが、「高ければ中央に厚く、低ければ地にからい。当然の理であり、どちらを運用するかが鍵になる。」¹⁵²⁾第14局(第21期日本棋院選手権挑戦手合第5局、対挑戦者加藤正夫八段、74.2.12~13)でも、彼の最初の3手が「当時の流行布石」の低中国流である¹⁵³⁾し、第19局(第2期名人戦挑戦者決定リーグ戦、対白石裕九段、77.4.21)では、先番の相手の低中国流に星・三々で対抗するという「大流行の布陣」と為っている¹⁵⁴⁾。第21局(第3期同棋戦、対梶原武雄九段、78.5.18)の黒番の低い中国流は、「この年よく打った布石である。不思議と勝率がよく、ゲンをかつぐ。勝負をする人の心情であろうか」と振り返る¹⁵⁵⁾。定石の選択・応用と勝率の相関度は使い手の巧拙に由る処が大きいと考えて間違いが無く、世界中の強豪や既成の囲碁の智慧の貯蔵・再生産装置と言えるAlphaGoの選好・工夫は、囲碁の発祥地と直近の最強国の名を冠した此の現代布石の活性化を促し続けるであろう。第22局(第3期棋聖戦最高棋士決定戦準々決勝、対工藤紀夫九段、78.11.26)の黒1・3・5の高中国流や、第23局(第34期本因坊戦挑戦者決定リーグ戦、対小林光一八段、79.5.3)の相手の高中国流に対する白4・6・8のミニ中国流(図11参照)は、中国流全盛時代の日本に於ける進化・発展を示している。ミニ中国流は稍寸詰りながら思想は同じで小目への掛りを打ち難くさせていると論じた¹⁵⁶⁾が、90年代に日・中・韓で流行した此の型は約300年前に道策が部分的に試みたとされている。元禄9年11月29日(1696.12.23)の御城碁(対安井仙角、2子局)で打った白1・3・7は、置碁の性質や手順等の違いこそ有れミニ中国流と同型(図12参照)として認められる(置碁とは「囲碁で、技量に差がある時、下手^たがあらかじめ二目以上の石を置いて打つ対局」[[『広辞苑』])。日本ではミニ中国流乃至中国流を偉大な祖師の名を冠して「道策流」と呼ぶ向きも有った¹⁵⁷⁾ので、中国流出現以降を「古

図 11 第 34 期本因坊戦挑戦者決定リーグ戦, 坂田栄男 vs. 小林光一(黒, 込 5 目半), 第 1 譜(1~18), 182 手完, 白中押し勝ち

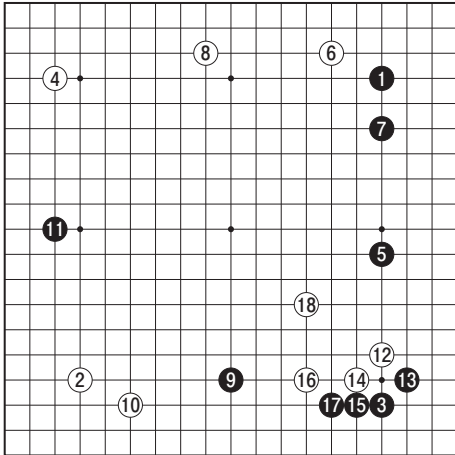


図 12 元禄 9 年 11 月 29 日御城碁, 本因坊道策 vs. 安井仙角(2 子), 第 1 譜(1~20), 265 手完, 黒 1 目勝ち

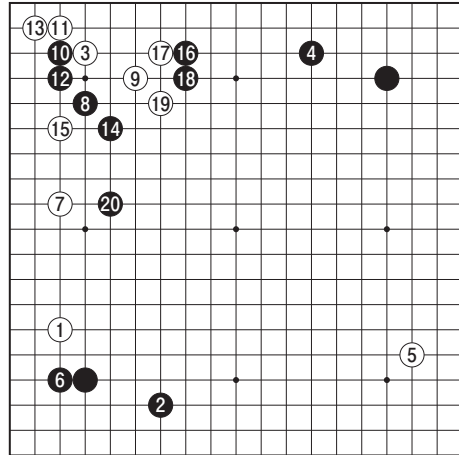


図 11 出典 = 『現代囲碁大系』第 23 卷『坂田栄男 下』, 239 頁。図 12 出典 = 『日本囲碁大系』第 3 卷『道策』(呉清源解説, 三堀 将 執筆, 筑摩書房, 1975), 229 頁。

来」と表した王銘琬の言い方は大袈裟だとも断じ切れない。1960 年代を起点としても技術の日進月歩を思えば 50 年前を「古」と区分するのも一理が有り、中国流は難しく決定版が無いという坂田の実感¹⁵⁸⁾は李世石の蹉跌で改めて証明された。小目に掛る彼の白 12 と小林の黒 13 尖は AlphaGo 対李の第 3 局の 12・13 と同じなので、周囲の配置の違いを考慮しなければ AlphaGo の学習に何らかの形で寄与した可能性も有ろう。

『島村俊廣』巻に於ける中国流の 2 回目の登場は、第 23 局(第 27 期本因坊戦挑戦者決定リーグ戦, 対武宮正樹六段, 1972.1.19~20)である。3 回目(最後)の第 25 局(第 2 期中部最高位戦挑戦手合 3 番勝負第 1 局, 77.8.18)では、岩田達明九段が低中国流で布陣し「中国流本邦元祖」と見られる島村は両三々で対抗した(図 13 参照)。挑戦者島村の師鈴木為次郎名誉九段は最高位保持者岩田の師木谷實の師匠に当り、日本棋院中部総本部の独自の此の棋戦で対決する 2 人は芸道で「叔父・甥の間柄に成ると言う¹⁵⁹⁾が、14 歳年下の岩田が彼の総本部総帥の導入した手法で機先を制そうとしたのは興味深い。朱熹の『中庸集注』第 13 章に「以其人之道, 還治其人之身」(其の人の道を以て, 其の人の身を治める)と有り、相手が用いた方法で相手の身を治めるという君子の人の接し方を説く此の主張は、悪人が用いた方法で悪人を懲らしめるという性悪説が根強い国柄らしい転義を生んだが、江戸時代の儒学に多大な影響を与えた南宋の大儒の此の名言の中の「道」が目を引く。『忍の棋道 島村俊廣打碁選集』(囲碁研修普及会, 79)の題は島村の人・碁の代名詞と成り、中国でも高川格の「流水不争先」と並

ぶ日本囲碁の本格派の象徴と捉える向きが多い。『現代囲碁大系』の略年譜の74年の記載は「“俊廣”と改名。一番弟子羽根泰正八段を破って王冠位獲得。六十二歳」と為る¹⁶⁰が、中部最強棋士の座を争う王冠戦で72・78・83・92年に優勝した彼の32歳年下の弟子は、師と一脈通じる求道心を以て地に辛い棋士が余り選ばない高中国流の理論化に貢献した。羽根(81年より九段)は非職業向けの『天下六段 囲碁戦略 高中国流』(日本棋院, 88)の中で、高中国流は勢力指向・大模様の碁に為り低中国流は和戦両様で勢力でも地でも自由自在に為るとし、自分は「勢力の手」と言える前者を好み「地の手」なる後者は1局も打っていないと述べた。中国流に取り憑かれ惚れ込んだと自称する高中国流の大家の明快な講釈¹⁶¹と一途の実践から、60年代の中国棋士の言わば「低多高寡^{バランス}傾向の深層の実利重視・均衡感覚が浮彫にされる。『現代囲碁大系』第45巻『関西棋院精選集』(佐藤直男・藤木人見・松浦吉洋・関山利夫・小山靖男・宮本義久・東野弘昭・白石裕・石井新蔵・大山国夫・牛窪義高・牛之浜撮雄・苑田勇一解説, 小野堯範執筆, 81)の牛之浜九段自選3局の中で、第2局(第4期名人戦挑戦者決定戦リーグ戦, 79.4.18)第1譜解説「プロの布石観」に、先番の相手の高中国流に就いて「どんな布石を採用しても勝率のよい坂田ではあるが、中国流の勝率はことによいそうである」とし、但し近年白4の位置に由って中国流を断念^{これ}して此に掛けて行く打ち方も見られると書いた。¹⁶²次の第6期天元戦2回戦(対武宮正樹九段, 80.7.24)第1譜解説「容易でない布石」に、牛之浜は右上の星・右下の小目の次に白の2連星の左下の方に掛った黒5(図14参照)は、「流

図13 第2期中部最高位戦挑戦手合3番勝負第1局, 岩田達明(黒, 込5目半)vs. 島村俊廣, 第1譜(1~14), 274手完, 白14目半勝ち

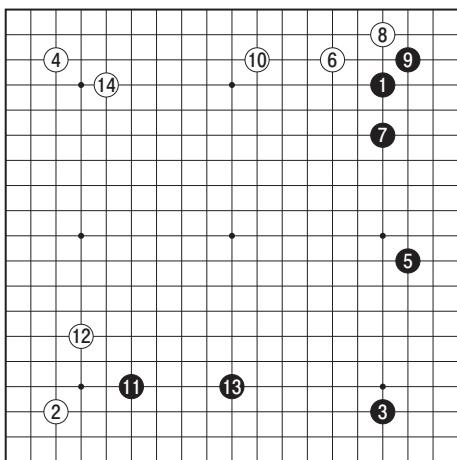


図14 第6期天元戦2回戦, 武宮正樹 vs. 牛之浜撮雄(黒, 込5目半), 第1譜(1~32), 216手完, 黒2目半勝ち

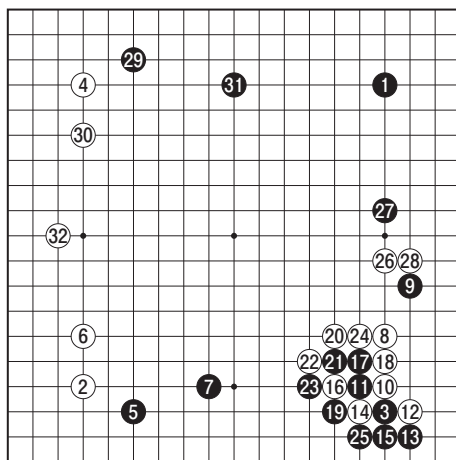


図13 出典 = 『現代囲碁大系』第14巻『島村俊廣』, 226頁。図14 出典 = 同第45巻『関西棋院精選集』, 253頁。

行しすぎて、中国流にはちょっと飽きがきた」時代の布石であると講釈した¹⁶³⁾。一連の記述と多くの棋譜から日本の中国流最盛期は70年代中期～後期という印象を受けるが、導入者を師とする羽根は流行が去った後も人気を保つ中国流の「イメージキャラクター形象代言人」に似合い、地に甘いとされる高中国流が戦いの碁に向いている事を自らの棋風と実績で証明した。李世石^{イセドル}の採用は戦いに挑む意図と前局の相手の低中国流への意趣返しを感じられるが、**棋士の実践に由る成功が勝算に繋がるなら羽根等の棋道発展への寄与を讃えるべきである。**

『現代囲碁大系』第17巻『酒井通温・岩田達明・羽根泰正』（本人解説、本田順英執筆、1982）に羽根自選の7局が有り、八段時代の第2局（第28期本因坊戦第3次予選決勝、対小林光一六段、72.10.26）の第1譜解説「布石が下手」は、「碁は相手との戦いであり、自分との戦いであり、時間との戦いでもある。持時間をどう有効に活用するかも、勝敗を分ける大きなポイントである」という**普遍的な真理**を述べた上で、「石と石とのねじり合いには、多少、自信もあるが、布石は下手だと自認する羽根は、布石で長考することを避けるため、前局でもふれたように布石では打つ手を決めている。黒1・3の星が当時の型。これしか打たない。/(中略)“打つ手を決めている——”には、“同じことを重ねてやれば、少しはうまくなる”と信じているらしいことも付言しておこう」と紹介する¹⁶⁴⁾。六段時代の前局（第6期十段戦第3次予選決勝、対鯛中新九段、66.11.22）は二連星ではなく、相手の黒1の右上の小目と同じ側の右下に打つ白2の小目で始まる。¹⁶⁵⁾第3局（第4期天元戦準優勝、78.10.12）では星・三々で藤沢秀行の高中国流に抗し（図15参照）、大流行の先番高中国流は第6局（第28期NHK杯争奪戦1回戦、対林海峰九段、80.4.28）、九段昇進後の第7局（第7期棋聖戦八段戦決勝、対石田章^{あきら}、82.5.20）で自ら使った（図16参照）。「高い位を好み、好きな型を持ち、狙いを定めて突進する」芸風を能く表した後者の熱闘譜に、「黒番だから例によって1・3・5の高い中国流である。“決めると考えなくてもいいから楽です”と笑っているが、勝ったり負けたり勝負の世界だから、決めた型で負けたあとは、別の方法を試みたくなることだってあるに違いない。そうした心の動揺を抑えて型を守るのは大変な事であろう。こと碁に関しては、羽根は独自の哲学を持ち、いったん決めたとなると容易に曲げない剛直さも持ち合わせている。そこが彼の碁の魅力のひとつでもある」という評価が付いている。高中国流愛用歴が優に35年を超えた2015年の対局を拾って見ても相変わらず使われており、例えば先番に当たった第5期囲碁マスターズカップ2回戦（対趙治勳、4.30）、第41期名人戦最終予選1回戦（対秋山次郎九段^{あきやまじろう} [37]、9.30）では定番通りである。武宮正樹の三連星使用を上回る愛着は**流行の移り変りが速い現代では珍しい不易**と言え、好きな型を持ち高い位を好む芸風や剛直さは**AlphaGoの序盤・中盤の傾向にも見られる**。羽根—秋山戦の直後の対樊麾5番碁では第1局（白）の星・小目を除いて全て二連星で、対李世石^{イセドル}戦では黒番の2局は星・小目、前回と同じ白番の3局は二連星で一貫している。

図15 第4期天元戦準決勝, 藤沢秀行(黒, 込5目半)vs. 羽根泰正, 第1譜(1~14), 239手完, 黒中押し勝ち

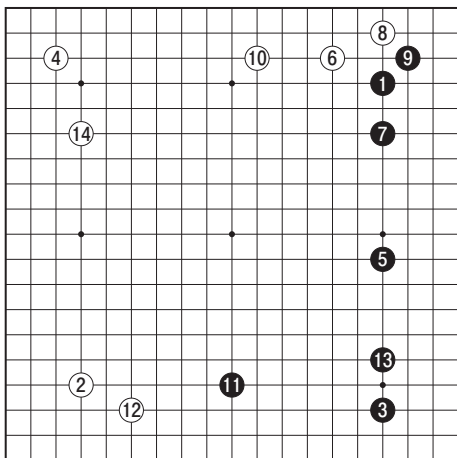


図16 第7期棋聖戦八段戦決勝, 羽根泰正(黒, 込5目半)vs. 石田章, 第1譜(1~20), 323手完, 黒2目半勝ち

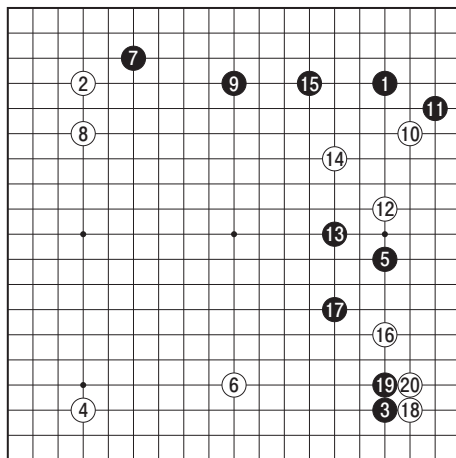


図15・16 出典 = 『現代囲碁大系』第17巻『酒井通温・岩田達明・羽根泰正』, 233・269頁。

『坂田栄男 下』第16局(第30期本因坊戦挑戦手合7番勝負第4局, 对本因坊秀芳, 1975.6.16~17)の回顧は1・3・5の低中国流に就いて, 「このシリーズは, 黒番だと中国流, 白を持つと三々という布石であった。/意地の突っ張りという気合いもあるが, 単なる勢ということもある。そのどちらかであったが, いまは覚えていない」と述べた¹⁶⁶⁾。1手で隅を占め得る三々は地に辛い彼が愛用したに違いないと理屈・^{イメージ}形象で想像が付き, 現に同書第10局(第8期旧名人戦挑戦者決定リーグ戦, 対大竹英雄八段, 69.5.21~22)の黒1で三々を打った(図17参照)。第1譜解説「布石の駆け引き」に曰く, 「布石の初手にあまり問題はないが, 白2の小目を見て, 黒3の“向かい小目”を選んだのは, 布石の駆け引きである。/“向かい小目”は先にかかるほうが有利という定説(今日では定説とはいえないが)にしたがって, 白11にかかれば右下隅を占め, 空き隅先行策を採る考えだった。」¹⁶⁷⁾ 対局時の定説は間もなく成立しなくなったので「新」も絶えず「今は昔」と化して行くが, 囲碁の智恵の層の厚さは「層」の字形の様に皆ての事象の尸(屍)の堆積の上に出来ている。「1粒の麦若し地に落ちて死なずば, 只1つにてあらん。死なば多くの実を結ぶべし。」(『新約聖書・ヨハネの福音書』第12章) 此の箴言を振って言えば囲碁人の対局は勝敗の結果や着手の善悪に関らず全て価値を持ち, 経験又は教訓, 教材又は反面教師(語源=中国語の「反面教員」として芸の肥しに成るが, 高段者の棋譜を十数万局も蓄積したAlphaGo¹⁶⁸⁾は「万葉」(多くの草木の葉。万代)集成の感有る。AlphaGoは第3局で黒の上辺の高中国流+左上~左下に展開する模様で12・14で対抗し, 『囲碁天地』特集の詳解では常識的な前者と軽妙な手として棋界の評価が高い後者に就

いて、高い効率を以て人類の棋譜を学ぶ *AlphaGo* は 12 の隅への掛りは記憶に頼ればよいが、14 の「大跳」(2 間飛び) は電脳には模倣力だけでなく独自の思考も有る事を示したと説く。全 5 局の誌上解説を担当する時越は此の手は尖以下の定型 (図 18 参照) が普通であり、こんな相場の分れなら驚かないが実戦は其の創造性に不安 (脅威) を感じさせると語った。¹⁶⁹⁾ 洪敏杓・金振鎬著、洪敏和訳『人工知能は碁盤の夢を見るか? アルファ碁 VS 李世石』(東京創元社, 2016) では、「蝶のように軽く、白 14」(第 3 局第 1 譜の解説の題) は軽く柔軟な応手でこの様な場面ではよく登場すると書いてある。¹⁷⁰⁾ 新手かのように認識した時越は韓国の碁の常識及び日本の碁の伝統との距離を露呈させたが、李が新しい対策として選んだ不慣れな高中国流は 30 年前の日本では有り触れていたと言う彼は、38 年前に黒 13 に当る「新手」に対して同じ打ち方が現れた (図 19 中の 15・16) 事を知らない。『石田芳夫 下』第 18 局 (第 3 期棋聖戦挑戦者決定 3 番勝負第 3 局, 1978.12.21) では、右辺の高中国流と下辺一帯の両翼の交差点と為る右下隅への白の掛りに対する星下の尖は、新しい手であり少し前までの主流だった桂馬 (図 20 の黒 1) より一段と地に辛いとされる。¹⁷¹⁾ 巡り巡って「電脳」石田が *AlphaGo* の手本を打ち更に進化形 (図 21) を紹介したが、時越が「正常」(通常) として薦めた上記の変化図は此等の日本発・昭和製の定型と比べて、相手の眼形を奪いより厳しく攻めようとする当代囲碁の特徴が如実に表れている。

図 17 第 8 期旧名人戦挑戦者決定リーグ戦, 坂田栄男(黒, 込 5 目半) vs. 大竹英雄, 第 1 譜(1~14), 117 手完, 黒中押し勝ち

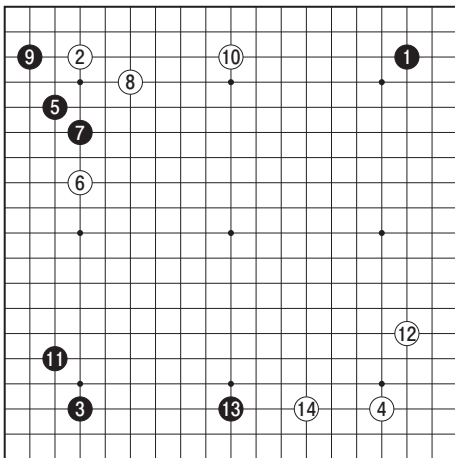


図 18 時越の解説に拠る李世石 vs. *AlphaGo* 第 3 局の白 14 に代る手段

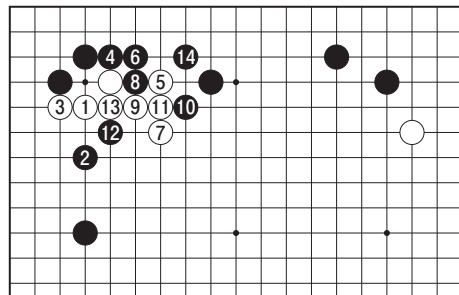


図 17 出典 = 『現代囲碁大系』第 23 卷『坂田栄男 下』, 107 頁。図 18 出典 = 『囲碁天地』2016 年第 7 期, 45 頁。

図 19 第3期棋聖戦挑戦者決定3番勝負第3局, 石田芳夫 vs. 坂田栄男(黒, 込5目半), 第1譜(1~25), 254手完, 白6目半勝ち

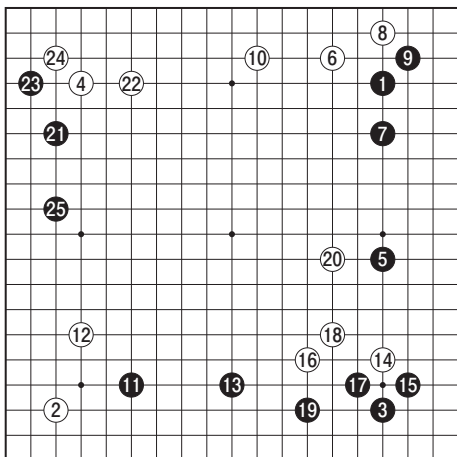


図 20 石田芳夫の解説に拠る図 19 の黒 15 の稍田^{やや}い^{パターン}型

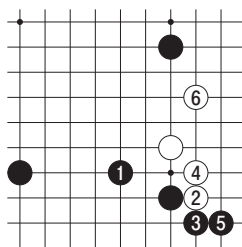


図 21 石田芳夫の解説に拠る図 19 の白 16 の別の選択肢

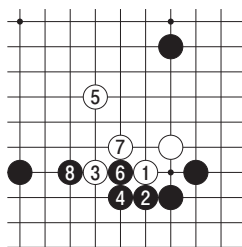


図 19 出典 = 『現代囲碁大系』第 38 卷『石田芳夫 下』, 201 頁。図 20・21 出典 = 同 200 頁。

中国囲碁「倣日・随日→抗日・追日→親日・知日→脱日・排日」の表裏

中国の棋界は高部道平^{たかべどうへい}四段の訪中 (1909~10) が契機で日本に劣る立場を自覚させられ, 古来の事前置石制^{おきいし}を廃止し自由布石法を導入する等と日本に対する模倣・追従をし続けた。半世紀後の両国囲碁交流開始から「倣日・随日」に代って「抗日・追日」(「追」= 追いつく・追いつ越す)「情緒が高まったが, 四半世紀後の中日^{にっちゅう}囲碁擂台^{スーパーいご}台賽戦勝と日中蜜月に連動して「親日・知日」傾向が台頭した。闘争心・向上心と表裏一体の斯うした感情は外交関係と同じく「脱日・排日」に傾いたが, 日本囲碁の衰微の新常態を同情的に眺める棋士・愛好者には昭和の碁への愛着が猶根強い。聶衛平は『私の囲碁の道』第 18 章「敬服する棋士」(原文 = 「我所敬佩的棋手」)の中で, 呉清源・坂田栄男・藤沢秀行を現代の優れた棋士の内で最も尊崇する人として挙げており¹⁷²⁾, 「井山裕太九段が本当に尊敬する 3 人の棋士」(『NHK 囲碁講座』2014 年 2 月号)も呉・藤沢・坂田である¹⁷³⁾。柯潔は高川格の「流水不争先」や島村俊廣の「忍の棋道」を緩着容認の主張の様に低く評価し, 「言説の狂人」らしく日本の碁を批判的に捉え其の消極性が不振に繋がると見ているが, 例外的に坂田栄男を手放して讚え其の実利先行+凌ぎの戦法は碁の王道だと言いつ切った¹⁷⁴⁾。中山典之も昭和を代表する棋豪は強いて限定すれば呉・坂田・趙治勳・小林光一に為るとし¹⁷⁵⁾, 此の様に坂田は頑強な闘志・鋭利な棋風と多数の優勝・長

期の活躍に由って内外の尊崇を受けて来た。世界戦優勝を指標にするなら日本囲碁の低迷も中国囲碁の雄飛も2005年が起点と為るが、07年に某「国手」が『囲碁天地』誌に『坂田栄男全集』の購入を頼んだ事が話題に成った¹⁷⁶⁾。日本棋院創立60周年(1984)記念出版である12巻(又別巻1)は1464局を収録しており、此を求めた高手の超一流を目指す勉学心は『論語』が「学」で始まる様な国柄に相応しい。井山は棋戦が少ない時代にあれだけの選手権を獲得できた坂田の驚異的な偉業に感嘆し、「勝負師」という言葉がぴったり来る此の先生は、どれだけ重要な対局が続いていても全て勝ちたい気迫が伝わって来る；1局1局、1手1手に魂が籠っており、打つ手が厳しく、踏み込みが凄く、勝負処と見た時の切れ味や相手の隙を衝く力が凄いと絶賛した。¹⁷⁷⁾ 其の昭和的とも言える貪欲・強情・闘魂・辣腕は井山や中・韓の名棋士にも見られているが、棋風・気風が似た勝負師李世石は九段時代に坂田評を訊かれた際に遠い存在の如く吃驚した。此を評る『囲碁天地』編者は棋界の「厚今薄古」(今を重んじ古[昔]を軽んじる)風潮を憂い、中国の多くの少年棋士や入段挑戦者は毎日最新の中・韓棋戦の棋譜ばかり並べており、坂田栄男どころか呉清源の棋譜にさえ触れようとしないと巻頭の言で嘆いている。¹⁷⁸⁾

坂田栄男は「自分を天才とは思っていない。努力が私を造りあげたと信じている」と述べ¹⁷⁹⁾、幾多の俊英の成長を見届けた木谷實夫人(美春)は藤沢秀行程勉強した人を知らないと言った¹⁸⁰⁾。坂田は「天才」という言葉は真の意味で呉清源が独占すべきであろうと言いつき切り¹⁸¹⁾、島村俊廣から碁も人間も天才だと称された秀行¹⁸²⁾も天才とは呉清源みたいな人と言うのだと語った¹⁸³⁾が、呉の師瀬越憲作は其の稀に見る天才を認めながら若い時の爪が割れる程の勉強を強さの秘密に挙げた。三好徹は『五人の棋士』第1章「巨人——呉清源」の中で此の証言・論評に就いて、自分には其の激しさが分らない勉強は結局先人の打碁を並べる事であろうと書いた。¹⁸⁴⁾ 秀行は『碁打ち一代』(読売新聞社、1981)の中の「強くなるために」と題する部分で、非職業四天王の1人でアマ本因坊やアマ十傑戦で何度も優勝した村上文祥の、「どんなに夜遅くなっても、どんなに酔っていても、帰宅したら棋譜を見て一局並べる」という言葉を引いて、「会社勤めをしていてこれだから、プロ以上の努力だと思った」と述べている。職業棋士は昔の棋譜を徹底的に勉強するという当り前の事象の端的な例として、自分が可愛がっている安部吉輝・高木祥一両八段や福井正明七段等は、昔打たれた碁の殆ど全ては30手も並べると誰の碁かを言い当てるし、現代の碁でも上位陣の物ならば同じ様に知っていると言った。「しかし、それだけでは強くはならない。彼らが七段、八段と昇段してきたのは、その覚えたものを改良し、応用して勉強したのである。結局は創造力の問題で、そしてこれが、碁の一番面白いところなのである」と付け加えた¹⁸⁵⁾が、作家中野孝次は『人生を闘う顔』(新潮社、82)の中の「藤沢秀行 破滅型天才棋士」の部分で、秀行の大変な研究熱心は特定の師匠に就いて学んだと言うより、「古人の棋譜を、その人の心になって納得するまで並べてみ

るやり方だった」と紹介している¹⁸⁶⁾。坂田栄男は小さい頃から実戦で腕を磨き昔の碁を詳しく調べる勉強は余りしなかった¹⁸⁷⁾一方、『勝つ』(徳間書店, 65)の中の「大勝負」と題する回顧で第2期旧名人戦決勝7番碁(63.8.4~9.30)に就いて、防衛者秀行に対する2連勝→3連敗後に秀和・秀策・秀甫等先人の打ち碁を並べていたと書いた。只此で次の勝負にどうしようというのではなく心の迷いから逃げたい為であり、対局の前日に漸く辿り着いた心境は「勝敗は時の運だからこれは仕方がない。ただ勝負には小手先の技術にだけに頼らないで、どこからみても立派な碁を打ってみようということであった」。6局目は心機一転の気持から善悪と関係無く其まで黒でも白でも用いていた三々の布石を止め、此の碁を勝った後7局目をも制し此は一生忘れられない対局だろうと述べている¹⁸⁸⁾。此の様に棋譜並べは囲碁人にとって技術・精神の向上に不可欠で且つ有効な手段であり、勉強の量・質が物を言う棋力上達に於いて従来の実戦・理論に対する研鑽は鍵の1つを為す。先人又は同時代人の碁を並べるといふ棋士の必須修業も電脳^{ネット}時代では有り^{かた}が少し変わり、棋譜の画面上の自動再生も出来るので碁石を握る必要も爪が割れる恐れも無くなる。筆^{ペン}胼^{だこ}胼^{だこ}が個人用電脳^{パソコン}胼^{だこ}胼^{だこ}(造語)に取って代られる時世でも従来方式の棋譜並べは廃るまいが、坂田も並べるより専ら打つ方だと公言した¹⁸⁹⁾ので彼に対する李世^{イセドル}石^スの敬遠は同じ異端者の挙動と思える。

呉清源は秀策の打碁集『敲玉余韻』(石谷広策編・刊, 1897)が少年時代の碁の血・骨と成り¹⁹⁰⁾、李昌^{イチャンホ}鎬も若い時から秀策の棋譜を熱心に並べ一生掛けても秀策先生には及ばないと語ったという¹⁹¹⁾。七段時の第1回中日囲棋擂台賽で2番手として5人抜きを果した「抗日英雄」江^フ鑄久は、天安門事件の翌年に渡米・米^米国職業棋士協会に移籍し2年後に滞日中の芮乃偉と結婚し、世界初の九段同士夫婦は韓国棋院に所属した後も日本との人的・心的な絆を保って来た。彼は1993年に呉の最後(2番目)の弟子と成った妻が「敲玉」と揮毫した扇子を愛用し¹⁹²⁾、愛好者に上達の近道として藤沢秀行も絶賛した武宮正樹の棋譜¹⁹³⁾を並べる事を薦めている。中山典之は『昭和囲碁風雲録』第26章「昭和から平成へ」第3節「宇宙流, 武宮正樹」の中で、昭和囲碁史を語る上で見落してはなるまい此の棋士の影響力の証として江の推奨を引いた¹⁹⁴⁾が、次に92年の十段戦で小林光一棋聖を挑戦者に迎えた時の意味深な発言を取り上げている。曾て選手権^{クイットル}戦で顔が合った時に武宮が小林の地に辛い棋風を評して、あの様にもぐらか地下鉄みたい^そに石が下へ行くのは面白くないと述べた事に端を^そ発し、其の番碁は局後の感想戦も無かったと言う程だったが、今度は関係者に安心させるべく「昔は子供だったが、今は大人です」と君子豹変を見せた。「去年の秋に、神様のお告げがありました。まあ見て下さい。今年の武宮は違いますよ」とも語ったが、「神様のお告げ」とは日本棋院が総力を挙げて拵^{こしら}えて刊行した『道策全集』である。曰く、此まで他人の碁を並べていても気に入らぬ手が出て来て並べ続ける^{これ}氣に成らなかったが、道策先生の手は一々御尤^{ごもつと}もで凄く勉強に為るから夜に外での飲酒等を早く切り上げて並べた。結局1-3で圧勝された小林は今回の相手の迫力には恐れ入っ

たとあっさり兜を脱いだ¹⁹⁵⁾が、実力十三段と称揚された4世本因坊の遺産の日本初の世界王者に対する天助は示唆に富む。

同時代の一流棋士を悉く先まで打ち込んだ江戸囲碁の「前聖」道策の偉業を超える様に、強豪陣に対する「昭和の棋聖」呉清源の打ち込みは二段差の先相先までの例も複数有った。此の「先」は『日本国語大辞典』の当該項目中④の後半で、「囲碁で下手が常に黒を持ち先に打つ手合割」と説明されている。【先】に「④囲碁・将棋で、相手より先に打ち始める方。先手」の意しか無い『広辞苑』では、【先相先】の項目も有り語釈は「囲碁で、三番のうち一回先(黒)で打ち、あと二回は互先^{ながい}で打つ手合割^{あわり}」と為る。関連の【互先】は「囲碁で、技量の互角の者同士の手合割^{あわり}。交互に先番で打つ。相先^{あいらい}」,【手合割】は「囲碁・将棋で、対局者間の技量差を埋めるための手合^あ④の条件。将棋では駒割ともいう」,【手合】④は「囲碁・将棋で、対局。“大一”である。【打ち込む】の「⑦囲碁で、相手の陣内に石を打つ」の次に、「⑧囲碁で、同じ相手に勝ち越し、一段下の手合割^{あわり}に追い込む」意も入っている。一流同士の打込碁で一段差に打ち込まれただけでも降格者にとって大変な屈辱に為るが、容赦無く更に一段下まで打ち込んだ呉の殊勲は打込碁の終焉を齎した故に不滅である。彼は子供の頃に父親が日本から取り寄せた方円社発行の月刊『囲碁新報』月刊の合本で勉強し、18世本因坊村瀬秀甫の寸評の付く合計約600局が載った書誌を毎日手に持って棋譜並べをした末、重さを支える中指が交代の両方とも少し曲がって^{しま}了い遂に晩年まで正常に戻らなかった¹⁹⁶⁾。天下の畏敬を集めた超絶の神業に正比例する超絶の努力の跡は其の「異形」にも現れるが、^{おびただ}夥しい棋譜並べは「夥」の字形の様に成果の多さに繋がり又数の力・持続の力を思わせる。道策の棋譜を略暗誦している小林¹⁹⁷⁾と仲直りしつつ盤上で雌雄を決す武宮も道策に傾倒したが、天才肌の彼も木谷道場で棋譜並べを数多く重ねた結果右手の人差し指の爪が薄くなった¹⁹⁸⁾。

中国で頭角が現れた呉清源の棋力「爆伸」(造語)は近世日本の先賢の御蔭が大いに有り、木谷實等と共に土台・高峰を作った昭和の碁は江戸の碁の継承・発展と見て差し支えない。呉の異才を発見し門下に収めた瀬越憲作の別の外国人高弟曹薫^{チョファンヒョン}は昭和の碁の薫陶を受け、藤沢秀行に私淑した聶衛平も現代日本の高段者群から柔軟な棋風を習得し芸域を広げた¹⁹⁹⁾。胡耀宇・邱峻・孔傑・古力・王檄・謝赫と共に1982~84年生れの「虎一代」(「虎」世代)を為す劉星は、8歳の時に囲碁文化交流訪中団の^{おおしままさお}大島正雄(45、『産経新聞』観戦記者・『棋道』編集長歴任)と対局中、傍に足を止めて長らく観戦した「大前(先)輩呉清源老師(先生)」を神の降臨の如く感じたが、息子は日本に送ったら将来性が有るでしょうかと付き添いの母親が呉に^{すが}縋り着いて訊くと、此の程度の子は日本の何処にでも居るので逸材には程遠いという^{シビア}冷徹な判定が下された。人生を決めた其の一言は今も持ち続けている「資質平平」(凡才)の自己認識を強めた²⁰⁰⁾が、5歳年上の^そ蘇耀国(広東省広州出身)と同じ日本行き(91年、13歳)の道を辿ったなら、七段時代(2004~現在)の06・07年中国阿含^{あごん}・桐山杯優勝等の成績も取れ

る訳が無いし、蘇九段(14年昇段)と同期入段(1994)の張栩を日中阿含・桐山杯王者決戦で2度下す快挙も無かった。母国でも知名度・好感度が高い蘇は『囲碁天地』2014年第1期の「36問」欄の質問に対して、古今の棋士の中で最も高く評価する(設問の原文=「最欣賞」)のは聶衛平、古今の対局の中で最も印象的なのは第2回中日囲棋擂台賽主将決戦(「聶老」対「大竹老師」)だと答えた。201)6歳で「碁心」(「物心」)に因んだ造語)が付いた翌々年の1局も聶の存在の大きさを物語るが、聶が敬う秀行流の「異常感覚」も日本囲碁の求道精神も劉星に多大な影響を与えている。秀行の訃報を聞いた彼は長年道を照らしてくれた灯りが消えた様な侘しさで涙を溢した²⁰²⁾が、中国の男性棋士は碁に関しては人に涙を見せず仮令陰で泣いても披露しないので尋常ではない。同じ6歳で碁を始めた劉が出会った最初の棋書は当時の中国棋士必修の坂田栄男対局集で、1年でボロボロと成った此の教材に由って速度・効率を追求し戦闘を選ぶ奔放な棋芸の原形が出来た。坂田逝去の当日(10.10.22)「新浪体育」サイトで発信された追悼記事²⁰³⁾は劉の原点と共に、牛雨田七段(25)の故人への尊崇や李世石・崔哲瀚の棋風との類似に関する指摘を紹介した。劉星は13年に趙守洵五段(29)との共同出資で北京星淘文化伝播有限公司を創業し、専門性・娯楽性・双方向性を追求する囲碁視聴網站「囲碁TV」を8月8日に立ち上げた²⁰⁴⁾。中国初の現役棋士が企画・出演する此の電腦網発信基地を作った劉は棋界屈指の美文家で、「口才」(話術)随一の網站首席主播孟泰齡六段・李喆六段と碁界「3才子」を為している。劉は「囲碁TV」『囲碁天地』等の名解説者・寄稿者として影響力の強い発信をして来たが、日本の先輩の棋譜を並べて育て来た彼は其の先達の献身的な追求と敢闘の激情を礼賛し、目下の日本囲碁の軟弱・後退への痛惜と韓国囲碁の競技化・無機質化への嫌悪を隠さない²⁰⁵⁾。昨今の中国の碁は昭和の碁との親縁性が高く其の進化版と言える側面さえ感じられるが、AlphaGoの出現は古代中国→江戸～昭和の日本→1990年代以降の東亜3強国の碁の延長線上に在る。

Googleの依頼でAlphaGo対李世石5番碁の大盤解説を担当したマイケル・レドモンドは、第3局の白14に対する李の応手は自分の院生時代に流行した手で、上手く行かないと結論が出て其の後打たれなくなった変化だと紹介している²⁰⁶⁾。1963年に米国で生れた彼の世界唯一の西洋人九段の日本棋院院生時代は77～81年なので、坂田栄男の碁に対する馴染が薄そうな李世石に此の情報が蓄積されていないのは無理も無い。王銘琬もテレビ解説で李が此の局面の定石を知らなかった可能性を排除しなかったが、将棋格言の「名人に定跡無し」や定石知らずの一流碁打ちの存在でも李を正当化できる。聶衛平は『我の囲碁の道』第16章「若手棋士への希望」の中で序列2位の馬曉春に就いて、他者の長所に対する吸収が余り得意でない事を顕著な弱点の1つとし早急の改善を勧めた。²⁰⁷⁾馬は盤上・盤外とも「天馬行空、独行独来」(天馬空を行き、独り行き独り来る)の観が有り、彼より数倍も孤高な李は坂田栄男との隔たりに見る日本の碁に対する疎遠ばかりでなく、打倒韓国の為に国家選手団総教練を務め李世石

封殺に必要な情報収集に勤しんだ馬と違って、選手団の勉強会に出ず上記の対柯潔戦で其の進言された研究成果の布石を採らなかった²⁰⁸⁾。李の棋風・性格俱に坂田と似通い棋院との対立も壮年の坂田や晩年の秀行を想起させるが、天才的な覇者の絶大な自信の落とし穴は坂田の昇仙峡の敗戦と秀行の突発的な自滅にも見られる。李の対 AlphaGo 圧勝の豪語は「自負」の字面に隠れた「自ら負ける」危険性を孕んでおり、彼を含む世界中の強豪等の棋譜を網羅的に集めた人工知能の電脳運用指令体系に対して、開発側が情報開示を拒んだ新兵器の威力を知る由も無い彼は不利な立場に置かれていた。

明治～昭和の文豪幸田露伴は「囲碁雑考」(1951)の「一 棋経妙旨」の編訳の中で、「戦未だ合せずして而して算す。戦つて勝つ者は、算を得る多き也。戦つて勝たざる者は算を得る少き也。戦已に合して而して勝負を知らざる者は算無き也。兵法に曰く、算多きは勝ち、算少きは勝たず」という、中国初の古代囲碁理論の集大成『棋経十三篇』(宋代棋士張擬編)の名言を訳し、「多算勝、少勝不勝は孫子の語」の注で「十三篇は蓋し孫子に擬する也」の自説を裏付けている。²⁰⁹⁾ 胡錦濤国家主席は2002年4月20日に米大統領府で『孫子兵法』中・英語版をブッシュに贈り²¹⁰⁾、オバマ大統領は09年11月16日に北京で胡の招宴への答礼として碁盤・碁石・碁笥1式を贈った²¹¹⁾が、新世紀「2強」大国の首脳ぜんもんどうの禪問答的な遣り取りにも囲碁と兵法の密接な関係が垣間見える。春秋時代の呉国の兵法家孫武が著した戦略・戦術指南の哲理に富んだ其の名言なごらに擬えて、今回の世紀ミレニアム / 千年紀の対決の結果は「多知 / 智勝、少知 / 智不勝」とも極言できるかも知れない。日本棋院機関誌『碁ワールド』16年5月号巻頭の「連載講座 IGO 特別座談会 新時代到来! アルファ碁の驚異の序盤力と弱点に迫る」で、王銘琬・レドモンドと後者より恰度21歳年下(1984.5.25生)の大橋拓文六段が熱い議論を交した。詰碁や9路・13路盤碁の他電脳コンピュータ 囲碁対局指令体系に人一倍強い関心を持っている大橋は、5月24日『読売新聞』夕刊の「なるほど囲碁将棋」欄に掲載された「岡目八目④」の中で、「アルファ碁の登場は、もはや人間は人工知能に勝てないのではないかという絶望感と、囲碁は人智では計り知れない無限の可能性があるという期待感と、真逆のことを同時に示し」たと述べている。「人工知能」の4文字に有る和製漢語「人知」ならぬ「人智」は漢籍伝来の表記(中国語では「知・智」は同音の zhi ながら其々第1声と第4声)であるが、「智」は此の文脈で「知+日」の字形に知識・情報に光を当て輝きを放たせる妙味が有る。

AlphaGo の対欧州王者5連勝が世界中を驚かせた当初其の実力への評価は分れており、日本の非職業強豪に当る韓国の院生・中国の「衝段(入段挑戦)少年」程度と見る向きが多かった²¹²⁾。柯潔等の中国棋士が大体「衝段少年」級と判定した²¹³⁾中で時越は職業初段の力量が有り五段を超えないと主張し²¹⁴⁾、富士田明彦四段(24)も対局体験に基づいて樊麾は楽に勝てる相手ではないと電脳網上で呟いた²¹⁵⁾が、樊は二段昇進(1998)の翌々年から囲碁非先進国に定住した所為で棋力の衰えも否めない。非職業強豪・「衝段少年」・院生が職業棋士に勝つ

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

事も間々有る囲碁強国の現状を考へても、対^ア樊^マ魔^ブ戦^ロの時点でAlphaGoは非^ア職業^マと職業^ブの境界線を跨いでいたとするのが無難であろう。公式の5番碁の出来が「臭」(下手糞)と自ら認めた²¹⁶⁾彼は非公式の5局で2勝した²¹⁷⁾ので、AlphaGoの水準は後に中国で「遇弱則弱」(弱い者に遇えば弱い)という憶測を呼んだ²¹⁸⁾程で、其の歴史的な突破は段位・称号の割には弱い相手を選んだ開発側の智術の奏功とも思える。李世^イ世^セ互^ドルは第4回CCTV賀歳杯決勝戦(2016.2.11)に出た(相手の柯潔が中押し勝ち)後、中国の囲碁報道関係者等と盃を交す時に樊よりも大勇君が出た方が益^マしだと軽口を叩いた。²¹⁹⁾当の『囲碁天地』首席編集者・観戦記者・囲碁推理小説作家張大勇は李が懇意にする友人で、対AlphaGo第4局開始前わざわざ会場外に足を伸ばして丁寧^{ホド}に挨拶した程大切にしている²²⁰⁾。張は14年に「[19]90(年以)後(出生)」世代の強さを探るべく11人の棋士に2子局で挑み、相手が世界王者の江維傑・周睿^{エイ}羊・時越・范廷^{ギョク}钰・聿^{ビク}廷・唐韋^{ダカ}星・柁^{タンシヨウ}嘉^{テイ}熹・柯潔と実力者の檀^{タン}嘯・連^{レン}笑・楊鼎^{テイ}新である事も有って、李は10月29日に彼と1局打ち非^ア職業^マ相手の2子局で初めての負け(6目半)を喫した。²²¹⁾棋院機関誌の看板に相応しい張の棋力も非^ア職業^マ6段なので樊に対する李の不満^イが分るが、酒席での内輪話だしAlphaGoの後の進歩を把握していないという慎重さも見せた²²²⁾ものの、自分には通用しないと高^{タカ}を括った節が有り解放軍の金門戦役と似た「輕敵」情緒を感じる。中国では「大智大勇」(優れた智慧・勇氣)や「智勇双全(兼備)」が尊ばれる反面、「有勇有謀」(勇氣も有り智謀も有る)ならぬ「有勇無謀」(勇氣は有るが思慮が無い)は忌まれ、「無謀は破滅の父」(失敗は成功の母)を振った造語^{モジ}は普遍的な法則と言って構わない。人類を代表する心算^{ツモリ}で出陣した李世^イ世^セ互^ドルは結局人智を集結したAlphaGoに敵^{タカ}わなかったが、双方の「知・智・算」(情報・策略・計算)の多寡の大差を考へれば納得せざるを得ない。

「博奕の道、謹嚴を貴ぶ。高き者は腹に在り、下き者は辺に在り、中なる者は角に在り。法に曰く、寧ろ一子を輸くるも、一先を失ふ勿れ。左を撃たんとすれば則ち右を視、後を攻めんとすれば則ち瞻る。先んじて後る、有り、後れて先んずる有り。」前出の「棋經妙旨」の此の1節²²³⁾に有る幾つかの要訣はAlphaGoの着手で実践されており、例えば第1局の堅実過ぎて勝利宣言に等しい白80の戻り(後に局面図付きで詳説、以下数手同じ)、第2局の4線に在る白36の斜め上のより高位の5線に打った黒37の肩衝^{カタツキ}、第1局の白82以下の数手で左下で敢えて損な分れをして置き先手を取って右上の敵陣を割く白102の角^{カド}が挙げられる。李世^イ世^セ互^ドルが第4局で窮余の一策として放った白78の割り込みは「神の一手」と賛嘆された²²⁴⁾が、正しく対応すれば危害が無い故に中・日発の「魔之一手」や「渾身の一手」の評²²⁵⁾が妥当で、敵失に由って成功した此よりは職業^ブ棋士^{ウナ}を喰らせた上記の3手こそ「神の一手」に値する。囲碁史に残る様なAlphaGoの妙手・奇手・鬼手には多くの囲碁人は仰天し感銘を受けたが、字も識らず師や競合棋士も居ないのに棋書の理論を応用でき独学・独創が出来る能力は凄い。日本語の「学ぶ」と「学ぶ」「真似る」の同源は一般的な学習の起点・基礎の所在を示唆し、[晋]

陳寿撰『三国志・魏志』「王肅伝・注」由来の「読書百遍義自ずから見^{おの}る / 意自ずから通^{あらわ}ず」や、中国の熟語の「熟読唐詩三百首、不会作詩也会吟」（唐詩を 300 首を熟読すれば、詩を作れなくても吟じることが出来る）、そして意味も解らない儘に典籍を暗誦^{しやう}した昔の中国の学童の知識・教養形成の方式は、文字や音声でなく画像で情報を蓄積・処理・活用する AlphaGo の育成・活躍にも見られる。『囲棋天地』2005 年第 6 期に有る王元八段（44）の「天地講義⑥ 打譜（棋譜並べ）」でも、同誌副主編である筆者は「熟読唐詩三百首、不会作詩也会吟」を引いて学習効果を説いた²²⁶⁾が、唐代「詩聖」杜甫の「読書破万卷、下筆如有神」（読書^{まんがん}万卷を破し、筆を下せば神有るが如し）という句²²⁷⁾から、「打譜破万局、落子如有神」（棋譜並べ万局を破り、石を下ろせば神有るが如し）という原理に想到する。道策の棋譜を略暗記した小林光一が 1985～94 年に棋聖・名人戦各 8 期制覇を遂げたのも、坂田栄男の碁で骨格を形成した劉星が本因坊・名人・LG 杯優勝経験者 / 保持者の張栩に連勝したのも、本人の才覚・努力は勿論の事で巨人の肩の上に登った故の次元の高さも一因と考えられる。

鬼才、無敵、天才、王者、常勝と、呉に冠せられた形容は多いが、私は、じつをいうと「巨人」というのが、もっともびつたりするのではないか、と思っている。呉は、まさしく昭和棋界における巨人というにふさわしい業績を残してきた。新しい定石をつぎつぎに生み出し、三十年にわたって、勝ちぬいてきた。おそらく、呉ほどの棋士は、この先、出るかどうかわからない。

しかし、勝負の世界に生きるものの常とはいえ、その巨人にも、舞台から去って行く時がくる。ことしに入ってから、呉は、十段戦、王座戦の対局を辞退した。医師からとめられたのである。

呉の身边に近い人から、それを聞いたとき、私は、いいようのない寂しさを感じないではいられなかった。

「わ、か、ら、ん」

という、あの眩きをもう二度と聞くことはできないのだろうか。

そのあと、私は、棋院で呉を見かけた。なぜか声をかけられず、私は、独特の歩き方で去って行く後姿を見送った。巨人の後姿だ、と私は貴重なものを見るような想いで見ていた。

三好徹は斯うした礼賛と感傷で『五人の棋士』第 1 章「巨人——呉清源」を結んでいる²²⁸⁾が、初出は『別冊小説新潮』1974 年秋季号なので呉が還暦を迎えた直後の述懐・回想に為る（日本で誕生日とされた「5.19」に対して中国では 14 年の陰暦 5 月 19 日に当る「6.12」が一般的である²²⁹⁾。「呉清源の名は、囲碁を愛好するものにとっては、いわば富士山のようなもので、並ぶものなき高峰であり、神秘的な存在であった」、という思いを記した彼は 61 年 1 月半ばに日本最強決定戦の最終局の観戦で初めて呉を見た。「対局相手は坂田栄男九段だった。入口から見ると、坂田は右がわ、呉は左がわに席を占め、盤をはさんで相対していた。 / 坊主頭の
28 (204)

呉は、毛糸のカーディガンを羽織っており、その秀麗な横顔を紅潮させていた。(中略) / しばらくすると、呉は、/ “わからん” / と呟いて、首をふった。/ その言葉に、私は驚かされた。/ わからん、といったことに間違いはないのだが、そのアクセントがすこぶる変なのであった。/ “わ” がきわめて低音で、続く “か” が異様に高いオクターブで発せられる。そして、“らん” は再び低くなるのだ。』²³⁰⁾ 呉は数えて15歳の時に来日し已に30余年経ったから居住国の言葉を流暢に話せるはずで、成人してからは外国語は上達し難いが10代なら容易に熟せるのが理屈なので不審がった。読売新聞社(主催機関)記者だった彼は控室で担当部長に呉の何と無くな変な声調^{アクセント}に就いて、長い間日本に暮して日本語を使っているから日本人と同様に喋れるのが当然だろうと訊いた。「“さア……” / A氏は首をかしげたが、そんなことは、どうでもいいじゃないか、といわんばかりの顔だった。/ すると、そこに居合わせた、ある人が私の方を向いて、/ “だから、呉清源は強いんだよ” / といった。/ “だから強い?” / “つまりね、日本語を上手に喋れるようになろうなんていう俗ッ気は、あの人にはないわけですよ。日本語の勉強にかけ時間があつたら、その分を囲碁の勉強にあてていたわけだから” / とその人はいった。』²³¹⁾ 『現代囲碁大系』第12巻『呉清源 下』(本人解説、藤井正義執筆、82)の第19局として、此の第3期日本最強決定戦(互先坂田九段対先番呉九段、61.1.11~12)が収録されているが、控室の話は無く他の出場者の木谷實・橋本宇太郎・橋本昌二・岩田正男七段の名前が出ている²³²⁾。呼び捨てで評した処を見ると同格か格上の大物棋士か関連機構の御偉方^{おえらがた}の発言と思えるが、一面の真理を突いているとして三好が感心した²³³⁾ 見方は「碁の神様」の脱俗性に触れている。呉の出身地の福建省や上海を含む東南沿海地域の言葉には「低高低低」型の声調が多く、其の母語風の発音は定住・帰化しても日本への完全同化はしない意識の発露でもあろう。

第3期日本最強戦の初戦も第1期最強者呉清源と第2期最強者坂田栄男の激突で蓋を開け、其の時呉は対局室に入るなり「これからは最高位が上座に坐ることにしましょう」と提唱し、坂田は「この前呉さんの時それをやらずに今からやるのは行けない」と言って従わず、何時も通り白番の呉が上座に坐って開始した、と『読売新聞』1960年元日の第1譜(1~11)観戦記「前と今の最強者」(覆面子)に書いてある。日本でも中国でも実力や年功序列が尊卑の尺度に為り矜持と礼讓とが表裏一体を成すが、277手で終った此の1局は呉の終盤の珍しい乱れで坂田の逆転勝ち(2目)と成った。共に6勝1持碁3敗の2人は後身の棋戦と為る名人戦の開幕が間近に迫っている故、慣例と違って雌雄を争う決勝戦は行わず首位を分ち合う結果に成った。同率首位の両者は3期間を通じて勝率の良い方に記念の銀杯を贈る為に調べた処、呉の19勝1持碁10敗と坂田の18勝3持碁10敗も全く同率(持碁は半星扱い^{はんぼし})である²³⁴⁾。持碁でも白番勝ちと為る様な勝負が着かなければ成らない時代の中の珍しい引き分けであるが、61年に坂田は本因坊・王座・日本棋院第一位(何れも高川格から奪取)・最高位・最強位・日本棋院選手権・NHK杯の7冠を獲り、呉は8月16日の交通事故で健康・棋力衰退への下り坂へと

転じ始めたので、2目程の損に為るらしい敗着（黒193）²³⁵⁾に由る呉の惜敗は王者交代の転換点かも知れない。両者の6番碁（53.5.27～9.2）も坂田先相先の格差が有るとは言え呉の1勝4敗1持碁に終り、坂田の白番2勝は五分に戦える事を意味しエベレスト初登頂の様な壮挙とまで言われた。坂田は『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』（本人解説、諸井憲二執筆、80）の中で、第10局（呉・坂田6番碁第2局、53.6.11～12、先番呉、先相先坂田）の最終譜（201～235）解説「7七度目の正直」を締め括る言葉として、『毎日新聞』の「時の人」欄の「切崩す呉清源の神格」と題する文の内の其の世界最高峰征服の喩えを引いて、対呉初勝利（3目）の本局を含む6番碁は自分にとっては「金字塔」とも言えると述べた。²³⁶⁾『呉清源 下』の自選25局（46～64）中5局の相手が坂田で、負けの5局も2局が対坂田戦なので、最盛期の呉に唯一対抗できた実力者と視る柯潔の坂田評²³⁷⁾は呉の実感に近いかも知れない。

同書第11局（打込碁第2局、先番呉清源、先相先坂田栄男、1953.11.19～20）の解説「研究の成果」に拠ると、呉の強さが碁界を覆う中で53年春から其の不思議な力を解明しようとする動きが色々有り、例えば『棋道』で数回に亘って新鋭棋士に由る「呉の碁と人」に関する座談会が開かれた。「形勢が悪くなると顔が紅潮する、といった話からレース巧者、勝負に対する厳しさ抜群、などの意見が出ているが、一致しているのは、心境面では充実しているが、技術的には完璧ではない、ということだった。」²³⁸⁾最強の敵手を技・心両面から徹底的に分析し集団で攻略法を考えるのは真に凄^{まこと}い事であり、形勢不利の時の顔の紅潮に就いての指摘も綿密な現場観察と旺盛な対抗意識の所産である。三好徹が目撃した呉の紅潮は十中八九結局落す事と成った碁の劣勢時の反応と思えるが、前出随筆の中の72年旧名人戦決勝7番碁（第4局、9.13～14）の観戦記者としての見聞にも、挑戦者藤沢秀行を迎撃する愛弟子林海峰が最善を尽せなかった場面の呉の紅潮が出ている。「二日目の午後三時ごろだった。/局面は林に有利だったが、まだ一カ所だけ危ないところが残っている。そこを防いでおけば、林の勝利は確実だったが、林は、そこをすっぽかして、ほかを打った。/その着手を対局室で見ていた私は、控室へ行って、呉に知らせた。/“えッ、林さん、そこへ打った！”/呉は怒ったようにいった。/“ええ。これで藤沢さんにもチャンスが生じたんじゃないですか”/と私はいった。/すると、呉の首筋が、内がわからす一と赤く染まった。私はどきりとした。/呉は盤面を睨め据えた。まるで、彼自身が戦っているかのような、きびしく鋭い眼差しだった。」²³⁹⁾

呉清源は中国出身の棋士らしく相手の前で心や感情の動きを外に出さない顔付きが常態で、ポーカーで手札^{てふだ}を読まれぬよう無表情を装うポーカー・フェース（中国語＝音訳＋直訳の「扑克牌脸」^{p ū k à p á i liǎn}）は、中国では胸の内を隠す天性を持つ練達な政治家等にも多い（直近の典型が胡锦涛・習近平）。2009年に国家体育总局棋牌運動管理中心主任が中国棋院院長と成り現在に至っているが、「棋」（囲碁・象棋・西洋象棋・5子棋^{れんじゅ}）と「牌」（橋牌[ブリッジ]・麻将[麻雀]）の関連は、聶衛平が能く党首胡耀邦と組んで鄧小平・鉄道部長（大臣）丁関根と

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

ブリッジ橋牌を興じた²⁴⁰ 事にも現れる。第1回中日囲棋擂台賽主将戦の勝利は当日(1985.11.20)満70歳と成る胡を喜ばせたが、鄧は第2回の対大竹英雄主将戦の時も日本からの勝報を待ち続け凱旋後に御馳走^{おぎら}で²⁴¹ 帰った。彼は聶が国家体育委員会・中国囲棋協会から「棋聖」の称号を授与された翌日(87.3.23)、持参させて来た証書を見て「聖人不好当啊」(聖人と為るのは大変だね)と笑いながら言い、中国史上唯一人の破格の榮譽に伴う棋芸・人品両面の至高の境地と至難の重責を自覚させた。²⁴² 因みに、^{マージャン} 麻將は愛好者の毛沢東が「中医」(漢方医学)・『紅樓夢』([清]曹雪芹^{きん}著長篇小説)と並ぶ中国文化の世界への3大貢献に挙げ、理由と為る複雑な駆け引き・情報処理²⁴³ は未だ人工^ま智能に攻略されていない要因かと思われる。中国棋院初代院長陳祖徳の中国国際象棋協会主席兼任(88~90, 96~2009)も興味深い^が、^{チェス} 囲碁・象/将棋・西洋将棋・西洋骨牌・麻雀等の室内頭脳競技では表情も重要な情報である。人間は感情を持つ高等動物で其の文字通りの表に出る情は内面の現れや推察の手段と成り、現に三好徹は林海峰を慮る呉清源の首が赤く染まった程の動揺から両者の連帯感を掘り下げ、「呉と林は、師弟であるが、それは、日本人のそれとは、また違ったニュアンスがあるように思われる。/ふたりとも幼いときに日本へきた。日本の空は、あくまでも異国の空なのである。それだけ、条件はきびしいのだ。/呉は、そのきびしさに耐えてきた」と書いた²⁴⁴。

林海峰の手記「ワンパク本因坊誕生まで」(『文藝春秋』1968年9月号)の回顧に拠ると、52年に呉清源が「大国手」の称号を受け訪台した時に6子局を打って^{もら} 貰い1目負けに終わったが、局後に此の少年に望みが有るかどうかという周(至柔)参謀総長の質問に対して、六・七段までは保証するが後は本人の努力次第だと「国府の英雄」呉は御墨付^{おすみつき}を与えた。10歳で京都に来た後は藤田^{ふじた} 梧郎^{ごろう} 六段から碁譜を借りて毎日5~6時間盤に向っていたが、日本語が解らず随分失敗し(例えば、勝った時相手から言われた「君は運が良かった」を褒め詞と思ひ込んで、一所懸命に憶えた此の「常套句」を自分に勝った大人の相手に言ったら激怒された)、東京で華僑小学校の4年生に通った時は野球・卓球や悪い事ばかり覚えて全然勉強しなかった²⁴⁵ (原文の此の記述中の「藤田[梧郎]六段」の段位は林の六段昇進と同じ60年に推挙されたので、林が藤田に師事した6年間の初頭[54年入門~翌年入段]ではなく掲載時の物である。『囲碁百科辞典[改訂増補]』の現役棋士の紹介で「25年六段」と元号表記が誤記された時期[正しくは〈昭和〉35年]は、自分を超越する大棋士を育てた明治世代[02年生]の大先輩の偉大さを物語っている)。一方、62年に6歳で来日した趙治勲は木谷一門100段突破記念大会で林六段との5子局に勝ったが、嘱望された内弟子として木谷道場で修業中の少年時代には異邦人である故の辛酸^なを嘗めた。道場の筆頭師範梶原武雄(同年・65年に八段・九段昇進)の自宅に研究会等で通った際、一寸目を放すと庭に出て犬と遊んでいる始末だったので彼の準師匠に心配を掛けたが、異国での修行は寂しくて犬にでも話し掛けるしか手が無かったのかも知れないと推察された。²⁴⁶ 人生に関^{グッス}った懐かしの小物を紹介する『日本経済新聞』夕刊の「こころの

玉手箱^{コーナー}」欄を見ると、2016年6月13～17日に連載された林海峰の5回分は「台湾の国手の贈状/恩義の地、歓待が励みに」で始まり、1966年授与の栄誉に対する感激・謝恩の念から異国で活躍する彼の帰属意識が窺い知れる。趙治勲^{アイデンティティ}の連載(2014.7.14～18)の1回目は愛読書の「石川啄木『一握の砂』/対局の疲れ 短歌が癒す」と題し、対局後の電車中でも年末の地獄谷温泉^{だに}に引き籠った棋譜並べの合間でも此^{これ}で心を癒すと言う。お気に入りの「友がみな——」(下略部分=「われよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来てて妻としたしむ」)が挙げられたが、犬と戯れた治勲少年の姿は巻頭の「東海の^{こしま}小島の^{いそ}磯の^{しらすな}白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」と重なる。日本棋院発売の名棋士湯呑み茶碗^{ゆの}に有る趙治勲揮毫の「孤雲」は自画像の点睛の様に思え、林と同じく完璧な日本語を操り日本社会に融け込むに至った後も残っている個性を思わせるが、異国の空気の中で耐えなければ成らない厳しさは非民主主義時代の呉清源の比ではない。

20世紀「碁神」の帰属意識^{アイデンティティ}・念力等に覗かれた技量進歩の要因

「1つの妖怪が欧州を彷徨っている、——共産主義の妖怪が。旧欧州の全ての権力が、此の妖怪に対する神聖な討伐の同盟を結んでいる。」『共産党宣言』の此の書き出しに擬えて其の100年後(1948)後の事情を形容するなら、「1人の怪力が日本の碁界を席卷している、——呉清源の怪力が。日本の大勢の棋士が、此の怪力に対する必死な抵抗の連合戦線を結成している」と言えよう。53年春から「倒呉」(「倒閣」^{もじ}を振った造語)気運が高まり特徴への探求が活発化したが、同年5月刊の『垢石傑作選集 人物篇』(日本出版協同)に収録された「呉清源」の中で、随筆家佐藤垢石^{こうせき}は呉の精神構造の根幹を示す秘話を披露し其の満面の紅潮を描いている。彼は51年4月初旬の呉対本因坊昭宇の読売10番碁の6勝2敗2持碁の成績を踏まえて、米国とソ連の様な身の上である呉と藤沢庫之助^{いづ}も何れ対局せねば成らぬ運命を持っており、日本棋院辺りの多くの人々は呉6分・藤沢4分が間違いの無い賭けだろうと言っているが、世評は出鱈目ではなく最後に呉が日本の碁界を征服する事に成るであろうと冒頭で述べた。呉は若い時から日本の碁界征服を心に期していたので此の結果は偶然ではなく、実現の緒に着いた今や世の人に呉の念力^{ねんりき}の在り所^{どころ}を知って貰う^{もら}為に思い出の話をしよう、と切り出した上で筆者は37年9月下旬に胸の病で静養中の呉を訪ねた時の会話を再現する。信州富士見の高原療養所に入院の3～4ヵ月で呉は抵抗力の増強に励み体力を回復していたが、元々軽かった其の病氣に対する見舞いの第2の目的として別の心遣いが有ったのである。「それはその当時、七月の中旬に日華事変がはじまつたばかりで中国軍は連戦連敗、蒋介石は奥へ奥へと逃げ込んで行く、哀れな折柄であつた。この祖国の苦難に際して、呉清源はどんな感想を抱いてゐるか、私はそれを知りたいと思つたのである。さうして、彼の感想の持ちやうによつては、深く慰めてやりたいと考へてゐた。」

最初は、病気の経過のことから棋友の消息、遷り行く秋の眺めのことなど話してゐたが話題は次第にこのごろ大きな見だしで報ぜられてゐる日華事變のことに移つて行つた。私は、この事變に対する呉清源の感想を誘ふやうに仕向けて行つた。すると彼は言葉少なに、また遠慮するやうにぼつぼつとこんなことをいつた。

——末は、どうなることかと人並に心配が起らないでもない。戦争といふやうなことは結構な話ではないと思ふ。結構な話だと思ふ人は一人もあるまいが、とりわけ私のやうに中国に生れて、いまでは日本人となつてゐる者とすれば、日支が争ふなどとはまことに以て、ありがたくない。ならうことなら一日も早く、平和に帰つて欲しいのが山々である。

かう述懐して、しみじみとするのである。私は、これをきいて切なる言葉であると思つた。そこで私は、問うてみた。

「とはいふけれど、現在日本に帰化したとはいひながら、中国がかうも日本に苛められてゐる場合、君は日本に敵愾心は起らないものか」

と言つて私は呉の顔を見たのである。

「……………」

彼はこの間をきいて、しばし瞑目して唇を開かなかつた。しかし、やがて眼を開いて静かに語りはじめた。

「——御説の通りである。私は、帰化して日本人となつてゐるが、この腕のなかには中国の血が流れてゐますよ」

かういひ終ると彼は袖から左腕を出して、前膊の白い皮膚を右の掌で二三度叩いてみせた。

「——而かも、蒋介石は私と故郷を同じくしてゐます。中支浙江です。私は蒋介石の心事を思ふと、胸が一杯になります。

と、いつて彼はまたうちしほれた。やがてまた言葉に力を入れて、

「私は、一つの信念を持つてゐます。たとへ蒋介石が日本に征服されたとして、私が日本を征服してその仇を取つてやるといふ信念を持つてゐます。私は、この痩せ腕で武器を執つて血を見る戦争の術は知らないけれど、私は碁の闘ひを持つてゐます。遠からず私が、日本の棋界を征服して凱歌を揚げて故郷中国へ帰つて行く、その確信です。蒋介石よ、その日がくるまで隠忍自重してさうして最後に溜飲を下げて貰ひ度い。といふ念願です」

かう語りながら、呉清源は面を紅潮させ、清純な眼底を輝かせた。

私は、これをきいて、ひとりでに頭が下つた。眼頭に熱いものを感じた。

しかしながら私はこの話を誰にも語らなかつた。殊に、戦争中血を見て吾れを忘れてゐる日本人がこの話をきいたならば、どんな不祥事が起らぬとも限らないと思つたからである。

呉清源が今は、日本棋界征服の緒についたこと、私が今から十三、四年前彼を訪ねて、この話を交し

たことを想ひ合せて、読者諸兄にこの一文を読んで戴きたいと思ふ。

その時、呉は二十二歳の若年であつたのである。旺也其念力。²⁴⁷⁾

呉清源の現役時代に公表され本人の了解も有ろう遣り取りは信憑性に疑問の余地が無く、^{それ}だけに日中戦争激化の厳しい情勢の中の「非国民」的な敵意の噴出^{まこと}は実に衝撃的である。^{やまさき}山崎豊子の長篇小説『二つの祖国』（新潮社、1983）に登場する在米日系人は太平洋戦争中、自ら市民権を持つ米国に忠誠を尽して母国と戦わざるを得ない事に身を裂く^き思いがするが、国籍取得の手続きとして日本への従順を誓ったはずの呉は建前に拘らず^{くだり}割り切っていた。福建出身の彼が蒋介石を中支浙江の同郷とした件は実情・用語の両方で違和感を覚えるが、戦後死語化した「中支」は『日本国語大辞典』で「かつて、中部支那を略していった語。現在の中国の華中にあたる」と説明され、【華中】の語釈は「中国中部、揚子江中・下流域の総称。江蘇、安徽両省の中南部、浙江、江西、湖北、湖南の各省を含む。気候温暖で米作が盛んで、また、工業が発達」なので、北に隣接する浙江省と共に現代中国で華東の広域に区分された福建省は入っていない。『広辞苑』の【華東】の「(Huadong) 中国の東南地方。一般に、上海市と江蘇・浙江・安徽・福建・江西・山東の六省を指す」は中国の常識と合致するが、【華中】の「中国中部の称。今日では、湖北・湖南・江西の三省を中心にした地域」は、「両湖」・河南とする今の中国の区分と違い江西の2重域籍（「2重国籍」に因んだ造語）が生じる。『日本国語大辞典』では古今中国の困碁最先進地域と為る華東は立項されていないが、『広辞苑』に無い【中支】の項に出典の「残夢（1939）〈井上友一郎〉七“中支の戦場から何か重大なニュースがなかったらしく”も有る。戦中に現れ数年後に消えた此^この言葉の用例を見ても其^その暗黒時代の殺伐さが実感できるが、一見文弱そうな呉清源の戦時下の強固な抗日意識は中国人・中国系の特質を物語っている。曾てイラン国王パーレビ（41～79 在位）は「自覚」を中国人の心性・生き方の鍵詞^{キーワード}とし、中国人は国の内に居ても外へ出ても中国人としての自覚に由って結び付いており、政治的に如何に対立していても究極的には同じ中国人で中国の伝統を誇りにしていると述べた²⁴⁸⁾。中国人は伝統的に政治的・社会的な帰属よりも血縁的・文化的な帰属を優先させ勝ちで、定住国/地域や国籍が変わっても簡単に中国的な感覚・習性・観念を変えられないのである。

『広辞苑』の【華僑】の「(“華”は中国, “僑”は他国での仮住まいの意) 中国本土から海外に移住した中国人およびその子孫。東南アジアを中心に、全世界に散在する。牢固たる経済的勢力を形成し、その本国への送金は、中国国際収支の重要な要素をなしていた。第二次大戦後は二重国籍を捨て、現地の国籍を取得する者が増加し、彼らを華人と呼び、中国籍を保持したままの者を華僑と呼んで両者を区別する場合がある」という解説の通り、華僑・華人は中国の経済発展に多大な寄与をして来た^{ほど}程^{アフリック}母国に対する帰属意識が強い。鄧小平も得意な「橋牌」と

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

同音・同声調(qiáopái)の「僑牌」(華僑・華人牌^{パイ} [切札])を用い、3千万人に上る彼等の家郷・故国への眷^{けんれん}恋を経済的な貢献へと転化させる事に成功した。呉清源は日本で中国籍→日本籍→無国籍→中国籍→日本籍へと身の置き方が二転三転したが、**中国人/中国系として日中交流を促進し中国囲碁の向上に力を尽したい気持が終生貫かれた**。貴方には中国人の部分とマルクス主義者の部分のどちらが多いかと外国人記者に訊かれた時、周恩来は自らの信念及び総理としての対外的な立場からか中国人である方が多いと答えた。²⁴⁹⁾ 毛沢東も「マルクス主義者に成る前も中国人で成った後も先ず中国人だ」と自己規定した²⁵⁰⁾ が、**国土・人口・歴史・文化等の途轍も無い規模の上に立つ中国の強くて深い求心力は侮れない**。『呉清源回想録 以文会友』(白水社、1984) 第7章「名人戦以降」の中の「日本棋院との問題」の1節で、47年以降棋院から除籍されていた事を65年に初めて知った時の衝撃が記されている。師匠瀬越憲作が当時提出した呉名義の辞表は本人が提出したも同然の物だと棋院側は主張したが、呉は復帰の条件と為る謝罪を拒否し詫言を入れるのは棋院の方だと反撥し双方の關係は拗^{こじ}れた。「この問題に関してだけは、私は一步も譲れないのである。たとえ師匠の出した辞表であろうと、身に覚えのないものには変わりなく、それを自分が書いたと認めることは、国際人としての私の歩んだ歴史に傷がつく。私の歴史に傷がつくことは、中国大陸や台湾に住む十億の人々の名誉にも傷がつくことである。私には、祖国の人々の期待を裏切らないような生涯を送る使命が課せられているのである。/私自身、脱退をとにかく認めて、改めて日本棋院に復帰したほうが、自分の利益になることはよく承知している。それだからこそ、利益に誘われて脱退を認めるということは、なおさらできない相談なのである。」²⁵¹⁾ 国際人としての歴史や10億の中国人の名誉に関するとは凄まじい「民族自尊心^{ナショナル・プライド}」の現れで、同じ都市に居る日本人の師よりも籍が抜けた祖国を重んじる処は中国人・国際人の彼らしい。第6章「相次ぐ十番碁」の内に「棋士生命を賭けた十番碁」と題する1節が有るが、**其の魔力は自分と出身国の名誉や囲碁発祥地の伝統を背負う重責にも由来した様に思える**。

囲碁に対する呉清源の歴史的な貢献は日本棋界を征服した偉業と神業的な棋芸だけでなく、本因坊秀哉との「日支対決」(1933.10.16~34.1.29)で史上初の本格的な国際戦を作った事も有る。此処で言う国際戦は主に2国/地域間の個人又は団体の少人数の公式/交流戦(親善・招待試合は除外)、世界戦は中・韓・日3強の棋士が恒常的に共に出場し個人戦本戦進出者が16人以上と為る年齢・性別制限無しの囲碁専門個人選手権戦^{クイットル}(農心辛ラーメン世界囲碁最強戦等の団体戦は別範疇、若手限定のグロービス杯世界囲碁U-20や穹窿山兵聖杯世界女子囲碁選手権、非囲碁専門大会の世界智力精英運動会の囲碁部門等は含まない)を指す。呉の引退(84.2.24)の4年後に初の世界戦の発足で囲碁の新時代が迎えられたが、『呉清源二十一世紀の打ち方』(日本放送出版協会、97)で提唱された新世紀の試みは、**其の逝去の翌年からの棋士 vs. 人工^A智能^Iの異次元対戦**に由って1つの可能性が提示された。**AlphaGo 対樊**

磨の前哨戦に次ぐ「第1次世紀大戦」(造語)の卓^{テ-ブル}に韓・英の国旗が貼ってあり、人類の代表を以て自任した李世^{イセドル}芑は自身及び自国の栄光の為に抗争する気魄^{あらわ}も顕にした。『囲棋天地』2016年第14期巻頭の「資訊」(情報)欄の写真付き記事の3本中の1本目は、「壹陸零零」の題で韓国^{ソボンス}の徐奉洙九段(63)の職業生涯中の1600勝達成(6.14)を紹介し、次の「二十六世」の内容は井山裕太の本因坊5連覇(6.30)・26世本因坊の資格獲得で、最後の「胸有丘壑」(胸^{きゅうかく}に丘壑^{イセドル}有り)は李世^{イセドル}芑の同月下旬の2つの言動を取り上げている。1つ目は2016年夏季達沃斯^{ダボス}(世界経済)論壇^{フォーラム}(中国・天津^{てんしん})で対AlphaGo戦の感想を率直に語った事で、自分は今もう「它^た」(物・事を指す中国語の単数代名詞)と対局したくないと心境を吐露し、人類が囲碁の領域で人工^{人工}智能に勝つ事は益々難しくなるとの見通しを示す一方、「它^た」(AlphaGo又は人工^{人工}智能)に娘の碁の指導を頼みたいと述べた、と言う。次は「30日に又^ア非職業女性棋士^{チェン}張慧蓮^{ヘヨン}と2人組を成し、独島(日本で竹島と称す)に上陸し、東島の灯台“望郷台”で“独島分ち合い[中国語訳=‘分享’]杯”特別対局を行い、著名歌手・韓国棋院広報(同=“宣伝”)大使^{キムジャンファン}金長勳^{イヌソ}と李瑟娥^{ベア}四段の2人組を破った。特別対局は勝者組が500万圓(同=“韓元”),敗者組が1000万圓を寄付し、社会の底辺の人々への救済に用いられる」と為っている²⁵²⁾が、囲碁番組主催者と組み202手で白中押勝ちを収めた李^イは此^この慈善事業^{チャリティー}で2重の愛^愛国心^{あらわ}を顕した。其々約45万・90万円相当の喜捨は社会的な弱者と苦楽を分ち合う事は国を利する善行で、領有権紛争を抱え日本と分ち得ない東海の小島の磯で微笑みながら碁を打って戯れる挙動は、張^{チェン}と同じ6段²⁵³⁾の独島広報大使^{キム}金を広報大使に迎えた韓国棋院と同様の国益重視を思わせる。

彼女は満45歳と成った翌日(2012.8.15)に当る光復節(法定祝日の独立記念日)の際、67年前の朝鮮半島の日本統治下からの解放を記念し「独島^{トクト}の守り人^{もびと}」の責務を果すよう、学生等と共に変則的な交代水泳(移動中に船内の簡易水泳競技場で泳ぐ)で当該島に渡り、到着後に疲労が祟って持病^{バニツク}の恐慌障害を発症し病院への緊急運搬で内外を騒がせた。²⁵⁴⁾ 表記が「金章勳^{キムジャンファン}」と為る日本で「反日活動家」の形象^{イメージ}が強い²⁵⁵⁾事は韓国でも知られているが、4年前の三星火災杯開催中に観戦者の彼女と意気投合した李世^{イセドル}芑は今回の棋戦創設に乗り気で、韓国人が韓国の島で碁の勝負をするのは何か問題が有るか^と澄ました顔で言って快諾した²⁵⁶⁾。14年11月9日に韓国歌手李承哲^{イスンチョル}(47)が東京羽田空港で管理官から入国拒否を告げられ、理由の「最近報道された事」は光復節の前日に独島^{トクト}で南北統一を願う歌を発表した事と思われた²⁵⁷⁾。大麻^マ吸引に由る有罪判決を受けた1990年以降15回も入国できていただけに憶測が飛び交った²⁵⁸⁾が、韓国政府の遺憾の意に対して菅義偉内閣官房長官(65)は竹島の件とは無関係だと表明した²⁵⁹⁾。『囲棋天地』の記事の題の中の「丘壑」は、『広辞苑』では「おかと谷。転じて、隠者の住む所。また、隠者の心の楽しみをいう」、『日本国語大辞典』では略同じで転義に「隠者となること」も有り、[六朝]宋の「謝靈運・齊中讀書詩」の典籍も付いているが、『全訳漢辞海』第3版(佐藤^{すずむ}進・濱口^{はまぐち}富士雄編、三省堂、2011)の語釈の通り、中国語では「①お

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

かと谷。山水。②深山幽谷の隠者のすまい。俗世間から遠くはなれた所。〈謝靈運・詩・齊中讀書〉③深い思い。考え深いおもむき」の多義と為っている。中国で『広辞苑』と同じく知名度・被引用度が抜群な中型国語辞書『現代漢語詞典』の第6版(中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編, 商務印書館, 12)の同項目は、「**㊦①**山丘和溝壑, 泛指山水幽僻的地方: 放情〜。**㊦②**比喻深遠の意境: 胸中有〜。」(㊦①丘と谷[山間・溪谷・山の小川], 広く山水の幽僻な処を指す。「丘壑で心行くまで楽しむ」。**㊦②**深遠な意境に喩える。「胸中に丘壑が有る」)と説明・例示されている。『広辞苑』で切り捨てられた漢籍由来の由緒正しい「幽僻」「意境」は『日本国語大辞典』には残っており、其々「(名)奥深く, 都を遠く離れていること。また, その場所, ひなびた僻地」, 「(名)(詩、文章などに表現された)情調、気分。境地」と解釈されている。『現代漢語詞典』の【意境】の「㊦文学芸術作品通過形象描写表現出来的境界和情調」(㊦文学・芸術作品の、^{イメージ}形象の描写を通じて表現された境地と情緒)は、**絵の美感や芸の禅味を持つ碁の日本流で「美学」「哲学」「思想性」と言う次元も此と通じる。**「胸有丘壑」の「心中に深い思案/高い見識」が此の件に関する日本政府の見解に当て嵌り、若し独島で主権主張の行事に出た文化人を全て排斥するなら李世^{イセドル}芑も撥ね返されかねない。彼は独島対局後の9月2~4日の第28回テレビ亜細亞選手権大会(東京)に出場したが、2連覇中につき7人中唯一1回戦で種子と為り2回戦で中国の李欽誠二段(17)に敗れた。万一入国拒否に遭って韓・中・日のテレビ早碁優勝・準優勝保持者の組み合わせも変ったなら、李は此の国際戦の最年少王者の座に着く保証が無く別の結果に成る可能性も否めないの、報奨の九段昇進を果した大出世は間接的ながら日本の良識的な寛容さにも一因が有ろう。

李世^{イセドル}芑の別々の言動を1つに纏めた記事の「胸有丘壑」の題の意図を推測するならば、**碁**の領域に於ける人工^A智能^Iの超人的な進歩への諦観と容認は高い見識の「丘壑」と言えるし、独島対局を「放情丘壑」に引っかけた節も有れば此の離島を韓国領として認める事に為る。但し終局後の対戦者歓談の写真の下の記事中の「独島(日本称竹島)」の併記が示す様に、韓国棋院の広報大使起用と対極的に外交紛糾に巻き込まれぬよう細心の注意を払っている。中国の碁界は棋道の天性のみならず専政体制の恐さを熟知する故に政治と距離を保つが、**囲碁振興**が1960年代の対日交流に始動し半世紀後の対韓外交で効果を発揮した様に、**碁**と政治の互恵が見られ3強国競合でも**碁**・政治共通の進取精神・^{バランス}均衡感覚が奏功した。習近平主席は2013年6月27日に人民大会堂(国会議事堂)での「国宴」(国賓を招待する政府主催の宴会)で常昊を陪席させ、朴槿恵大統領に往年(1997~99, 01)の第一人者を紹介した上で**中国の碁**の進展を自慢し、「最近成績が非常に好い。後に継ぐ人も多い。已に多くの人が“石仏”を超えた」と述べた。碁に不案内の朴は世界に誇るべき**自国の英雄**を指す「石仏」の意が解らず只笑っていたが、翌年7月3日青瓦台の大統領府で習を歓迎する国家晩餐会に当の李昌鎬を陪席させ翌日に習に正官庄天^{バククネ}参(最上級の高麗人参)・高級銀茶器と共に特製の碁石・碁笥を

贈った。習は同じ愛好者の李克強と比べて公的な場での囲碁談義や「石仏」への称賛は少ないものの、多くの政治家・財界人よりも中国で知名度が高い彼との初対面を快く思った模様である。中国有数の棋士も殆ど彼に勝った事が無いと言って李及び韓国の囲碁を持ち上げた習は、此の複雑な遊技は人生の旅程と同じだという朴の感想に対して、囲碁には人生と世界戦略が入っている様だという意味深長な発言をした。²⁶⁰ 李総理も15年の訪韓(10.31~11.2)で自分と同じく6歳に碁を習い始めた常を帯同し、11月2日の両国青年指導者論壇の開会前に代表との会見で常を交えて李と歓談し、開会式の挨拶で韓国の或る著名棋士(李)の得意な「收官」(終盤収束)・逆転を手本に挙げ、若者の「後來居上」(後から来た者は上に立つ。後発の人物が従来の方を追い越す)精神を奨めた。即興的に語った此の件は李の感激と「総理の囲碁の知識は専門的」との評価を博した²⁶¹が、碁を外交に活用し常・李を2個の「石」に選んだ中国の戦術眼には深い意味が読み取れる。

李昌鎬は同世代の常昊(其々1975年7月29日と同年11月7日の生れ)と比べて、世界戦優勝(18回、1位)が遥かに多い(常は李世乭 [14回]・曹薰鉉 [9回]・古力 [8回]・劉昌赫 [6回]に次ぎ、朴永訓・孔傑と並ぶ3回)が、世界戦に於ける連年制覇時代(非連続の年を除く95~2000, 02~04)の終焉後の06年に、先ず1月10・12・13日の三星火災杯決勝3番碁で中国の羅洗河九段(28)に1-2で負け、更に第1回江原大世界杯韓・中囲碁対抗戦で常昊に敗れ(3.24)主将の大任を果せなかった。羅は対韓苦手の汚名を雪ぐ様に趙漢乘八段・宋泰坤六段(19)と李世乭・崔哲瀚九段を連破し、李昌鎬の世界戦決勝での対外国棋士不敗・対中番碁全勝の神話的な記録に終止符を打った。其の日は第1回中日囲碁擂台賽戦勝以来の中国囲碁の2番目の輝かしい日とされたが、江原杯韓中対抗戦は中国名「中・韓囲碁擂台賽」の通り中日囲碁擂台賽に肖った団体戦で、双方6名の最精鋭を出す勝ち抜き戦は両国棋界の雌雄を決する第1次大戦と見て可い(硝煙の匂いを放つ「大戦」は韓国側の棋戦名「韓・中囲碁大戦」から取った表現である)。必勝を期す韓国は実力が副将以上に相当する李世乭を1番手に当てる布陣の奇手を放ち、此の奇人は開幕式で結婚予定の電撃発表と共に勝利を婚約者への贈り物にすると宣言した。5足の靴下を買って第5局まで勝ち続ける決意の徴とした彼は初戦で朴文堯四段(17)に勝ったが、翌々日(2.7)に中国国家队総教練馬曉春が用意した新鋭陳耀燁五段(16)に撃破された。²⁶² 馬は前年8月の就任直後李世乭を当面の最大の敵として攻略法の集団研究を3度実施し、初日(8.11)に自らの対李敗局を検討材料とした古力はLG杯準決勝(10.19)で一矢を報い(同日に満50歳と成った母親への贈り物として予定の高級時計の代りに此の快勝を捧げた)、戦友と共に強敵撃破の手掛りを掴んだ羅洗河も三星火災杯8強戦(11.15)で李に完勝した。²⁶³ 馬は今回の人選で名伯楽の慧眼を以て序列では予備陣にも入らない陳を入れて見事に当たった²⁶⁴が、05年LG杯準優勝の陳は洪性志四段(18)を下した後「半目王子」安祚永九段(26)に負け、安は得意な寄せ勝負の凄腕で王檄五段(22)・

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

羅洗河^{いず}に何れも心憎い半目勝ちを取めた。其^{そこ}処で常昊が安^{アン}・金東燁^{キムドンヨブ}九段(48)・曹薰鉉^{チョファンヒョン}・李昌鎔^{イチャンホ}に連勝し古力主将を楽にさせたが、件^{くだり}の両棋戦までの羅・常の対李昌鎔公式対戦成績の0勝4敗・5勝20敗と照らし合せれば、2人の奇功は中国碁界が自覚した「恐韓病」(韓国恐怖症)の一掃の起点と位置付けられる。1960~70年代の「恐日病」は80年代の改善を経て90年代に略^{ほぼ}全快し今や根絶しているが、常昊は六段時代の第10回中^に日^に囲棋^に播台^に賽^に(95.4.17~96.3.30)で三村智保(25, 同じ2番手)・森田道博(24)・柳時熏(23)・小林覚(36)4七段と林海峰副将(53)に5連勝し、七段昇進後の第11回(96.5.30~12.27)で3番手として2番手以下の羽根直樹六段(20)・王立誠王座(38)・柳時熏天元・依田紀基十段(30)・小林覚副将、及び前回唯一勝てなかった主将の大竹英雄(54)を総崩れにした。第9回(94)以降の中国3連勝に由る4-7の劣勢で日本の協賛主(日本電気株式会社)の意欲も萎え、97年から女流戦・俊英戦・優勝戦の3部(其々1対1の3番碁)に縮小し5回で終了した。江原杯も常の快勝で主催国の体面が損なわれ発展無き(「発展的」を振った修飾語)解消と為ったが、上級団体戦で日・韓^{とど}に止めを刺した彼を対韓外交に活用したのは2重の実力誇示と言える。

開幕式では協賛主の江原大世界(韓国最大級の賭博場)の金振模社長が発案した余興として、中国棋士が自分の「酒友」(飲み友)である韓国棋士に酒を注ぎ2人で乾杯する事に成った。豪快な古力が先ず李世石^{イセドル}の処に瓶を持って行き、古と最も多く対局し親交も深い李昌鎔^{イチャンホ}が常昊と飲み干した²⁶⁵が、「中国囲碁世界制覇元年」(造語)と翌年に外交舞台に登場した常^イ・李と古主将・李先鋒の姿から、昨今の両国の棋士・囲碁人の「飲酒交流」の常態と盤外の絆の強さが実感・連想できる。初戦で激突した李昌鎔^{イチャンホ}と朴文堯は韓国人と朝鮮族出身として文化的な所縁^{ゆかり}だけでなく、同年の中国囲棋甲級聯賽^{いごAリーグ}で同じ貴州咳速停隊^{チーム}に所属し肩を並べて共闘する戦友の関係にも在った。「囲甲」(略称)では自国棋士より数倍も高い報酬で「外援」(外来援軍)を誘致する結果、韓国一流棋士が中国の地方隊^{チーム}の主将や主力を務める事が2001年以来全く珍しくない。「外援」導入の契機は00年の陸鎮碩^{モクジンソク}五段(19)の親しい劉菁^{せい}八段(25)に対する打診で、中国語が母語話者並みの彼が大好きな中国で重慶建設摩托隊^{チーム}の劉の「隊友」に成りたいと申し出た処、前年「囲甲」発足後連覇した重慶隊^{チーム}は大歓迎で国家体育総局に働き掛け許可を取り付けた。異名「怪童」の陸は中国棋士と同じ報酬で隊の主力と成り好成績で5連覇に貢献したが、充電の為に休場した04年には彼はLG杯で準優勝し重慶隊^{チーム}はいきなり3位に転落した。初年(古力・周鶴洋九段[25]・劉菁等6名中の一員)の11勝7敗と翌年(同)の13勝3敗を経て、03年(劉菁不在)の12勝1敗は両国で韓国棋士参戦の利点を改めて痛感させた。李世石^{イセドル}の初出場は正に04年の事であり陸^{モク}・李の実績・実力によって待遇も吊り上げられ、李が貴州咳速停隊^{チーム}に加盟した時に吞ませた8局で50万という要求は「韓軍」重賞の前例を作り、本国以上の好条件で中国の強豪と腕を競える故に韓国棋士が大挙に「囲甲」^{Aリーグ}に遣って来た²⁶⁶。例えば韓国の世界絶対最強時代の末年の大晦日(05.12.31)に当る最終戦(第22

ラウンド
輪, 重慶)で、甲級残留が懸る四川^{チーム}嬌子隊の為に重慶^{チーム}隊の周鶴洋主将から貴重な1勝を上げたのが曹薫^{チョウファンヒョン}鉉である²⁶⁷⁾。呉清源は『以文会友』第6章中の「林海峰少年」の1節で^{それ}までの唯一の弟子に就いて、「林少年は、院生として日本棋院に毎日通い、囲碁の修業を始めたが、順調に腕を上げるといふわけにはいかなかった。(中略)まだ子供である。親元を一人離れ、言葉も不自由で孤独な毎日であったろう。しかも、私もそうであったが、勝負の世界で相手を負かして伸びていかなければならないということは、子供心にはなかなかピンとこないものである。林少年も、毎日囲碁の勉強に明け暮れ、手合で勝たなければならないという院生の生活になかなか馴染めず、一人で浅草に遊びに行ったり、山手線に乗って半日グルグル回ったりして、棋士の卵としての修業に集中できないようであった」という一時の事象を振り返り^{プロ}職業棋士予備軍の成長の法則を次の様に述べている。「棋力というものは、生活を賭けてプロを目ざし、多くの同じ境遇の棋士の卵の中で揉まれなければ向上しないものである。」²⁶⁸⁾少年が親の付き添いで上京し道場で勝負意識・腕を磨く中国の現状とは隔世の感が有るが、生存・発展を^{プロ}図る^{プロ}職業棋士は^な尚更^な内外の同業者との競争^{しのぎ}で^し鎬を削らなければ行けないので、韓・中の急伸は中国の「内戦」までが相互向上の踏み台と為る交流の頻繁さにも帰せ得る。

NHK テレビの「72時間ドキュメント 囲碁の魔力に囚(とら)われて」(2016.7.8 放映)の中で、東京新宿歌舞伎町に在る碁会所「秀策」の24時間営業中の人間模様が映し出されている。非^{アマ}職業高段者や^{プロ}職業棋士も通う^こ此の名所に現れた武宮^{ようこう}陽光六段(39、武宮正樹の長男)は、一般人らしい客と手談を楽しんだ後^{カメラ}撮影機の前で^{プロ}職業棋界の厳しさを来店の人々に紹介し、公式戦で双方とも同額の対局料を貰えるが敗退者は同棋戦の次の対局料が無いと語った。中国の「国劇」(造語)京劇に当る伝統芸能の名を冠す所在地の日本一の歓楽街に因んで、^{こもごも}碁の甘苦混在・悲喜交々の魔力は^も歓楽と^も陥落の紙一重の差に^こ端的に^こ潜んでいると言えよう。巨匠坂田栄男も院生時代の入段試験で仲間の集団妨害作戦に由る体力負けで1年遅れた²⁶⁹⁾し、新巨匠井山裕太も曾て中部・関西両総本部1名の入段者決定戦で負けて大泣きした²⁷⁰⁾から、^{プロ}職業入りの狭き門への挑戦も突破後の精進も天国と隣り合う地獄での暗夜行路に等しい。『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』(1980)の「序」に曰く、「私がこどもの頃は、碁はゲームではなく勝負であった。そういう世潮であったのである。だから、私はこども心にも一局一局が真剣勝負であった。どんな相手にもこの姿勢を崩さなかったものである。碁会所めぐりをやって、アマの天狗連中ともずいぶん打った。私の実戦的鍛錬はこうして培われたのである」²⁷¹⁾。大正世代(20.2.15生)の彼は^{ちやうど}恰度昭和(26.12.26~89.1.7)の^{あかつき}暁に小学校に入ったので、6歳上の呉清源と22歳年下の林海峰の少年時代と違う^そ其の^{ごころ}子供心の中の強い勝負意識は、昭和屈指の勝負師を育てた昭和の碁の競技化と呉・林が育った中・台への先行を頷かせる。執筆者諸井憲二の巻末随筆「坂田栄男 栄光の軌跡」では栄男少年独特の実戦練習に就いて、他流試合が好きで^{ほうほう}方々に有る碁会所に集まった人々と賭け碁も含む対局をした事に触れた。「ま

だサムライの気風の残っていた時代である。碁を勝負と見る。プロも“棋士”ではなく“碁打ち”であった。/碁をゲームとして楽しむ傾向は戦後のことであろう²⁷²⁾という講釈から、平成の碁の相対的な弱体化の遠因や日本の後追いをする中国の棋界の将来に思いを馳せる。

坂田栄男の父親は無類の碁好きで自営の雑貨店を母親に任せて碁ばかり打っており、家の2階は近所の碁好きが大勢集まって碁会所みただったので、少年時代の環境は碁一色に塗り潰されていたと言う。²⁷³⁾父の膝に^{もた}靠着て打ち碁を見ている内に海綿に水が^し浸み込む様に自然に碁の規則^{ルール}を覚えた²⁷⁴⁾が、「真剣勝負」とも言う賭け碁で親の損を取り戻す²⁷⁵⁾「内援」(造語)の戦^{いくさ}も必死^{はくく}さを^{はぐく}育んだ。「坂田の碁は、いわゆる“道場剣法”ではなく“ケンカ殺法”である。実戦の中で鍛え抜くやり方は、最も坂田に適していたのである。坂田の才能はぐんぐん伸びていった。」²⁷⁶⁾巻末随筆第3節「プロへの道」の中の流儀命名は中国棋士の「喧嘩殺法」を連想させるが、時越と共に此^{これ}を得意技とする柯潔は少年時代に碁石の音と共に明け暮れた坂田²⁷⁷⁾を上回って、母の胎内で俱^{とも}に囲碁好きの両親が経営を請け負った棋社(碁会所)の碁石の音を聞いていた²⁷⁸⁾。坂田は院生時代に賭け碁で負かした旦那の腹癒せで日本棋院へ苦情を言われた事も有る²⁷⁹⁾が、世界王者に成る直前の柯は広東省珠海で賞金の使途を訊かれた時「後ろは^{マカオ}澳門でしょ」と答えた²⁸⁰⁾。2006年から米国のラスベガスに代って売り上げが世界一を占めている「賭博の都」は、習近平政権の汚職・腐敗取締と節約令の飛び火で客足が鈍く愛顧の公言も憚れているが、^{ネット}電脳網対戦で^{ポイント}能く累積点数を自分に賭ける彼の「豪賭」(大金を/豪快に賭ける)欲望が強い。彼の入段の2年前の江原杯が中国棋士の意欲を刺激した要因にも賞金の破格の高さが有り、『囲碁天地』06年第1期の報道は賞金総額7億圓・優勝国1億5千万圓(1^{ウォン}圓=約0.124円)を強調した²⁸¹⁾。此の「一擲億金」(中国語起源・日本語共通の「一擲千金」^{なぞら}に擬えた造語)の新棋戦は、同誌第4期の記事では準優勝国5千万圓・3連勝者5百万圓・3連勝以上は1勝^{ごと}毎5百万圓と続報し、^{これほど}此程^{スポンサー}気前の良い待遇は協賛主の業種・財力に見合い双方の「豪賭」の基調を定めたと言う²⁸²⁾。出場希望が多い中で韓国側は別格の主将予定者李昌鎬^{イチャン}以外の5名は全て選抜に由って決り、中国側も選抜免除の常昊・古力を除く順位得点上位16名+新鋭数人の選抜戦が行われた。争奪者の俞斌・周鶴洋・羅洗河3九段、胡耀宇(24)・王磊^{らい}(28)両八段、孔傑(23)・邱峻(同)・劉星3七段、謝赫(21)・彭荃^{ほうせん}(20)・劉世振(28)・黄奕中^{えき}(24)4六段、王檄・陳耀燁両五段、朴文堯四段、古靈益二段(14)²⁸³⁾から、^{たい}下剋上^{たい}の世潮を現す様に後ろから2~4位の3人と九段陣の最後の羅が念願の入場券を得た。

第2回夢百合杯終了後の『囲碁天地』2016年第2期特集「柯潔三冠加身」(柯潔3度目の戴^{かん}冠)の中で、張大勇は「自分には些か受け入れ難い」と断った上で柯の辛辣な日本囲碁評を披露している。柯は呉清源を除く名棋士の中で坂田栄男が唯一現代的な意識と実力の持主だとした反面、井山裕太は基本的には日本囲碁の従来^{たい}の道に沿って成長して来ており、今の彼は中国に来たら碁界の水準では上位30名の内に入るのも難しいと言いつつ²⁸⁴⁾井山の世界順位は

発売日 (1.15) の時点では柯・朴廷桓パクジョンファンに次ぐ3位とする認識も有った(仏蘭西の計算科学者 RémiCoulom が創り 15年9月に世に問うた此の GoRatings に就いて、中国棋界では逐日更新等の長所を評価する半面、不備を指摘し違和感を表す声も多い²⁸⁵⁾) が、李世乭イセドル対 AlphaGo 戦の頃には井山が17位と為る統計も複数存在し²⁸⁶⁾ 3強国で流布しており、『毎日新聞』16年3月13日の記事「人工知能に“大局観”/井山6冠“恐ろしい”/囲碁トップ棋士に完勝」に付された松原仁教授の論評「人間の實力超えた」にも、「李世乭は世界トップクラス(世界ランキングは5位。ちなみに日本で無敵の井山裕太は17位)なので、コンピューター囲碁はもはや人間の實力を超えたと言ってよい」と有る。井山は『中央公論』16年7月号の「囲碁・将棋頂上対談 七冠を背負う重圧と解放感」の中で、韓国・中国のトップ頂上に引けを取らないのではないかと羽生善治はぶよしはる将棋名人(45)が訊ねると、世界のトップ頂上20くらいは誰が優勝しても可笑しくないのが今の状況で、其の中でトップ5人とかトップ中のトップ頂上とも其それなりに行れると思うがややぶ稍分が悪いと答えた。²⁸⁷⁾ 大7冠独占実現(4.20)後の記者会見で述べた「世界のトップ頂上に劣る部分が有る」に就いて、特に柯潔パクジョンファン・朴廷桓イセドル・李世乭イセドル・時越キムジソク・金志錫等5人以上との差を感じると説明した²⁸⁸⁾ ので、本人の実感も加味すれば其の頃の世界では5位以下・20位以内と見て無難かも知れない(裴泰一 [09年発足の韓国等級順位制度を創案した韓国棋院順位委員会委員] の算定基準に拠り、同棋院が公表した16年3月末時点の世界順位では、上記5人中の柯潔パクジョンファン・朴廷桓イセドル・李世乭イセドルは最上位の御三家ごさんけを為し、時越キムジソクは上昇中の連笑パクヨソファンと朴永訓パクヨソファン・柁嘉熹びいく・聿昱廷キムジソクに次ぐ8位、金志錫キムジソクは姜東潤カンドンユン・周睿羊こし・唐韋星しう・辜梓豪さう・黄雲嵩そうの下の14位、井山は其の次の檀嘯セン・陳耀燁ウオンソソジンの後ろに位置し、以下の18~20位は元晟溟イドンファン・李東勲イドンファン・江維傑である)が、何れにせよ幾ら過小評価しても中国の30名以下とは毒舌いずが滑り過ぎ礼を欠く感が否めない。井山は1997年(小学2年時)第18回全国少年少女囲碁大会で優勝した後の武者修行で、中国の全国少年児童囲碁大会の児童組(部)に特別出場し5勝4敗で60人中の29位に終り、不本意な成績と初めて年下の子に負けた事で囲碁人生の中の最初の挫折を味わわされた²⁸⁹⁾ が、最も早幼時の比でない今の日本王者が中国の30位にも及ばないとは荒唐無稽の様に聞える。柯は井山の世界戦の実績が中国の序列30番目辺りの棋士と大体同じである事を根拠とし、後者は井山と違って世界戦出場セの機会に殆ど恵まれていないという事情にも言及した。²⁹⁰⁾ 其の勝敗の調査・比較は井山を重視し世界戦を尺度とする価値観の屈折した反映であるが、中国の上位30名に日本の棋戦優勝者級の強豪と互角に戦える人が多い事も否定できない。現に、16年の第3回百霊杯は32強が中国18と韓国14とから成り決勝は柯・陳耀燁の間で行われ、第21回三星火災杯サムスンの32強の中国20・韓国8・日本3・欧州1と、内の予選を突破した非種子シード(前期・国)・推薦枠シニア(女性・年長者・特別出場)外選手の中国11人対韓2と日・欧各1の落差は、日本の16強入り未達(結果は中9対韓7)と共に日・韓には嫌気が差す事態と為った。「第1回」の名が付く江原杯カンウォンの単発に終った帰着は過去の日本と近年の韓国の趨勢と同様、言わば「自

国に於ける自国主催の外国の為の棋戦」の屈辱・損失に耐え難い側面も有ろう。当時出場選抜で序列が下から2・3番の朴文堯・陳耀燁は11年LG杯・13年春蘭杯で優勝し、今も段位や知名度の低い新鋭の国際/世界戦決勝進出は間々有り中国の強豪層は実に厚い。

張記者は限り無く日本7冠王に近付いていた実力派棋士への酷評に同調しないながら、「当2015年初柯潔在京都屠龍擊敗井山裕太後、血濺五歩也就成了一段令人沈默的正名。」(2015年初めに柯潔が京都で大石を仕留めて井山裕太を撃破した後、其の「血濺五歩」は人を黙らせる名声の証明に成った)と書いた²⁹¹⁾。20世紀の日本囲碁に関する中国王者の忌憚の無い議論を記す此の1節の題「血濺五歩」は、[前漢]司馬遷著『史記』「廉頗藺相如列伝」の「五歩之内、相如請得以頸血濺大王矣」に由来する。秦王が趙王から絶品の璧を譲って貰いながら交換条件の15の城を渡す気が無いのを見て、趙の使者藺相如は玉の疵を示して差し上げようと秦王を騙して其の賞玩中の手から取り戻し、数に離れた立ち柱に寄り掛けて髪が逆立ち冠を衝き上げる程の怒気で秦王の不義を譴責し、約束を守らず私を追い詰めて奪い返そうとしたら頭を璧と共に柱に打ち付けて粉々にして遣ると怒鳴った。秦王の再度の約束も偽りだと見定めた彼は譲渡の前提として相手に5日間の齋戒を要求し、猶予期間を利用して使者に粗末な身形をさせ璧を懐中に締め間道を抜けて趙に帰らせた。5日後に秦王は藺から真相を聞かされ激怒したものの対趙開戦の決心が付かず放棄したが、後に弱小の趙を攻め国力の優位に頼って和睦の為の首脳会談に向かうよう趙王に強要した。酒宴で秦王が趙王に瑟(弦楽器)を弾かせ秦の記録係が即座に史実として書き留めた処、藺は国の尊厳を守るべく秦王に歌を歌うよう請い瓠(打楽器)を差し出して打って貰おうとし、嫌がる秦王に対して「此の頸の血を5歩の距離しか無い大王に注ぎ掛けて見せましょうか」と迫り、相手が渋々1回だけ打つと自国の記録係に「何年何月何日、秦王、趙王の為に瓠を打つ」と書かせた。璧を無傷で奪還した戦国時代の「完璧帰趙」(璧を完うして趙に帰る)の故事の後日談から転じて、請願ならぬ恐喝の殺し文句は白刃戦で敵の血が5歩以外へ飛び散る意にも用いられている。柯が日中阿含・桐山杯決勝(15.3.14、京都)前に日本の第一人者との初対局の抱負として、「讓井山“血濺五歩”」(井山に「大量出血」の破目と成って貰う)と霸氣満々に宣言した。²⁹²⁾加害側の熱血と被害側の悲酸に引っ掛けて「熱血飛散」とも意識できる此の四字熟語は、「殺し屋」時越の伝説的な「場均一条龍」([平均して]毎局「大龍」[大石]を屠す)と共に、新しい世代の中国棋士に多い血戦願望・殺気爆発の習性を形容する決り文句と為っている。其の宣戦布告は不遜の嫌いにも関わらず実力の裏付けと結果の証明が有るから容認されたが、彼が尊敬する坂田栄男の「黄金時代」「有頂天時代」の自身と棋界への回顧が思い出される。「性格が表面に現れるのだ。わたしはずいぶんとわがままをいったし、憎まれもした。自分の気づかないところで人を傷つけていたかも知れない。/いまふり返れば、内心じくじたるものがあるが、おしなべて碁界は私に対して寛大であった。勝てば官軍という勝負の世界であろうか。』『現代囲碁大系』の『坂田栄男 下』の「序」の此の

述懐²⁹³)と呼応する様に、上巻の巻末随筆にも栄光の軌跡の中の「自己中心主義が(中略)頭をもたげた」頃に就いて、「勝負の世界では、勝てば官軍である。いくら理屈を並べても、敗者に発言権はない」と有る²⁹⁴)。

坂田栄男は選手権戦史上初の本因坊名人と成った1963年の前後4~5年を黄金期とした²⁹⁵)
が、藤沢秀行名人に勝って遂げた其の偉業は同じ大正生れの両者の死闘も駆動力であった。犬と猿の関係に在る彼等は感想戦で「何なら1番願いましょうか!」と不服を言ったりし、目撃者の高川格を仰天させた其の真剣さ²⁹⁶)は内外の強敵に対する柯潔の挑発にも見られる。柯が中国王者の座に上った直後の三星火災杯決勝3番碁で前王者時越と対決する事に成り、2人は初戦前日(2015.12.7)の記者会見で其々順位得点1位の奪還と保持の決意を語ったが、執拗な舌戦²⁹⁷)は各々1・2位を目指すと言う坂田・高川の平和的な共存とは対照的である。井山裕太の実力に対する柯の不当な評価の真意は恐らく対決に出て来て欲しい事に在り、小林光一の「地下鉄流」を貶す武宮正樹と同じく報道機関を喜ばせる奉仕精神も有った(武宮は本因坊位に在り自分の碁に大きな自信を持っている時期の例の問題発言に就いて、当然7番勝負で挑戦する棋聖も獲る気でいた訳で、開幕前に愛好者への空世辞の意味も有ってつい口が滑ってしまったと釈明し²⁹⁸)、柯も「血濺五歩」宣言は記者に材料を提供する目的が有ると会見場で笑いながら説明した²⁹⁹)^{サムスン})が、強豪間の露骨な敵対意識の激突が棋力の増長・囲碁の発展を触発できる摂理に注目したい。柯は決意表明の場で日本流に倣って控え目な模範言辞を並べ勝ちの中国棋界に反逆を起し³⁰⁰)、中・韓の最上級層との差を認めつつも余り対戦しない井山には歯痒さを感じるのであろう。井山の大7冠維持を切望する気持は日本の井山崇拝者よりも柯潔の方が切実なはずで、彼等にとって日本初の全高位独占者との戦いに勝てば「含金量」(価値の含有量)が高い。井山は阿含・桐山杯日中決戦で05・11年に同じ七段の古力・同じ九段の朴文堯に負けたが、「3度目の正直」を柯に阻止された年の12月25日に成都で黄雲嵩四段(18)を下した。『囲碁天地』の柯潔3冠達成特集記事に次ぐ特別報道「漫長的十三年」(長かった13年)には、^{ナショナル・チーム} 国家選手団の徽章を背広に付け賞杯を手持っている井山の写真が半頁の大きさも有り、3枚目の写真の説明は「日本選手は13年来初めて対戦後の記者会見の主役に成った」と言う³⁰¹)。碁界では絶対的な主役と為る優勝者は国籍・肩書・年齢・実績等に関らず尊敬されるので、「最前線」欄で^{とうろう} 佟禹林四段(24)が井山の好局として9頁の紙幅と28の参考図を使って詳解し、「驚艶一勝」(鮮烈な1勝)を導いた井山の強硬・正確な着手と強烈な「求勝欲望」を讃えた³⁰²)。同年のグロービス杯世界囲碁U-20で優勝し中国阿含・桐山杯決勝戦で陳耀燁を破った黄は、国内序列15位なので井山の同30位相当とした柯潔説を否定する様な敗北を喫した事に為る。井山の厳しい攻撃・逆襲の連発と異常な激烈は些かも伝統的な日本棋士の様には見えず、^{これ} 此も彼が日本の碁界で長年威勢を振るって来た要因であろうと佟は分析している³⁰³)^{サムスン})が、日本囲碁の既成の道に従って来たという柯潔の井山観と違う見方は中国棋界の主流に

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

近い。第15期阿含・桐山杯中日冠軍對抗賽(13.12.3, 杭州)で連笑四段(19)が中国に11連勝を齎し、此の功績に由って相手の村川大介(対戦翌日に満23歳)と同じ七段に昇進したが、彼も井山の棋風は中・韓棋士に近く力・乱戦では他の日本棋士より明らかに強いと見ている。³⁰⁴⁾

「漫長的十三年」に有る様に井山裕太は7冠独占以上に世界戦の成績を重んじると吐露し、中国側も融通の利かない国内棋戦の日程が世界進出の足枷と為っている事を理解している。³⁰⁵⁾ 異端児柯潔の反則的な放言も彼の自尊心を擦って引っ張り出して勝負したいのが本音で、同じく地位・名誉を賭けた一国の絶対王者に揉まれて棋力を伸ばすのが目的だと思われる。彼は四段時代の第2回百靈杯準決勝で2-0で朴廷桓九段を制した(2014.9.18・20)後、韓国の第一人者も所詮此の程度だから対邱峻九段の決勝戦には圧力を感じないと語った。³⁰⁶⁾ 使用名「潜伏」「秀芝」の柯・朴は電腦網上で衆人環視の中で千局以上の勝負をして来たが、朴に追い着き追い越した柯³⁰⁷⁾の上達は「国境無き年中昼夜無休電子碁会所」(造語)の賜物でもある。井山少年の成長も石井邦生師匠と主に電腦網上で約千局を打った³⁰⁸⁾事が基礎と為っただけに、国内2位に復帰した今も「龍胆」の名で韓国棋士等と打ち続ける同年齢の陳耀燁³⁰⁹⁾と対照を成す。目下の世界「両雄」国の間には電腦網上の「中韓10番碁」等の他人的な交流も盛んであり、06年三星火災杯韓国失冠後の権甲龍道場の北京修業(2.7~13)が好例として挙げられる。権甲龍(当時六段, 48)が主宰する職業棋士育成の同道場は「韓国の木谷道場」の観が有り、李世乭・崔哲瀚・元晟溟・白洪淅・姜東潤・金志錫・朴廷桓(此の7人の世界戦優勝経験者は入段順)等の高手を輩出して来たが、正式発足(1987, 83年に設立した囲碁教室から転換)以来15年連続実施した研修会は、対中交流の希望が高まる中で今回北京の岳樞道場と共催する形で初めて海外で行われた。岳樞道場主宰者の岳亮(当時四段, 23)・権孝珍(同, 23)は前年に初の中韓棋士結婚をし、岳は翌年に韓国棋院客員棋士として「婿入り」し今や夫婦(妻の父)に代って権甲龍道場を運営している。最名門道場の主の娘が語学力と北京修業の機会に由って縁を結んだのも韓・中の絆の証であるが、身内の道場に赴く韓国側の職業棋士9人・院生30人・準院生42人は全て私費で参加し、連日の訓練対局も真剣勝負(最後の徐奉洙等対劉星・周睿羊等の10人親善対抗戦は11-9の中勝韓敗)であった。³¹⁰⁾ 首爾から北京へ行くのが日本の遠隔地の愛好者が東京の「秀策」に寄ると変わらない時世で、若き坂田栄男の「碁会所荒らし」的な野戦演習は移動も費用も略要らずに容易く出来る。柯潔の第2回百靈杯優勝後の『囲碁天地』15年第3期で巻頭特集「柯潔は這樣鍊成的」(柯潔は斯うして鍛えられた)が組まれており、ソ連の小説家オストロフスキーが全身不随・失明に打ち勝って書いた長篇(1932)『鉄鋼は如何に鍛えられたか』(中国語訳=『鋼鉄是怎样鍊成的』)を踏まえた此の題に即して、古今の個人・集団や国/地域の囲碁の勝利方程式の前提を為す鍊成方式に目を向けてみたい。中国の日・韓打倒の実現は国家隊・碁界全体の智恵の集結・和の所産である処が多いが、李喆が総括した中国式訓練法の「民主拆碁+大量緊碁」(民主

的な着手検討+大量な特訓対局)³¹¹⁾は、^{スポーツ}体育や外国語等の様々な技能の習得と通じる「単純・限定・反覆」の有効性を証明している。

『囲棋天地』2006年第1期(元旦出版・発売)には第1四半期の戦果の予告かの如く、「最前線」欄の「三星特輯3」(三星火災杯特集③)として、「透明的王牌——国家隊集体研究李昌鎬紀実」(透明な切札——実録・^{サムスン}李昌鎬に関する^{イ・チャン・ホ}国家隊の^{ナショナル・チーム}集団研究)と題する報道³¹²⁾がある。去る年の12月8日に三星杯準決勝3番碁(13・15・16)に向けた「戦備」の一環として、^{ナショナル・チーム}国家隊が中国棋院訓練室で対戦予定の^{サムスン}李昌鎬に就いて長時間の対策研究を行った。次に^イ李に当る^{かんたく}胡耀宇と^{もと}古力は過去の同棋戦での対^イ李敗局や^イ李と^{チェ・ユル・ハン}崔哲瀚の対局等を解説し、^{かんたく}馬暁春総教練の主宰の下で^{もと}常昊・^{もと}王磊・^{もと}孔傑・^{もと}王檄等が相手の長短に就いて活発に議論した。「技術含量」(技術の含有量)が高い(構成者張大勇の語)研鑽は衆智の集結でもあるが、敵と仲間の両方に揉まれて其の^そ経験や^{かて}教訓を糧とする「闘論」としても^{ちようほう}重宝されている。仲間同士が手の内を曝し合う見解の公表は国手の思考回路を天下に漏らす事にも成るが、利敵の恐れが無いと見た^い自信は^い李の^い衰退の兆しを掴み取った余裕にも由来した様である。常昊は終盤の極簡単な処で1目損をしたとされる例を見て^い李の寄せはもう神話ではないと言ったが、1目半勝ち見込みの局面でわざと半目勝ちに持って行き古力を刺激したかったのではと某棋士が冗談を飛ばした。「^{それ}其なら恐ろし過ぎる！」と応じた^い孔傑の言葉は^い軽口と^い真実味が交り合っている様に思え、^い手加減で^よ良い加減の結果を^い精確に操作できる^い神業が有り得るのも^い碁の魔力に数えられる。1977年に^{かながわ}神奈川県箱根で行われた^{日本}日本電信電話株式会社の4年に1度の^{全国}全国社員囲碁大会で、^{審判}審判長を務めた^{大竹}大竹英雄名人が最終日に^{優勝}優勝者と^{記念}記念対局(3子置碁)を打った際に、^俱俱に彼と同じ^{木谷}木谷門下の^{宮沢}宮沢吾郎六段(27)と共に^{大盤}大盤解説を担当する^{佐藤}佐藤昌晴七段は中盤で、^已已に^牙牙えた^{打ち}打ち振りで^{相手}相手を^{勝ち}勝ち難い^{非勢}非勢に^{追い}追い込んだ^{名人}名人の^{着手}着手に時々^首首を傾げて、^終終いに^素素つ頓^狂狂な声を上げて「大竹先生は1目勝ちを狙っている！」と叫んだ。結局^其其の^{通り}通り白は^敢敢えて^黒黒を潰さず最後まで並べる様に^進進め^{実際}実際に1目勝ちで^終終ったが、^{対局}対局室から^{大盤}大盤の前に^戻戻った^{名人}名人は^{会場}会場から「本当に1目勝ちに成る様に打たれたのか」と訊かれると、^{直接}直接には^答答えず「私にも^楽楽しませて下さい」と笑った。94年^{NEC}NEC杯(愛媛県松山)の^{立会}立会人として^彼彼は^{前夜}前夜祭で^{当時}当時の^{関係}関係者から^其其の話を聞くと、^{居住}居住まいを正して「若しそんな失礼な事を私が言ったのなら、どうぞお許し下さい。若^わ気の^至至りです」と頭を下げ、^此此の^才才気^煥煥発な^{天才}天才の自分に^厳厳しい一面を知ったという^{感銘}感銘を後日談の書き手に与えた。^其其の10年前に^{高川}高川格との対局を引き当てた^昌昌晴三段の「^歡歡鳴」(嬉しい悲鳴を表す造語)や、2016年^夢夢百合杯で^李李世石の^損損な手に対する^柯柯潔の「^弄弄ぶ^意意地悪」の^猜猜疑と^重重なる1駒から、「^玩玩於^股股掌之上」(自分の^股股と^掌掌を動かす様に^意意の^儘儘で^玩遊ぶ)の^最最小^差差勝を作る^{名人}名人芸が^味味わえる。昭和の最後の^{本因}本因坊戦7番勝負(第43期、1988.5.10~7.21)の第5局(6.29~30)の^観観戦記で、^{作家}作家^{内田}内田^康康夫は^弟弟弟子の^{本因}本因坊^正正樹と^激激突する^挑挑戦者(当時無冠)に^次次の^賛賛辞を送っている。「大竹は^気気配りの人である。

碁ばかり強く常識に欠ける——と思われがちな囲碁人の中にあつて日本棋院の“顔”に品格を与える、一つの要素的な存在である。」³¹⁴⁾ 富士通杯優勝(92)で世界の頂点を極めた「日本棋院の顔」の礼儀正しさも滋味が深い³¹⁵⁾が、若気が盛んな内に棋士も囲碁も童心・敵愾心に衝き動かされる様に伸長・進歩が激しい。

注

- 89) 注 55 文献, 23~25 頁。
90) 注 55 文献, 25 頁。
91) 楊燦「驚世七天」, 『囲碁天地』2016 年第 7 期, 3 頁。
92) 高川格『現代囲碁大系』第十八卷『高川格 下』(高川格解説, 村上明執筆, 講談社, 1983 年)「序」, 1 頁。
93) 高川秀格『秀格鳥驚うろばなし』, 160 頁。
94) 注 79 文献, 166 頁。
95) 藤沢秀行「中国の碁, 聶さんの碁」, 注 82 文献, vi 頁。
96) 馬曉春「先生, 对不起」, 『囲碁天地』2009 年第 11 期, 42 頁。
97) 聶衛平『聶衛平全集』(青島出版社, 2014 年)第 2 集「擂台狂飆」に見える詳述, 「新浪網・新浪競技風暴頻道」転載(題=「聶衛平憶擂台賽 穩扎穩打決勝秀行先生」, 15.7.2)。猶, 本稿の連載第 2 回で引用した電脳網情報の最終閲覧日は, 再校時の 16 年 10 月 28 日である。
98) 注 91 文献, 6 頁。
99) 注 97 に同じ。
100) 注 55 文献, 284~285 頁。
101) 「記憶の一局 No.162 高尾紳路九段編① 第 2 期棋聖戦挑戦手合第五局」, ケーブル TV 囲碁・将棋チャンネル 2016 年 5 月 7 日放送。
102) 注 64 文献, 34~35 頁。
103) 注 71 文献, 9 頁; 注 64 文献, 21・35 頁。
104) 注 55 文献, 136 頁。
105) 『現代囲碁大系』第二十七卷『藤沢秀行 下』(藤沢秀行解説・京野秀夫執筆, 講談社, 1983 年), 194 頁。
106) 「平成の名勝負 囲碁④ 最終局で“四天王”に明暗」(編集委員木村亮), 『日本経済新聞』2004 年 5 月 23 日。
107) 「上達への指南 追悼 藤沢秀行名誉棋聖 この 4 局 (1) 大長考で大石を召し捕る(寄稿連載) 選・高尾紳路九段」, 『読売新聞』2009 年 5 月 12 日。
108) 聶衛平著, 薛至誠整理『我的囲碁之路』, 蜀蓉棋芸出版社, 1987 年, 78~79 頁。本稿筆者訳(以下同じ), 既成の日本語版(注 82 文献)に於ける当該部分は 90~91 頁(以下, 参考までに同書の頁を併記する)。
109) 福屋和憲「棋聖決定七番勝負 第十六期 第 7 局【第 7 譜】」解説, 『読売新聞』1992 年 4 月 8 日。
110) 藤井正義「小林光, 七連覇 新記録を樹立」, 『1992 年版・囲碁年鑑』(『棋道』5 月号臨時増刊号), 日本棋院, 1992 年, 25 頁。

- 111) 注 75 文献, 6~8 頁。記事中の決勝初戦前夜と為る「2012 年 11 月 10 日」は 12 月 10 日の誤記。
- 112) 注 75 文献, 9 頁。
- 113) 注 75 文献, 6 頁。
- 114) 若水「分水嶺」, 『囲棋天地』2013 年第 24 期, 3 頁。
- 115) 注 45 文献, 16~17 頁。
- 116) 厲苒苒・張健東「中日擂台賽 30 周年記念活動 棋聖帰来話当年擂台風雲」, 「人民網・棋牌頻道」, 2015 年 7 月 27 日 ([上海]『新民晚報』より転載, 刊行日未記載); 燕十三「三十年前誰著史」, 『囲棋天地』14 年第 19 期, 26 頁 (写真付き); 曹志林 (八段棋士・囲碁評論家・上海『新民晚報』主任記者)『中日囲棋擂台賽演義』(全 89 回, 初出未詳) 第 33 回「凭海展望 老聶輕抒拼搏情/背水一戰 衛平巧施“毒攻毒”」, 「360Doc 個人図書館」(www.360doc.com)。
- 117) 石田芳夫『現代囲碁大系』第三十八卷『石田芳夫 下』(本人解説, 山本有光執筆, 講談社, 1983 年)「序」, 1 頁。
- 118) 『現代囲碁大系』第三十八卷『石田芳夫 下』, 12 頁。
- 119) 注 118 文献, 33 頁。
- 120) 注 118 文献, 24 頁。
- 121) 注 118 文献, 33 頁。
- 122) 注 118 文献, 34・43 頁。
- 123) 『現代囲碁大系』第三十三卷『林海峯 上』(本人解説, 大石清夫執筆), 講談社, 1980 年, 264 頁。
- 124) 注 118 文献, 55 頁。
- 125) 注 118 文献, 55 頁。
- 126) 注 118 文献, 44 頁。
- 127) 注 93 文献では時期は「いつだったか」としか書いてない (157~158 頁) が, 『現代囲碁大系』第十八卷『高川格 下』では第 2 期と明記されている (197 頁)。
- 128) 注 105 文献, 236 頁。
- 129) 注 105 文献, 214 頁。
- 130) 注 105 文献, 236 頁。
- 131) 高川格「最後の花」, 注 93 文献, 170 頁。
- 132) 注 55 文献, 29 頁。
- 133) 『現代囲碁大系』第十八卷『高川格 下』, 266 頁。
- 134) 注 105 文献, 236 頁。
- 135) 芮乃偉九段「躬逢盛会——現場感受人大戰」, 『囲棋天地』2016 年第 7 期, 105 頁。
- 136) 蒼銘宗・陳宛茜「劉黎兒看王銘琬: 昂貴的洗碗機」, 2005 年 8 月 2 日 ([新浪博客・鴻儒私塾天下帰心] [blog.sina.com.cn/s/blog_6b5cb5fb0100lo5q.html] 10 年 9 月 30 日転載)。
- 137) 「因何而強大——解析李世石強大的動力源泉」([韓国] 韓昌奎執筆・金萬樹七段解説, 『月刊囲碁』より編訳 [趙家強, 掲載号未記載]) に詳述が有る (42 頁)。
- 138) 「姐姐眼中的李世石」(韓国『月刊囲碁』編集長李世娜 [李世石の姐] の談話, 『中央日報』の取材記事より, 掲載日・訳者名未記載), 『囲棋天地』2016 年第 7 期, 1160 頁。
- 139) 「李世石 閃電婚礼」, 『囲棋天地』2006 年第 7 期, 20 頁。
- 140) 謝銳 (記者)「韓棋手淘金中国太爽 一盤棋掙 10 万輪也拿 2 万」, 「騰訊体育微博」, 2015 年 2 月 6 日。
- 141) 陳祖徳『陳祖徳囲碁名局集』, 三一書房, 1994 年, 48 頁; 王劍坤七段「五十年来中国流」, 『囲棋天地』

- 2012年第2・3期, 174~192頁。
- 142) 『現代囲碁大系』第十四卷『島村俊廣』(本人解説, 本田順英執筆), 講談社, 1981年, 192頁。
- 143) 注142文献, 286頁。
- 144) 安永一『中国の碁』, 時事通信社, 1977年, 231~234頁。
- 145) 注144文献, 234・238頁。
- 146) 注144文献, 233~234頁。
- 147) 注144文献, 237頁。
- 148) 注144文献, 1頁。
- 149) 注144文献, 2頁。
- 150) 木谷實・呉清源・安永一『圍碁革命新布石法』, 平凡社, 1934年, 4頁。
- 151) 注144文献, 233頁。
- 152) 『現代囲碁大系』第二十三卷『坂田栄男 下』(本人解説, 諸井憲二執筆), 講談社, 1982年, 211頁。
- 153) 注152文献, 147頁。
- 154) 注152文献, 201頁。
- 155) 注152文献, 221頁。
- 156) 注152文献, 239頁。
- 157) 『現代囲碁大系』第四十二卷『小林光一』(本人解説, 中山典之執筆), 講談社, 1984年, 62頁; 酒井猛『古典名局選集 玄妙道策』, 日本棋院, 91年, 107頁; 注25文献, 上巻167頁・下巻316~317頁。
- 158) 注152文献, 171・231・239頁。
- 159) 注142文献, 226頁。
- 160) 注142文献, 286頁。
- 161) 羽根泰正『天下六段 囲碁戦略 高中国流』, 日本棋院, 1988年, 6頁。
- 162) 『現代囲碁大系』第四十五卷『関西棋院精選集』(佐藤直男・藤木人見・松浦吉洋・関山利夫・小山靖夫・宮本義久・東野弘昭・白石裕・石井新蔵・大山国夫・牛窪義高・牛之浜撮雄・苑田勇一解説, 小野堯範執筆), 講談社, 1981年, 244頁。
- 163) 注162文献, 252頁。
- 164) 『現代囲碁大系』第十七巻『酒井通温・岩田達明・羽根泰正』(本人解説, 本田順英執筆), 講談社, 1982年, 225頁。
- 165) 注164文献, 217頁。第1譜解説「決めて打つ」の冒頭の「鯛中^{あらた}新^{かな}」の振り仮名は、『現代囲碁大系』第十六巻『鯛中新・鈴木越雄・窪内秀知・宮本直毅・本田邦久』(本人解説, 近藤隆史執筆, 講談社, 1982年) 282頁の「鯛中新^{たいなかしん}略年譜」や、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』318頁の「鯛中 新 タイナカシン」の項目の表記とも異なる。
- 166) 注152文献, 171頁
- 167) 注152文献, 107頁
- 168) 『週刊碁』2016年4月18日の「検証! アルファ碁【第3局】 3タテで敗北が決定/弱点判明するも咎められず」(王銘琬九段解説, 上田篤史構成)に、「高段者の16万局の3千万局面(昨年10月時点)」と有り, 開発^{グループ}集団の中心^{メンバー}的な成員^{アマチュア}黄士傑は「大量業余与職業棋手の棋譜」(大量^{アマ}の非職業^{プロ}と職業の棋士の棋譜)と表現し「[AlphaGo 的^イ回答^{セドル}]」[本誌記者取材], 『囲碁天地』同年第7期, 22頁), 同年の『人工知能は碁盤の夢を見るか? アルファ碁 VS 李世^{ホンミンギョ}乂^{キムジノ}』(洪^{ホンミンフ}叟^フ杓^フ・金振^{キムジン}鎬^フ, 洪敏和^{ホンミンフ}訳, 東京創元社)

- では、AlphaGo は^{コミ}達7日半の中国規則に合せられており、^{ルール}亜細亜の一流棋士が^{ネット}電脳網上で中国規則で対局した棋譜を^{ボータル・サイト}囲碁情報蓄積体系から入手して入力した、と言う（16頁）が、関連情報に対する本稿の論評は後に譲る。
- 169) 時越九段解説、張大勇執筆「駭世晨曦」（上）、『囲棋天地』2016年第7期、44頁。
- 170) 『人工知能は碁盤の夢を見るか？ アルファ碁VS李世^{イ・セドゥル}石』、108～109頁。
- 171) 注118文献、200頁。
- 172) 注108文献、74～79頁（日本語版＝85～91頁）。
- 173) 「井山裕太九段が本当に尊敬する3人の棋士」、『NHK 囲碁講座』2014年2月号電子版。
- 174) 注71文献、5～6頁。
- 175) 注55文献、299頁。
- 176) 「坂田全集の学問」、『囲棋天地』2007年第20期、17頁。
- 177) 注173に同じ。
- 178) 注176に同じ。
- 179) 坂田栄男『現代囲碁大系』第二十二巻『坂田栄男 上』（本人解説、諸井憲二執筆、講談社、1980年）「序」、1頁。
- 180) 小西^{こしな}泰三「藤沢秀行 人間と碁」、注105文献、272頁。
- 181) 『現代囲碁大系』第二十二巻『坂田栄男 上』、108頁
- 182) 中野孝次『人生を闘う顔』（新潮社、1982年）、「藤沢秀行 破滅型の天才棋士」の題で注185文献に所収、231頁。
- 183) 三好徹『激闘譜 第一期棋聖決定七番勝負——藤沢秀行 vs. 橋本宇太郎』（読売新聞社、1979年）、「人間 藤沢秀行」の題で注185文献に所収、178頁（巻末「執筆者紹介」中の出典書名[252頁]の内「決定」が欠落している）。
- 184) 注53文献、43～44頁。
- 185) 中野孝次編『日本の名随筆 別巻1 囲碁』（作品社、1991年）所収、167・170頁。
- 186) 注185文献所収、228～229頁。
- 187) 江崎誠致『昭和の碁』、筑摩書房、1967年、147頁。
- 188) 注185文献所収、163～164頁。
- 189) 諸井憲二「坂田、その人と芸」、注152文献、271頁。
- 190) 注25文献、104頁。
- 191) 「ウィキペディア フリー百科事典」（日本語版）の「本因坊秀策」の項目の最後の節「後世への影響」に、有名な話として出ている。当該「事典」の囲碁関係の記述は信憑性に問題が少ないので引用しているが、未記載の出典は閲覧・検索できる範囲に於いて見当たらないので確証を追求して行きたい。
- 192) 楊燦「棋手の扇子」、『囲棋天地』2016年第12期、19頁（写真付き）。
- 193) 張大勇「宇宙的深处 武宮正樹九段特別訪談録」、『囲棋天地』2010年第10期、29頁。
- 194) 注55文献、308頁。
- 195) 注55文献、309～310頁。
- 196) 呉清源『呉清源回想録 以文会友』、白水社、1984年、21頁。
- 197) 「ウィキペディア フリー百科事典」（日本語版）の「本因坊道策」の項目の最後の「その他」の節に、「小林光一は道策に私淑しており、（中略）棋譜はほぼ暗記している」と有るが、出典は要追求。傍証として挙げられるのは、「凄く記憶力の良い方なんです。全部過去の碁を全て憶えちゃった様な」

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(2)(夏剛・夏冰)

という三村智保の小林光一評(NHKテレビ教育チャンネル「囲碁フォーカス」番組,2016年10月23日)である。

- 198) 2014年11月15日の「Yahoo!Japan 知恵袋」に、囲碁の強い人は石を持つ右人差し指の爪が雲母の様に薄くなっているという伝聞の裏付けを求める質問が出た(「miwako1999」より)処、武宮正樹九段が本谷道場で修業していた時そうだったと本で読んだという回答が寄せられた(「minoruy4910」より)。筆者もテレビ棋戦解説等で曾て棋譜を沢山並べて爪が割れたと言う本人の体験談に接した記憶が有るが、本稿では一流棋士の早年の猛勉強の結果であり得る現象として取り上げて置き、膨大な文献に対する点検で得られなかった確証を引き続き探し後に補完できる様にしたい。
- 199) 注108文献,36頁(日本語版=43~44頁)。
- 200) 劉星七段「思緒」,『囲碁天地』2008年第18期,9・11頁。
- 201) 「36問 蘇耀国」,『囲碁天地』2014年第1期,97頁。
- 202) 「為此而生」(劉星七段自戦解説),『囲碁天地』2009年第11期,77頁。
- 203) 「昭和時代坂田棋風別具一格 牛雨田:与李世石相近」(新浪体育訊【報道】),「新浪網・競技風暴頻道」,2010年10月22日。記事中の「牛雨田六段」は前年の昇段結果を反映していない。
- 204) 劉星・趙守洵×王銳(取材)「我想這樣做」,『囲碁天地』2013年第16期,10~12頁。
- 205) 注200文献,13頁。
- 206) 「IGOサイエンス 特別版 グーグルディープマインドチャレンジマッチ 全5局 ダイジェスト」第3局「アルファ碁,3連勝も」,『碁ワールド』2016年5月号,22頁。
- 207) 注108文献,68頁(日本語版=80頁)。
- 208) 注64文献,21頁。
- 209) 注185文献所収,107頁。
- 210) 馬李靈珊(『南方人物週刊』記者)・喬芊(同実習記者)「2006 胡錦濤時刻」,「南方人物週刊網」,2012年3月2日。
- 211) 翌日の中央^C電^C視^T台^V「環球視点」番組で実物の写真が公開され、解説者の^{コメンテーター}論^{コメン}評も加わった。『囲碁天地』掲載の詳報・論評として十三「各有各楽」(2015年第18期,19頁),燕十三「一個人和她的博物館」(同第21期,100頁)等が有る。
- 212) 杜維新・張志強編著『圍棋人機大戰』,成都時代出版社,2016年,27頁。
- 213) 注91文献,7頁。
- 214) 注212文献,20頁。
- 215) 富士田明彦 on Twitter (twitter.com/akihiko_fujita),2016年1月27日21時13分発信。
- 216) 「樊麾獨家回應:我沒放水 昏招都被它抓到了」,[成都]『華西都市報』2016年1月29日,「新浪網 新浪競技風暴」で当日「四川在線—華西都市報」より転載。
- 217) 本人は棋譜が公表されていない此の5局の早碁で2勝した結果を、李世石^イ対^{ホド}AlphaGo戦の直前の取材を受ける際にも強調した(「樊麾:沒想到被電腦5比0 人工^A智能^I幫助理解圍棋」,「騰訊網 科技頻道」2016年3月8日報道,同日「騰訊網 体育頻道」転載)。
- 218) 閻蓋^{えんがい}(人工^A智能^I學者)「關於谷歌圍棋 AI 戰勝歐洲冠軍,圍棋界怎麼說」(本人微博「人工^A智能^I學家 AItitst」[www.aitists.com/author/yg]2016年1月31日,「騰訊網」科技頻道翌日転載)で紹介された^{ネット}電腦^{ネット}網^{ネット}利用^{ネット}者の見方。
- 219) 張大勇「頭条」,『囲碁天地』2016年第5期,19頁。
- 220) 時越九段解説,張大勇執筆「駭世晨曦」(上),『囲碁天地』2016年第7期,52頁。

- 221) 「張大勇 2000 的微博」(weibo.com/u/2521508681), 2014 年 8 月 3 日・10 月 30 日。
- 222) 注 219 に同じ。
- 223) 注 209 に同じ。
- 224) 一例として, 注 170 文献に於ける第 4 局解説 (137~182 頁) の題が「神の 1 手, 78 番目の石」と為り, 第 11・12 譜 (70~78・78~87) 解説「神の一手, 白 78」「揺れる〈アルファ碁〉」(165~166, 167~169 頁) の中で此の賛辞が使われている。
- 225) 洪敏杓九段は「李世石のライバルである中国の古力九段は“神の一手”と表現した」, 「古力九段がいったように, 私も白 78 は神の一手だと思う」と述べている (注 170 文献, 166・167 頁) が, 『囲碁天地』2016 年第 7 期の「世界冠軍眼中の人機大戦」(特約記者瀟風構成) で報じられた古の発言は, 第 4 局の実戦図 4 に有る「白 78 妙! 如果能够成立就是神之一手。」(白 78 は素晴らしい! 成立するなら神の一手と為る), 変化図 5 (白の正しい対応) を提示した上での「實際上白碁の神之一手很可能是不成立的, ……」(実際には白の「神の一手」は極めて高い確率で成り立たないのだ [下略]) である。同号中の時越解説にも「神之一手」が 3 回出ているが, 中国の高手には此の手は別に成立しないと直ぐ見当が付き, 異論の有る「神の一手」は「魔之一手」である可能性が高いという否定的な見解なのである (注 220 文献, 54・55 頁)。『碁ワールド』5 月号の特集には「神の一手」云々は無く, 『週刊碁』4 月 25 日の「検証! アルファ碁【第 4 局】 AI に突然の乱調 / 待望の 1 勝に世界が感動」(王銘琬九段解説, 上田篤史構成) では, 白 78 は第 1 譜 (1~100) の題でもある「渾身の一手」と形容されている。
- 226) 王元八段「天地講義⑥ 打譜」, 『囲碁天地』2005 年第 6 期, 82 頁。
- 227) 杜甫「奉贈韋左丞丈 二十二韻」(747)。
- 228) 注 53 文献, 66~67 頁。
- 229) 『現代囲碁大系』第十二巻『吳清源 下』(本人解説, 藤井正義執筆, 講談社, 1982 年) の「吳清源略年譜」では, 「西暦」欄の「一九一四年 (大正三)」の下の「事項」欄に「五月十九日 中国福建省閩侯県下土垵で生まれる」と有る (279 頁)。『囲碁百科辞典 [改訂増補]』の「日本棋院名誉客員 / 関西棋院名誉客員」欄の履歴でも「1914 年 (民国 3 年, 大正 3 年) 5 月 19 日」とされ (306 頁 [本稿本文中注 245 の番号の後の括弧内で引いた「日本棋院現役棋士」欄内の藤田梧郎の紹介の 2 頁前]), 『昭和囲碁風雲録』にも「大正三年 (一九一四年, 中華民國三年) 五月十九日」と記してある (注 25 文献, 103 頁) が, 吳清源は回想録で「私の誕生は, 中華民國三年, 旧暦の五月十九日である」と書いており (注 196 文献, 16 頁), 桐山桂一は『吳清源とその兄弟——吳家の百年』(岩波書店, 2005 年) の中で, 「新暦に直せば, 六月十二日になるはずである。吳清源も (中略) “旧暦の誕生日しか知らない” という世代である」と指摘している (岩波現代文庫版, 09 年, 56 頁)。『囲碁天地』14 年第 24 期の追悼特集「吳清源 囲碁百年」の冒頭の「吳清源年譜」では, 旧暦を混ぜた「疑似西暦」(笠谷和比古「歴史の年月日 正確な表記を / 西暦の年と和暦の月日 奇妙な合体」[『読売新聞』16 年 9 月 21 日] 参照) と一線を劃す様に, 「▶ 1914 年 / 6 月 12 日 (農曆五月十九日) 生於福建省福州閩侯県吳氏家宅」と為っている (2 頁)。
- 230) 注 53 文献, 7~8 頁。
- 231) 注 53 文献, 12~13 頁。
- 232) 『現代囲碁大系』第十二巻『吳清源 下』, 212 頁。
- 233) 注 53 文献, 13 頁。
- 234) 注 232 文献, 223 頁 (1961 年 2 月 25 日『読売新聞』掲載の観戦記の引用)。
- 235) 注 232 文献, 222 頁。

- 236) 注179文献, 119頁。
- 237) 注71文献, 6頁。
- 238) 注232文献, 214頁。
- 239) 注53文献, 65頁。
- 240) 「聶衛平打牌放水被鄧小平当面斥責」, [香港] 鳳凰衛視「鏘鏘三人行」2009年10月7日放映, 「鳳凰網」同9日全文掲載。
- 241) 「中日播台賽聶衛平11連勝 中国現代囲碁由此転折」, 「国家体育总局棋牌運動管理中心官網」, 2010年1月6日(「中国棋院在線網」より転載, 筆者名・初出日未記載)。
- 242) 陳晋「鄧小平性格的幾個側影及啓示」, 『党的文献』隔月刊(中共中央文献研究室・中央档案館刊)2008年第6期(電子版)。
- 243) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』, [台北] 時報出版, 1994年, 79頁。同書(同年米国刊の原著=*THE PRIVATE LIFE OF CHAIRMAN MAO*)日本語版(新庄 哲夫訳『毛沢東の私生活』, 文藝春秋, 同年)上巻116~117頁に該当の記述が有る。「マージャンは百三十六の牌を一セットとして」は日本麻雀の数で, 著者訳の中国語版の「牌是一百八十四張」(牌は184枚)は中国麻雀の144個の誤りと思われる。
- 244) 注53文献, 66頁。
- 245) 『日本の名随筆 別巻11 囲碁Ⅱ』(中野孝次編, 作品社, 1992年)所収, 113~115頁。
- 246) 『現代囲碁大系』第二十五巻『梶原武雄』(本人解説, 中山典之執筆), 講談社, 1984年, 244頁。
- 247) 注245文献所収, 65~68頁。
- 248) リチャード・ニクソン *LEADERS* (1982), 日本語版(徳岡孝夫訳『指導者とは』, 文藝春秋, 同年)303頁。
- 249) 徐焰(国防大学)「周恩来 睡眠最少的領袖」, 『北京青年報』2001年4月28日。
- 250) 権延赤『走下神壇の毛沢東』, 中外文化出版公司, 1989年, 202頁。
- 251) 注196文献, 221~224頁(起因に関する詳述は166~168頁)。
- 252) 「資訊 胸有丘壑」, 『圍棋天地』2016年第14期, 16頁。
- 253) 「対決過AlphaGo的李世乜与歌手金章勳在独島对弈」, 韓国『朝鮮日報』2016年7月1日(台湾「Yahoo! 奇摩網」より)。
- 254) 「ウィキペディア フリー百科事典」(日本語版)の当該人物の事跡の最初の「反日活動」欄に, 5点目として特記が有り, 同日の『朝鮮日報』の報道が情報源とされている。
- 255) 「ウィキペディア フリー百科事典」(日本語版)の「キム・ジャンフン」の項目の冒頭の紹介は, 氏名の朝鮮語表音文字・漢字表記と生年月日に続いて「韓国の歌手・俳優・反日活動家」と為る。
- 256) 「キム・ジャンフン, イ・セドルとは気持ち通じた! 30日昼12時30分から歴史的な独島対局」, 「囲碁ニュースまとめブログ nitro15」(nitro15.lblog.jp), 2016年6月28日。
- 257) 「竹島で歌を発表/日本が入国拒否/韓国の男性歌手」(ソウル共同), 『毎日新聞』2014年11月11日。
- 258) 韓国『日刊スポーツ』2014年11月10日(翌日の中国「環球網」掲載「韓一歌手入境日本被拒 或因曾登独島唱統一歌曲」[崔琪編訳], 「新華ニュース」掲載「韓国人歌手, 日本に入国を拒否される, 独島上陸や統一歌発表が原因か」[李継東訳]より)。
- 259) 「菅官房長官は“竹島は無関係”/韓国人男性歌手/日本が入国拒否」(ソウル), 『朝日新聞』2014年11月13日。
- 260) 「李昌鎬棋士に会った習主席 “囲碁には人生・世界戦略”」, 韓国『中央日報』日本語版(電子版),

- 2014年7月8日：「結棋縁」、『囲棋天地』同年第14期，14頁；王誼「友誼之橋」，同誌15年第18期，2頁。
- 261) 王銳「総理棋談」、『囲棋天地』2015年第22期，2～3頁。文中の常昊を含む百人青年精英団の首爾到着の「11月31日」は西暦に無い日付で，冒頭の李克強訪韓初日の「10月31日」とも齟齬する。
- 262) 喬婷「又見擂台」、『囲棋天地』2006年第4期，2頁。
- 263) 張大勇「瞄准李世石——直擊国家隊訓練第一槍」、『囲棋天地』2005年第17期，23～30頁；「声音」，同誌同年第21期，22頁；「記念日」，同第23期，17頁。
- 264) 「中韓擂台」、『囲棋天地』2006年第1期，23頁。
- 265) 注262文献，3頁。
- 266) 注140に同じ。
- 267) 余平六段解説・執筆「棋城解甲」、『囲棋天地』2006年第2期，53～57頁。
- 268) 注196文献，192～193頁。
- 269) 注167文献，12頁。
- 270) 石井邦生『わが天才棋士・井山裕太』，集英社インターナショナル，2009年，60頁。
- 271) 注181文献，1頁。
- 272) 諸井憲二「坂田栄男 栄光の軌跡」，注167文献281～282頁。
- 273) 注181文献，同279頁。
- 274) 注272文献（坂田栄男『坂田の碁』[全6巻，平凡社，1963～64年]より引用），同279頁。
- 275) 注272文献，同282頁。
- 276) 注272文献，同282頁。
- 277) 注272文献，同279頁。
- 278) 盧俊和「柯潔は這樣鍊成的」、『囲棋天地』2015年第3期，4頁。
- 279) 注272文献，同282頁。
- 280) 注71文献，4頁。
- 281) 注264に同じ。
- 282) 注262文献，2頁。
- 283) 注264に同じ。
- 284) 注71文献，6頁。
- 285) 李寧「GoRatings 囲棋等級分系統」、『囲棋天地』2016年第15期，74～75頁。
- 286) 「世界棋士レーティング（囲碁）」（<http://sports.geocities.jp/mamumamu0413/total.html>）に見える，2016年2月末時点の成績を反映した世界順位（制定者・公表日未記載）では，井山裕太は柯潔・朴廷桓・時越・李世石・周睿羊・陳耀燁・聿旻廷・古力・姜東潤・朴永訓・唐韋星・柁嘉熹・金志錫・連笑・江維傑・王檄に次ぐ17位と為るが，松原仁の論評（本段落引用）中の出処未詳の李世石5位説は別の順位の実在を示唆する。本段落で引いた韓国発の3月末時点の世界順位（井山＝17位）は，「新浪博客・棋文弈事・棋勝」（blog.sina.com.cn/s/articlelist_1367863801_7_1.html）16年4月28日掲載の「韓国棋院世界排名与欧洲 gorating 排名比較」で報じられている（文中の考案者の氏名「裴太日」は便宜的な音訳と思われるので本稿では直している）。
- 287) 羽生善治×井山裕太「囲碁・将棋頂上対談 七冠を背負う重圧と解放感」、『中央公論』2016年7月号，92～93頁。
- 288) 「井山の偉業を振り返る / 7冠の軌跡 / 井山の心境を徹底取材！」（聞き手・上田），『週刊碁』2016年

5月16日号。

- 289) 石井邦生の記述(注270文献,46~48頁)中の「六十数人中二十九位」に対して、「井山棋聖 “世界”を知った中国での経験」(『NHK 囲碁講座』2013年4月号電子版)では「60人中の29位」と為る。
- 290) 注71文献,6頁。
- 291) 注71文献,6頁。
- 292) 「柯潔:要讓井山“血濺五步” 朴廷桓不過也就這樣」,「中国棋牌網」報道,2014年10月24日;柯潔解説,張大勇執筆「無夢走京都」,『囲碁天地』15年第8期,47・49・54・56頁。
- 293) 注152文献,1頁。
- 294) 注272文献,同283頁。
- 295) 注152文献,1頁。
- 296) 注93文献,140~141頁。
- 297) 張大勇「以此為界」,『囲碁天地』2016年第1期,7頁。
- 298) 注51文献,82頁。
- 299) 「柯潔:要讓井山“血濺五步” 朴廷桓不過也就這樣」(注290参照)。
- 300) 注71文献,5頁。
- 301) 楊爍「漫長的十三年」,『囲碁天地』2016年第2期,10~11頁。
- 302) 佟禹林四段「井山の等待」,『囲碁天地』2016年第2期,49~57頁。「驚艷一勝」は第4(最終)譜(117~166)解説の題。
- 303) 注302文献,53頁。
- 304) 賈倩「禪与碁的結合」,『囲碁天地』2013年第24期,4~5頁。
- 305) 注299文献,11頁。
- 306) 注297に同じ。
- 307) 張大勇「贏碁的哲学」,『囲碁天地』2015年第3期,7頁。
- 308) 注270文献,202頁。
- 309) 李浩然(『体壇週刊』特約記者)「中韓十番碁対決:中国3比6敗北」,[四川]「雅安市棋類運動協會網」2015年10月7日転載(初出日未記載);梁璇(記者)「道場和網絡成就個性棋手 衝段少年成辛酸奠基——90後棋手大規模崛起的背後」,『中国青年報』16年2月7日。
- 310) 喬婷「“權”聚北京」,『囲碁天地』2006年第5期,12頁。
- 311) 李喆「与天地的對話」,2015年第20期,31頁。
- 312) 張大勇構成「透明的王牌——国家隊集体研究李昌鎬紀実」,『囲碁天地』2006年第1期,40~44頁。
- 313) 「“私にも楽しませてください” 大竹英雄九段」,「囲碁往来 中国囲碁新聞『囲碁報』コラム欄原稿」(www.ken-san.jp/yigo/igoourai.html),筆者名・掲載日未記載。
- 314) 「第43期本因坊戦七番勝負【第5局の2】」(観戦記 内田康夫),『毎日新聞』1988年7月18日。

夏 剛 (立命館大学国際関係学部教授)

夏 冰 (京都囲碁道場師範)

围棋之“酷”与人智之“魔”

——顶级智力竞技的原理及中、韩、日、人工智能4强的特质、走向（2）

本部分着眼棋手、棋道的发展动力及纯真天性之一的童心、上进心及对抗意识，将藤泽秀行栽培恐或威胁本国的“中国军团”和聂卫平推崇颠覆自身理念的 *AlphaGo* 为师等，视作围棋所具超越国境、传统、得失之魅力及“人生如棋，简单至真”原理使然的可喜现象。

继而由“阿尔发高”活用的“中国流”布局之演变探求 20 世纪以来的围棋创新走向，从 1930 年代与木谷实、吴清源共兴新布局的业余高手安永一首倡到中国国手引进、推广，再经岛村俊广“逆输入”日本而风靡多年并至今在韩国亦不衰、被人工智能吸取的历程，指出跨国、跨时代乃至跨人机界线的相互切磋琢磨、共同发扬光大所产生的进化效应。

进而回顾高部道平访华（1909~10）促使围棋发源国走上废除陈规、打破停滞之路，发现中国棋界对现代化之师自“仿日、随日”经“抗日、追日”至“亲日、知日”而后“脱日、排日”的转折，并试论 *AlphaGo* 出世基于古代中国→江户~昭和的日本→90 年代起东亚 3 强的进步。

作为探求增进棋艺之要因的一环，还聚焦 20 世纪“棋神”吴清源的归属意识和精神力量，在其独步日本棋坛的伟业深层看到民族自尊心、个人荣誉感的支撑、推动，论及这两点对中、韩围棋崛起巨变和李世石抗击 *AlphaGo* 大战也起到了增光作用。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

（夏 冰，京都围棋道场教师）